

# 町横尾遺跡Ⅱ

—長野県埴科郡坂城町坂都1号線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書—

2008.3

坂 城 町  
坂城町教育委員会

# 町横尾遺跡Ⅱ

2008.3

坂 城 町  
坂城町教育委員会



町横尾遺跡Ⅱ（南西より）



町横尾遺跡Ⅱ（南より）

## 序

坂城町教育委員会教育長 長谷川 臣

今回発掘調査を実施した町横尾遺跡は、坂城町大字南条を西に流下する谷川によって形成された扇状地のほぼ扇央部に立地しています。本遺跡の北側は中之条遺跡群で、かつての発掘調査で縄文時代～平安時代の集落址が確認されています。また、南側には金井東遺跡群が広がっており、同遺跡群の中で最大の遺跡である保地遺跡では縄文時代後・晩期の遺構や遺物が多く発見され注目を集めました。このように、今回の発掘調査地点は坂城町の中でも特に遺跡の多く存在する場所であります。

今回の発掘調査では、縄文時代～平安時代の住居址が発見されました。3棟調査された縄文時代の住居址からは、縄文時代前期の深鉢という煮炊きを使う土器や、黒耀石で作られた石器などが発見されました。弥生時代の住居址からは、真っ赤に顔料を塗られた土器群が出土しました。これらは、煮炊き用の「甕」、貯蔵用の「壺」、盛り付け用の「高坏」など、生活に必要な土器類が一そろいになっていました。住居址から出土した遺物を見ることで当時の暮らしぶりが想像できる貴重な発見でした。また、平安時代の住居址からは器の外面に墨で文字の書かれた「墨書土器」が発見されました。これは坂城町では初めてのことで、坂城町では最古の文字資料となりました。

このほか、鉄製品製作に関わると思われる遺物の出土した住居址も発見され、今後、坂城のもの作りの歴史を考える上で貴重な資料と言えるでしょう。

最後に町横尾遺跡Ⅱの発掘調査は、土中に眠る文化遺産の重要性を理解していただいた関係者の皆様方のご支援とご協力によって行うことができました。厚く御礼申し上げます。また、現地において作業にあられた皆様には、異常気象とも言える夏の暑い中、献身的な努力と、古代文化解明へのゆるぎない情熱によって、調査を無事終了させていただいたことを感謝いたします。さらに、関係機関、関係各位には、文化財保護行政の本旨をご理解くださり、ご協力いただきましたことに心から御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。








## 例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町坂都1号線道路改良事業に伴う町横尾遺跡Ⅱの発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、坂城町より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積  
町横尾遺跡Ⅱ 長野県埴科郡坂城町大字南条4682-1ほか、約800㎡
- 4 調査期間 試掘調査 平成18年8月17日～8月18日  
現地調査 平成19年6月5日～平成19年8月9日  
整理調査 平成19年8月20日～平成20年3月19日
- 5 本書の主な執筆・編集は、助川・田中・時信が行った。
- 6 本書掲載の土器及び石器観察表は田中が作成した。
- 7 本書の作成にあたり、助川・田中・時信のほか、朝倉、天田、坂巻、萩野が主な作業を行った。
- 8 本書で使用した航空写真は、株式会社写真測図研究所が撮影したものである。
- 9 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 10 本調査及び本書作成にあたって、下記の方々や機関から御配慮を得た。記して感謝の意を表したい。

(敬称略、五十音順)

市川桂子、倉澤正幸、小林建築(町横尾)、(社)更埴地域シルバー人材センター、鈴木徳雄、大工原豊、谷藤保彦、平川 南、町田勝則、三木陽平、山口逸弘、山崎まゆみ

## 凡 例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。  
H→竪穴住居址 F→掘立柱建物址 R→製鉄関連遺構 D→土坑址 Q→特殊遺構  
P→ピット M→溝状遺構
- 2 遺構名は、時代別ではなく発掘調査時における命名順である。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は該当箇所スケールの上に記した。
- 4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。  
遺構 →構築土 →焼土 →カマド  
遺物 →須恵器断面 →磨滅範囲 →釉範囲 →赤色塗彩範囲 ●→含繊維
- 5 遺物の挿図中での表記は、第1図1は、簡易的に1-1と表記した。
- 6 土層の色調は『新版 標準土色帖』の記載に基づいている。
- 7 出土遺物の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、-は不明、( )が残存値、< >が推定値、( )・< >がない場合は完存値を示し、単位はcmである。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第 2 節 調査の構成	2
第 3 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	3
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 調査の概要	7
第 1 節 調査の方法	7
第 2 節 基本層序	8
第 3 節 検出された遺構・遺物	8
第 IV 章 調査の結果	10
第 1 節 竪穴住居址	10
第 2 節 土坑址	38
第 3 節 その他の遺構	43
黒耀石分類概念図・黒耀石出土数表	45
掲載土器観察表	46
掲載石器観察表	49
第 V 章 総 括	54
写真図版	55
報告書抄録	72



# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機と経緯

町横尾遺跡は、坂城町大字南条に所在し、標高424m前後を測る谷川によって形成された扇状地の扇中央部に位置している。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の散布地とされてはいるが、同遺跡内に戦国時代の国人領主村上義清の子にあたる村上景国が処ったとされる観音坂城跡も存在しており、関連する中世の遺構の存在が予想されるなど、古代・中世の遺跡である可能性が高い。平成8年度に実施された坂城町土地開発公社の行う宅地造成にともなう発掘調査によって、古代に位置づけられる集落址が判明している。

今回、この地に坂都1号線の道路改良事業が計画され、遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、原因者である坂城町建設課（当時は都市・下水課）と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、試掘調査を実施して遺跡の状況を確認することとなり、平成18年8月17日から試掘調査を実施した。開発対象地に6箇所の特レンチを設定して遺構・遺物の確認を行った結果、3箇所の特レンチで遺構・遺物が検出された。遺構は開発対象地の中央付近に集中する傾向が見えた。この結果を基に再度協議した結果、道路拡幅部分に関しては発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することとなった。



第 1 図 町横尾遺跡II位置図 (1 : 25,000)



## 第2節 調査の構成

### 発掘調査体制

調査担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）、時信 武史（坂城町教育委員会学芸員）

調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、萩野れい子（以上、町臨時職員）

調査協力員 上原邦夫、太田武夫、佐藤司、竹内佳男、千野正彦、塚田義勝、柳原喜伸、（以上、更埴地域シルバー人材センター）

### 整理調査体制

調査担当者 助川 朋広（前出）、時信 武史（前出）

調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、萩野れい子（以上、町臨時職員）

調査協力員 荒川園子、三井重子、滝沢かつ子、塚田智子（以上、更埴地域シルバー人材センター）

### （事務局）

教育長 柳澤 哲（～平成19年5月31日）

教育長 長谷川 臣（平成19年6月1日～）

教育文化課長 西沢 悦子（平成19年4月1日～）

文化財係長 助川 朋広

文化財係 時信 武史

朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、千野美樹、中沢あつみ、萩野れい子  
（以上、町臨時職員）

## 第3節 調査日誌

### 試掘調査・発掘調査

平成18年8月17日 試掘調査開始。

8月18日 試掘調査終了。

平成19年6月5日 発掘調査開始。重機による表土剥ぎ開始。

平成19年6月11日 表土剥ぎ終了。遺構検出開始。

平成19年6月13日 遺構掘り下げ開始。

平成19年7月22日 現地説明会開催、約60名参加。

平成19年7月27日 遺構掘り下げ終了。

平成19年7月24日 遺構実測終了。

平成19年7月25日 航空写真撮影。

平成19年8月7日 埋め戻し開始。

平成19年8月9日 埋め戻し終了。

平成19年度中整理作業及び報告書作成。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。町の地形は、中央部を貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだした扇状地によって形づくられた小盆地（坂城盆地）に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ツ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた小盆地状をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業となっており、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

### 第2節 歴史的環境

ここで、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について概略的にふれておきたい。（括弧内の数字は5、6ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す）

坂城町で最古の遺物は、約14,000～15,000年前の後期旧石器時代の上ヶ屋型彫刻器とされる石器である。この石器は南条地区の保地遺跡（3-1）より採集されたものであるが、本出土品以外には込山D遺跡に槍先型尖頭器の出土があるが、詳細は不明である。

縄文時代の遺構・遺物では早期押型文系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡（30-3）からも押型文系の土器片が少量出土しているが、これらは現在整理中である。この他に縄文時代前期・中期の土器も出土している。後期・晩期では、学史的にも有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は縄文時代後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の検出が『考古学雑誌』に報告されている（関1966）。後者については、縄文時代晩期に位置づけられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された2号墓址が注目される。その他、坂城地区の込山D遺跡（30-4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。

弥生時代では、中期以前の調査例がないため状況は不明である。後期後半では、平成5年度に南条地区の塚田遺跡（1-7）で発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、土器、石器、土製品、及び鉄製品が出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平1号墳・2号墳が挙げられる（註1）。これらは、平成5年度に実施された上信越自動車道建設に伴う発掘調査で、埴輪や土器などの出土品から、1号墳は5世紀第2四半期後半、2号墳は5世紀第2四半期前半に位置づけられた（若林1999）。後期古墳では、町内でいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。埋葬施設に千曲川水系最大級の横穴式石室を持ち、

全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落址は町内においても多く検出され、特に環状に土器が配列された祭祀遺構が検出された南条地区の青木下遺跡Ⅱ（1-8）が注目される。奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群（8）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、宮上遺跡（8-5）、北川原遺跡（8-6）、豊饒堂遺跡（20）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡（32）があり、瓦の生産が行われていたことが判明し、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に8世紀末～9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺（54）に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千曲市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

平安時代後期、寛治8年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の坂城地区の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡がある。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚（55）をはじめとする経塚と中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われたが、平成4年の調査では、経塚の年代は14世紀第2四半期とされ、その周辺の五輪塔群の造営時期は14世紀第2四半期から16世紀前半頃に位置づけられている（若林1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡の学術調査として学史に位置づけられるものであった。

江戸時代に入ると、現在の坂城地区を主体とする坂木村、中之条地区を主体とする中之条村には幕府の代官所が置かれ、以後明治維新まで天領として支配された。このことから、この地域を重要視していたことが看取される。代官所は最初、坂木（61）に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永8年（1797）には中之条に代官所が置かれるようになった。

以上、近世までの坂城町の歴史を概略した。

註1 周知の御堂川古墳群東平支群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

#### 参考文献（五十音順・敬称略）

- 坂城町教育委員会 1978『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告』 1979『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告』 1993『宮上遺跡Ⅱ』 1995『東裏遺跡』 1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺裏遺跡・東町遺跡』 1996『寺浦遺跡Ⅱ』 2000『開畝遺跡Ⅲ』 2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 2002『保地遺跡Ⅱ』
- 関 孝一 1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号
- 森嶋 稔ほか 1981『坂城町史』中巻 歴史編（一）
- 柳沢 亮 1998「第5節 開畝遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 若林 卓 1999「第9章 東平古墳群」「第11章 観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』（財）長野県埋蔵文化財センター



坂城町遺跡分布図

図面番号	遺跡名	種別	時代
1	南条遺跡群	集落址	弥生~平安
-1	南条遺跡群 東裏遺跡	集落址	弥生~平安
-2	南条遺跡群 御殿裏遺跡(鼠宿)	集落址	弥生~平安
-3	南条遺跡群 百々目遺跡	集落址	弥生~平安
-4	南条遺跡群 中町遺跡(新地)	集落址	弥生~平安
-5	南条遺跡群 田町遺跡	集落址	弥生~平安
-6	南条遺跡群 廻り目遺跡	集落址	弥生~平安
-7	南条遺跡群 塚田遺跡(田端)	集落址	弥生~平安
-8	南条遺跡群 清水下遺跡	水田址、祭祀跡	弥生~平安
2	金井西遺跡群	集落址	縄文~平安
-1	金井西遺跡群 金井遺跡	集落址	縄文~平安
-2	金井西遺跡群 社宮神遺跡(金井西)	集落址	縄文~平安
-3	金井西遺跡群 並木下遺跡	集落址	縄文~平安
3	金井東遺跡群	集落址	縄文~平安
-1	金井東遺跡群 保地遺跡	集落址	縄文~平安
-2	金井東遺跡群 山金井遺跡	集落址	縄文~平安
-3	金井東遺跡群 大木久保遺跡(南条小学校敷地)	集落址	縄文~平安
-4	金井東遺跡群 酒玉遺跡	集落址	縄文~平安
4	栗ヶ谷古墳	古墳	古墳
5	社宮神経塚	経塚	中世
6	町横尾遺跡	散布地	縄文~平安
7	北畑古墳	古墳	古墳(後期)
8	中之条遺跡群	集落址	縄文~平安
-1	中之条遺跡群 寺浦遺跡	集落址	縄文~平安
-2	中之条遺跡群 上町遺跡	集落址	弥生~平安
-3	中之条遺跡群 東町遺跡	集落址	弥生~平安
-4	中之条遺跡群 北浦遺跡	集落址	縄文~平安
-5	中之条遺跡群 宮上遺跡	集落址	縄文~平安
-6	中之条遺跡群 北川原遺跡	集落址	縄文~平安
9	南条塚古墳(塚穴古墳)	古墳	古墳(後期)
10	谷川古墳群	古墳	古墳(後期)
-1	谷川古墳群 入横尾支群 向田古墳	古墳	古墳(後期)
-2	谷川古墳群 入横尾支群 刈塚古墳	古墳	古墳(後期)
11	入横尾遺跡	散布地	平安
12	谷川古墳群 上原支群	古墳	古墳(後期)
13	前原墳墓群	墳墓	中世~近世
14	御堂川古墳群 山口支群	古墳	古墳(後期)
15	山崎遺跡	散布地	縄文
16	御堂川古墳群 山崎支群	古墳	古墳(後期)
17	御堂川古墳群 前山支群	古墳	古墳(後期)
-1	御堂川古墳群 前山1号墳	古墳	古墳(後期)
-2	御堂川古墳群 前山2号墳	古墳	古墳(後期)
-3	御堂川古墳群 前山3号墳	古墳	古墳(後期)
-4	御堂川古墳群 前山4号墳	古墳	古墳(後期)
-5	御堂川古墳群 前山5号墳	古墳	古墳(後期)
-6	御堂川古墳群 前山6号墳	古墳	古墳(後期)
-7	御堂川古墳群 前山7号墳	古墳	古墳(後期)
-8	御堂川古墳群 前山8号墳	古墳	古墳(後期)
-9	御堂川古墳群 前山9号墳	古墳	古墳(後期)
-10	御堂川古墳群 前山10号墳	古墳	古墳(後期)
-11	御堂川古墳群 前山11号墳	古墳	古墳(後期)
-12	御堂川古墳群 前山12号墳	古墳	古墳(後期)
-13	御堂川古墳群 前山13号墳	古墳	古墳(後期)
-14	御堂川古墳群 前山14号墳	古墳	古墳(後期)
18	御堂川古墳群 東平支群 二塚古墳	古墳	古墳(後期)
19	御堂川古墳群 山田支群	古墳	古墳(後期)
20	豊頼堂遺跡(山崎北遺跡)	集落址	縄文~弥生
21	開成遺跡	集落	弥生~平安
22	人塚古墳	古墳	古墳(後期)
23	四ツ屋遺跡群	集落址	縄文~平安
24	戊久保遺跡	集落址	古墳~平安
25	入田遺跡	散布地	奈良~平安
26	塚内古墳(御所沢古墳)	古墳	古墳(後期)
27	金比羅山遺跡	散布地	縄文~平安
28	蓬平経塚	経塚	中世
29	岡の原遺跡	窯跡	平安
30	込山遺跡群	集落址	縄文~平安
-1	込山遺跡群 込山A遺跡(水上)	集落址	縄文~平安
-2	込山遺跡群 込山B遺跡(社宮神)	集落址	縄文~平安
-3	込山遺跡群 込山C遺跡(込山)	集落址	縄文~平安
-4	込山遺跡群 込山D遺跡(横町)	集落址	縄文~平安
-5	込山遺跡群 込山E遺跡(立町)	集落址	縄文~平安
31	日名沢遺跡群	集落址	弥生~平安
-1	日名沢遺跡群 日名沢遺跡	集落址	弥生~平安
-2	日名沢遺跡群 丸山遺跡	集落址	弥生~平安
32	土井ノ入窯跡	窯跡	奈良~平安
33	平林遺跡	散布地	縄文

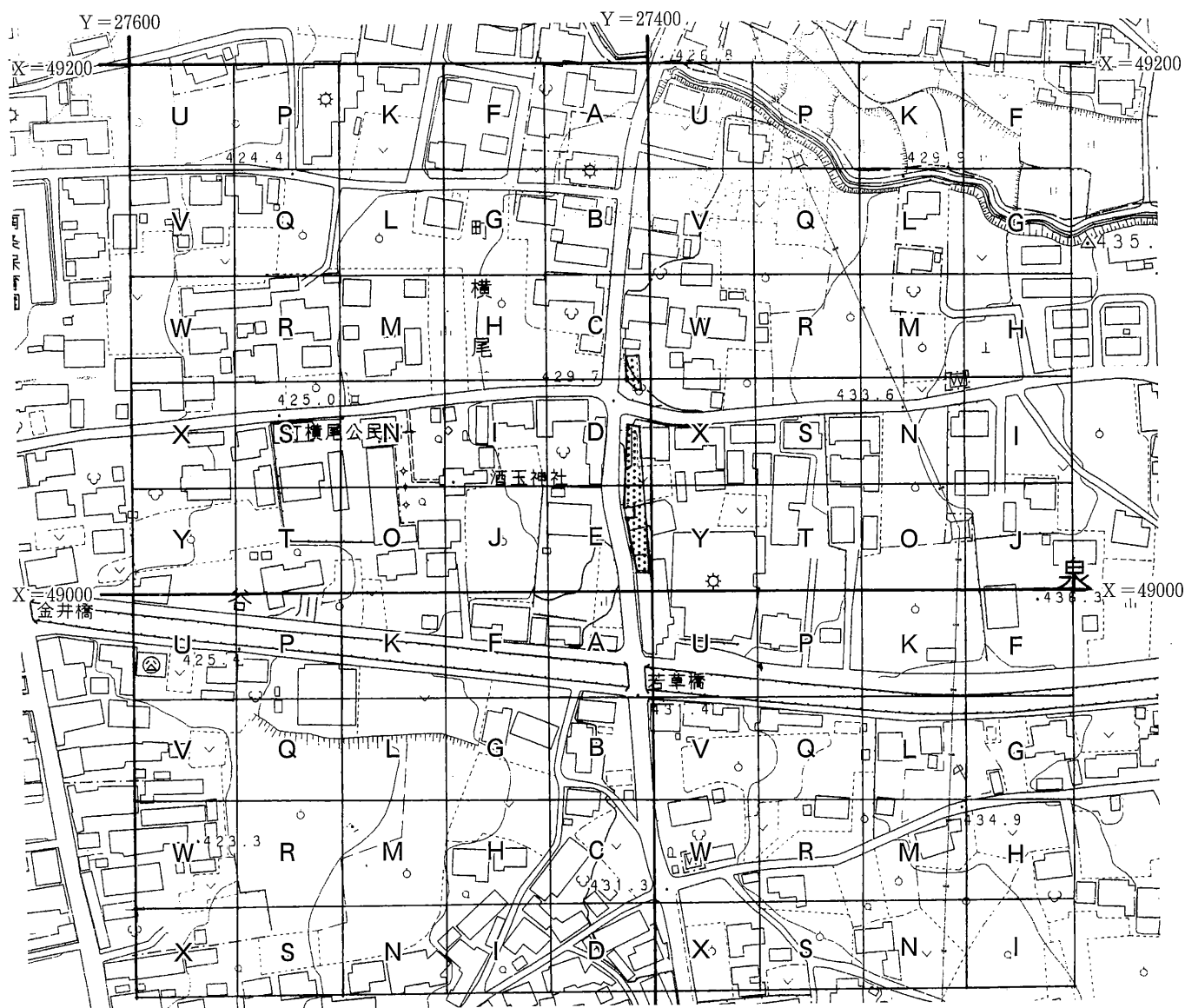
図面番号	遺跡名	種別	時代
34	垣外窯跡	窯跡	平安
35	平沢遺跡	散布地	縄文
36	和平遺跡群	集落址、散布地	縄文~平安
-1	和平遺跡群 和平A遺跡	集落址	縄文~平安
-2	和平遺跡群 和平B遺跡	散布地	弥生
-3	和平遺跡群 和平C遺跡	散布地	平安
37	金比羅山古墳	古墳	古墳(後期)
38	村上氏館跡	城館跡	中世
39	馬の背遺跡	散布地	縄文
40	北日名経塚	経塚	中世
41	北日名塚穴1号墳	古墳	古墳(後期)
-1	北日名塚穴1号墳	古墳	古墳(後期)
-2	北日名塚穴2号墳	古墳	古墳(後期)
42	梅ノ木遺跡	散布地	縄文
43	栗田窯跡	窯跡	奈良
44	葛尾城跡	城館跡	中世
45	出浦沢古墳群	古墳	古墳(後期)
-1	出浦沢古墳群 出浦支群1号墳	古墳	古墳(後期)
-2	出浦沢古墳群 出浦支群2号墳	古墳	古墳(後期)
-3	出浦沢古墳群 出浦支群3号墳	古墳	古墳(後期)
-4	出浦沢古墳群 出浦支群4号墳	古墳	古墳(後期)
-5	出浦沢古墳群 出浦支群5号墳	古墳	古墳(後期)
-6	出浦沢古墳群 島支群1号墳	古墳	古墳(後期)
-7	出浦沢古墳群 島支群2号墳	古墳	古墳(後期)
46	島遺跡	集落址	弥生~平安
47	福沢古墳群	古墳	古墳(後期)
-1	福沢古墳群 小野沢支群1号墳(御厨社古墳)	古墳	古墳(後期)
-2	福沢古墳群 小野沢支群2号墳	古墳	古墳(後期)
-3	福沢古墳群 小野沢支群3号墳(ヤックラ古墳)	古墳	古墳(後期)
-4	福沢古墳群 小野沢支群4号墳	古墳	古墳(後期)
48	小野沢遺跡	集落址	弥生~平安
49	福沢古墳群 越堂支群	古墳	古墳(後期)
50	福泉寺裏古墳	古墳	古墳(後期)
51	狐塚城跡	城館跡	中世
52	三水城跡	城館跡	中世
53	開成製鉄遺跡	製鉄跡	中世
54	込山原寺跡	寺院跡	平安
55	観音平経塚	経塚	中世
56	栗田小跡跡	製鉄跡	中世
57	堀之原遺跡	集落址	奈良~平安
58	南日名遺跡	集落址	弥生~平安
59	葛尾城根小屋跡	城館跡	中世
60	姫城跡	城館跡	中世
61	坂木代官所跡	屋敷跡	近世
62	田町遺跡群	散布地	古墳~平安
63	御所沢墳墓群	墳墓	中世
64	雷平窯跡	窯跡	平安
65	中之条石切場跡	採掘跡	近世
66	紙沢古墳	古墳	古墳(後期)
67	中之条代官所跡	屋敷跡	近世
68	萩組窯跡	窯跡	平安
69	観音坂城跡	城館跡	中世
70	南鯉の川遺跡(吉祥寺跡)	散布地寺院跡	奈良~中世
71	口留番所跡	屋敷跡	近世
72	和合城跡	城館跡	中世
73	高ツヤ城跡	城館跡	中世
74	虚空蔵山城跡	城館跡	中世
75	地獄沢黄鉄鉱採掘跡	採掘跡	近世
76	藤岩遺跡	散布地	平安
77	出浦城跡	城館跡	中世
78	上五明茶里水田址	水田址	平安~近世
79	出浦遺跡	集落址	縄文~平安
80	村上氏館跡	城館跡	中世
81	福沢氏居館跡	城館跡	中世
82	小野沢窯跡	窯跡	奈良~平安
83	福沢古墳群	古墳	古墳(後期)
-1	福沢古墳群 五狭支群1号墳	古墳	古墳(後期)
-2	福沢古墳群 五狭支群2号墳	古墳	古墳(後期)
-3	福沢古墳群 五狭支群3号墳	古墳	古墳(後期)
84	荒宿遺跡	集落址	縄文~平安
85	網掛原遺跡	集落址	縄文~平安
86	祭記跡	祭祀跡	平安
87	島黄銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
88	島マンガン鉱採掘跡	採掘跡	近代
89	上平黄銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
90	横吹北国街道跡	街道跡	近世

### 第三章 調査の概要

#### 第1節 調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺で実施される遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、平成14年4月施行の世界測地系2000の座標軸を基にグリッドを組んだ。

グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第3図）し、北東端より「A・B・C…Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査ではC・D・E区が発掘調査の対象グリッドである。また、その中グリッドを4m×4mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3…10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う…こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を「Oグリッド」というように命名し、調査に係るグリッドの呼称は例えば「Oあ1グリッド」とし、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、基本的に1/20を基準として簡易遣り方実測にて行った。

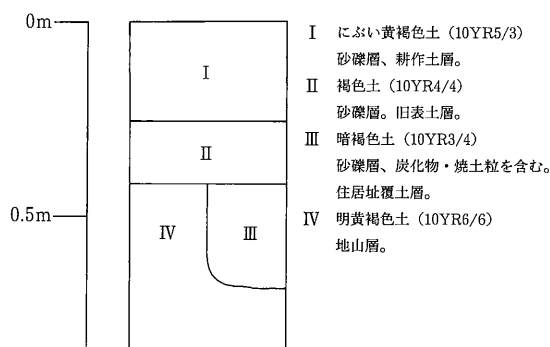


第3図 町横尾遺跡Ⅱ発掘調査区設定図（1：2,500）

## 第2節 基本層序

本調査区の基本層序は右図に柱状図を示したとおりである。I層は砂礫を多く含むにぶい黄褐色土層で、耕作土である。II層は褐色土層で、旧表土層である。III層はいわゆる遺構の覆土となる。IV層は明黄褐色の砂礫層で、地山である。

以上が本調査区の基本層序であるが、調査区南部では過去に行われた攪乱や造成が直接地山面まで及んでいた。



第4図 基本層序模式図

## 第3節 検出された遺構・遺物

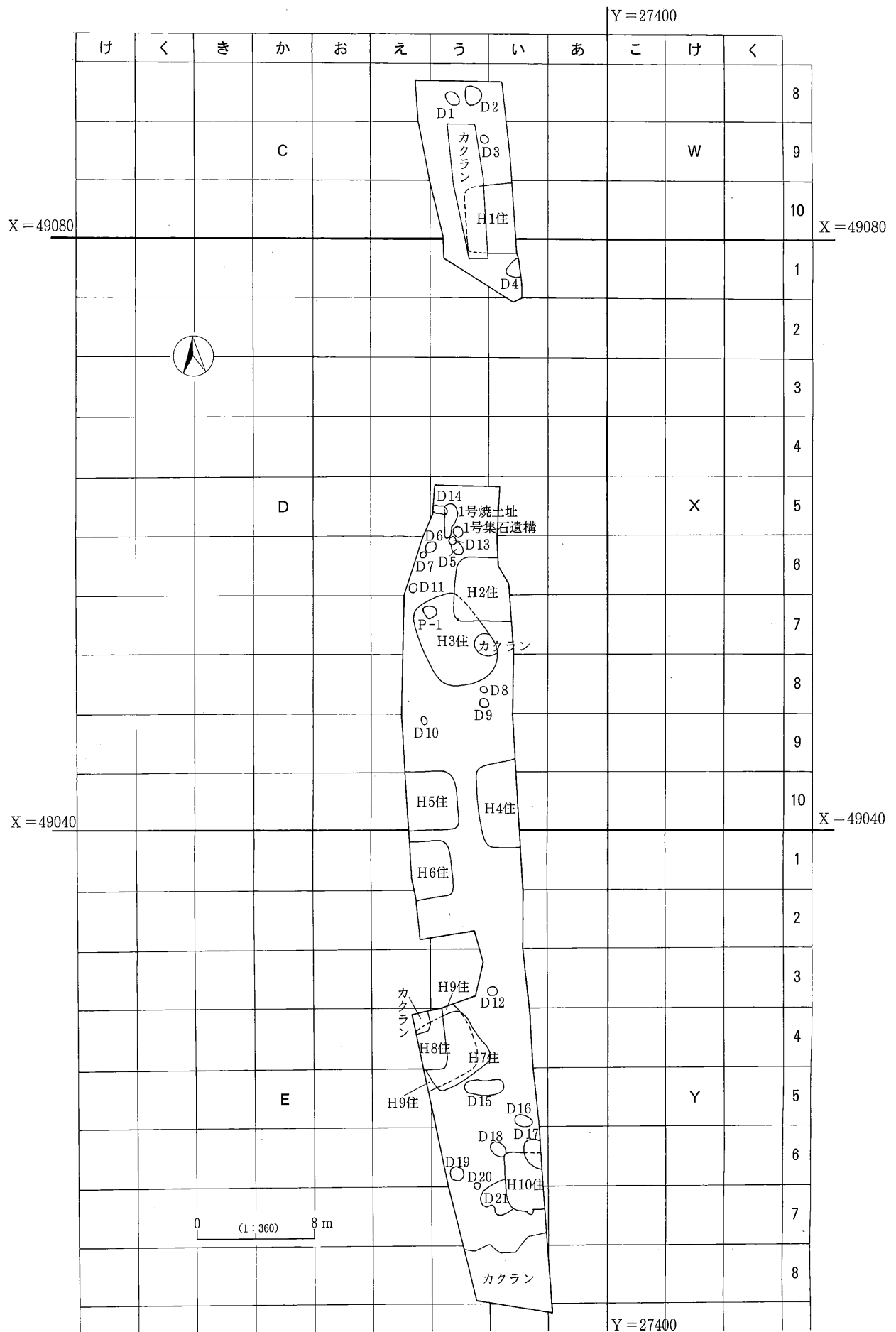
本調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構)

縄文時代	竪穴住居址	3棟
	土坑址	4基
弥生時代	竪穴住居址	1棟
	土坑址	1基
古墳時代	竪穴住居址	2棟
奈良・平安時代	竪穴住居址	4棟
中世	土坑址	1基
時期不明	土坑址	15基
	集石遺構	1基
	焼土址	1基

遺物)

縄文時代	土器・石器
弥生時代	土器・石器
古墳時代	土師器
奈良・平安時代	土師器・須恵器
中世	古銭



第5図 町横尾遺跡II遺構配置図

## 第IV章 調査の結果

### 第1節 竪穴住居址

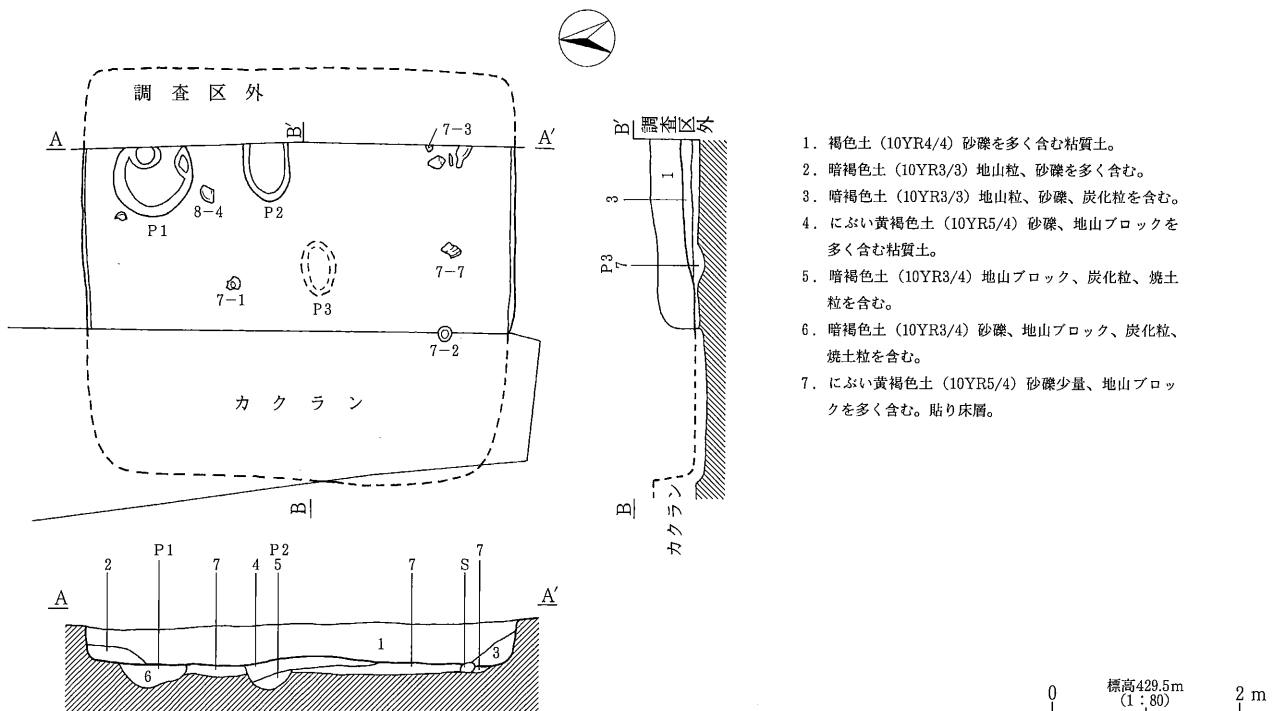
#### (1) H1号住居址

##### 遺構 (第6図)

検出位置：Cい10、Cう10、Dい1、Dう1グリッド。重複関係：西側は攪乱を受ける。東側は調査区外未検出のため不明である。平面形態：調査区外など未検出であるが、概ね4.6m×4.6mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-87°-Eを指す。覆土：暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。カマド：今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。床面の状況：概ね平坦であった。地山を2段に掘り込んで、床土を敷きこんでいた。この床土は執拗なまでも叩き占められていた。掘り方の底面は地山砂礫層の礫が突出していた。ピット：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址の覆土上層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は中層以下からの出土であった。7-2は床面直上から出土した。柱穴：本住居址では支柱穴は確認できなかった。

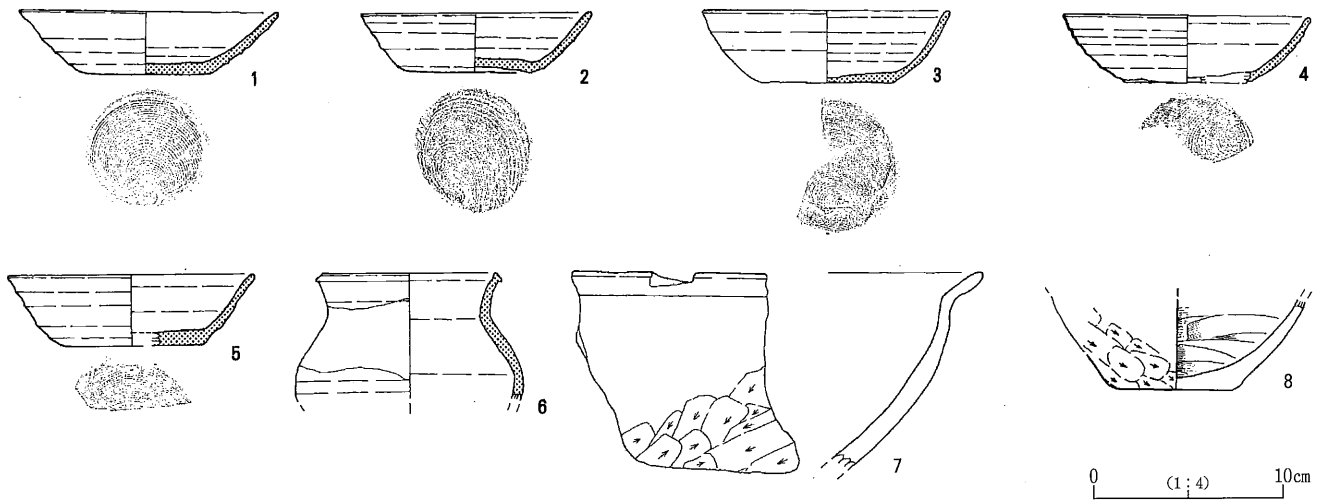
##### 遺物 (第7・8図、第1・4・5表)

7-1～5は須恵器坏である。底部に明瞭な回転糸切り痕を残す。6は須恵器の壺である。7は土師器の鉢である。8は土師器の甕でヘラケズリが顕著である。8-1～3は黒耀石である。1は石鏃の未製品である。2は石鏃の素材である。3は再加工痕のみとめられる剥片である。4は磨石で、表面と下側面に広く磨滅痕が認められる。時期：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。

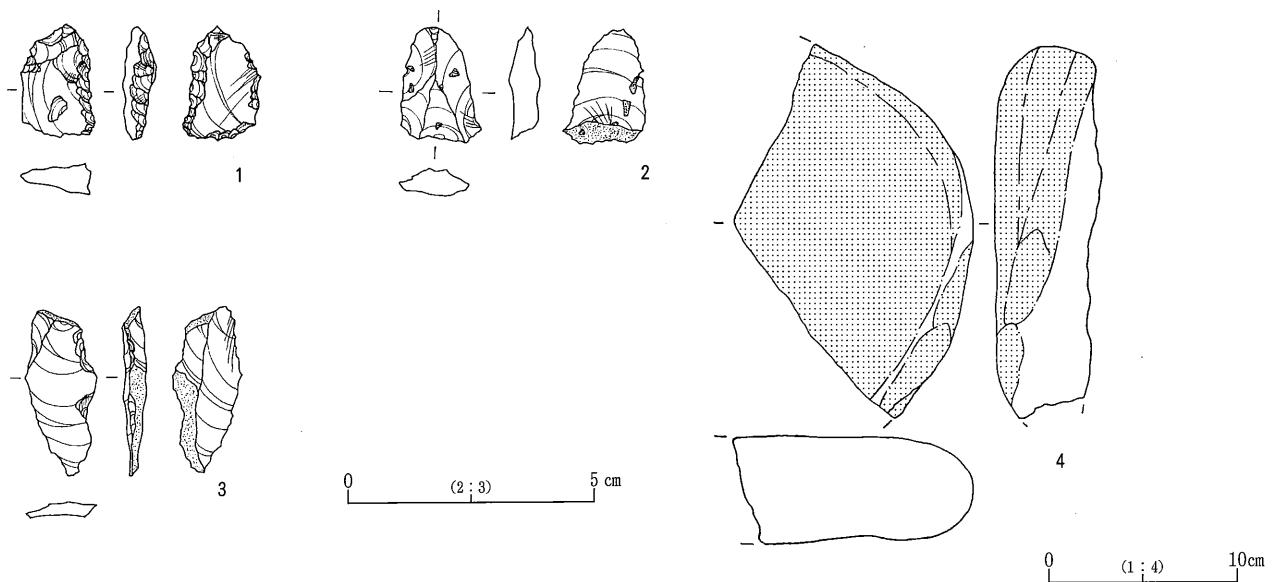


第6図 H1号住居址実測図





第7図 H1号住居址出土土器実測図

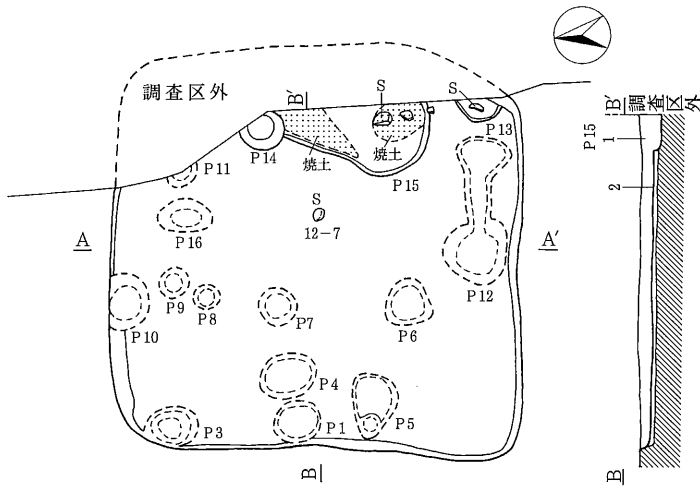


第8図 H1号住居址出土石器実測図

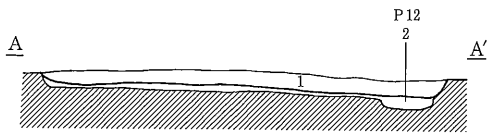
## (2) H2号住居址

### 遺構 (第9図)

**検出位置：**Dい6、Dう6、Dい7、Dう7グリッド。**重複関係：**東側が調査区外未検出のため不明である。  
**平面形態：**調査区外など未検出であるが、概ね4.3m×4.3mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-90°-Eを指す。**覆土：**黒褐色・暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。  
**カマド：**今回の調査では検出されなかった。P15付近に炭化粒や焼土粒が多く見られることなどから、東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況：**概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット：**床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況：**住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴：**本住居址では主柱穴は確認できなかった。

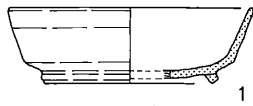


1. 黒褐色土 (10YR3/2) 砂礫を少量、焼土粒を微量含む。
2. におい黄褐色土 (10YR5/4) 砂礫、地山ブロックを多く含む。貼り床層。



0 標高429.6m (1:80) 2 m

第9図 H2号住居址実測図



0 (1:4) 10cm

第10図 H2号住居址出土土器実測図

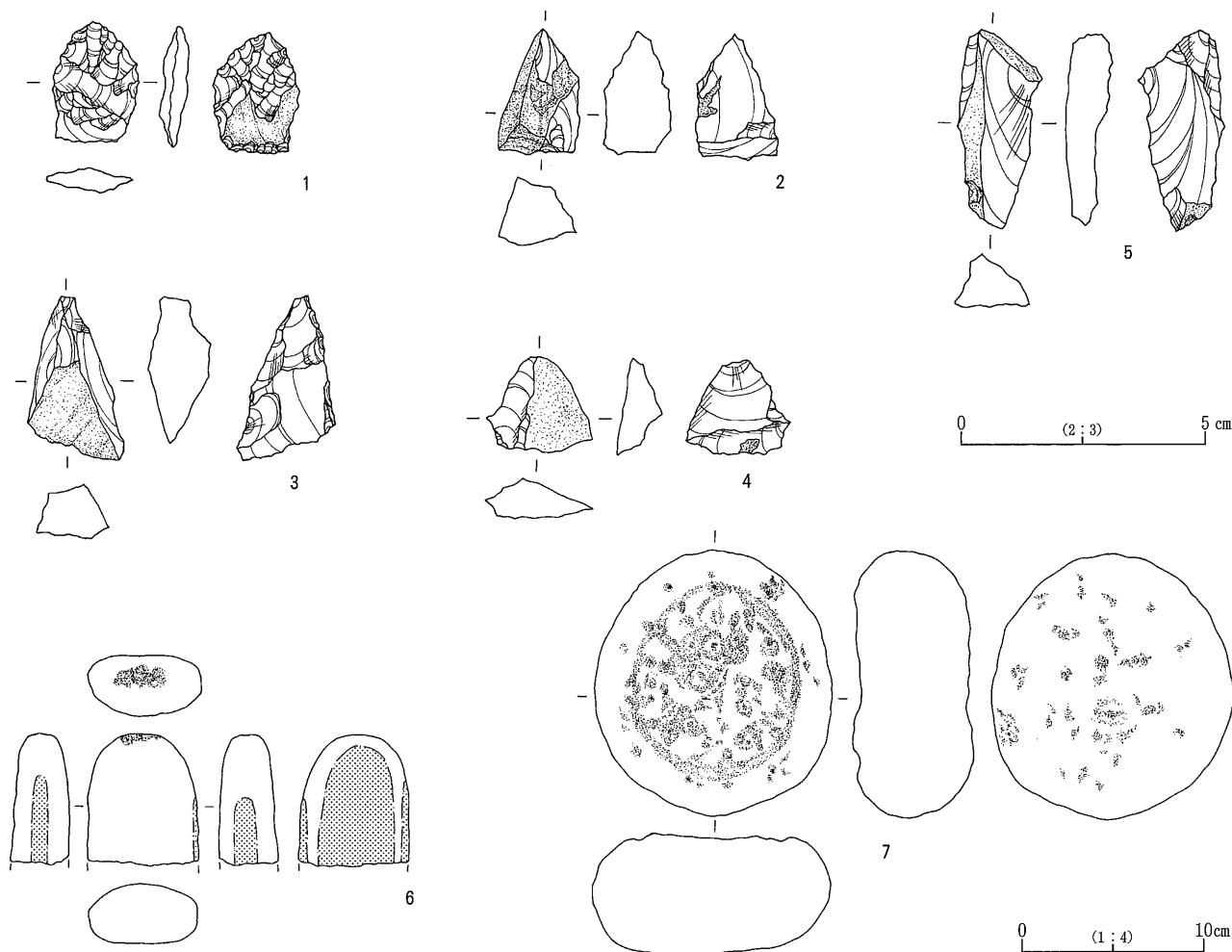


0 (1:4) 10cm

第11図 H2号住居址混入土器実測図

遺物 (第10・11・12図、第1・4・5表)

10-1 は須恵器の坏で高台が貼付されている。11-1 は縄文土器片で、斜位の櫛歯状刻みが施されている。12-1 ~ 5 は黒耀石である。1 は石鏃の未製品である。2 ~ 4 は素材である。5 は石錐の素材であろう。6 は磨石ないしは凹石である。7 は凹石で中央付近に顕著な敲打痕を残す。時期：出土遺物や住居址の形態から奈良時代頃の所産と思われる。



第12図 H2号住居址出土石器実測図

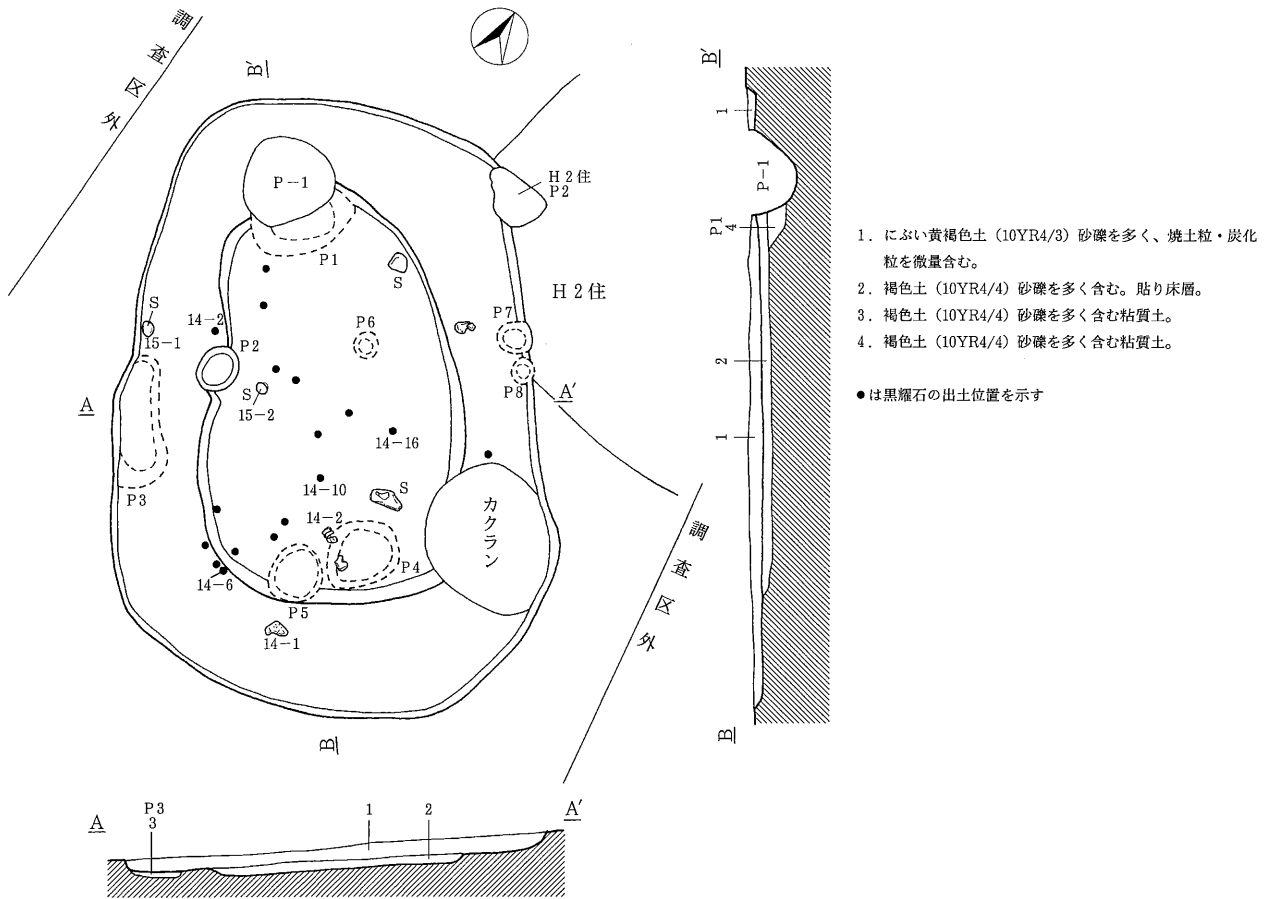
### (3) H3号住居址

#### 遺構 (第13図)

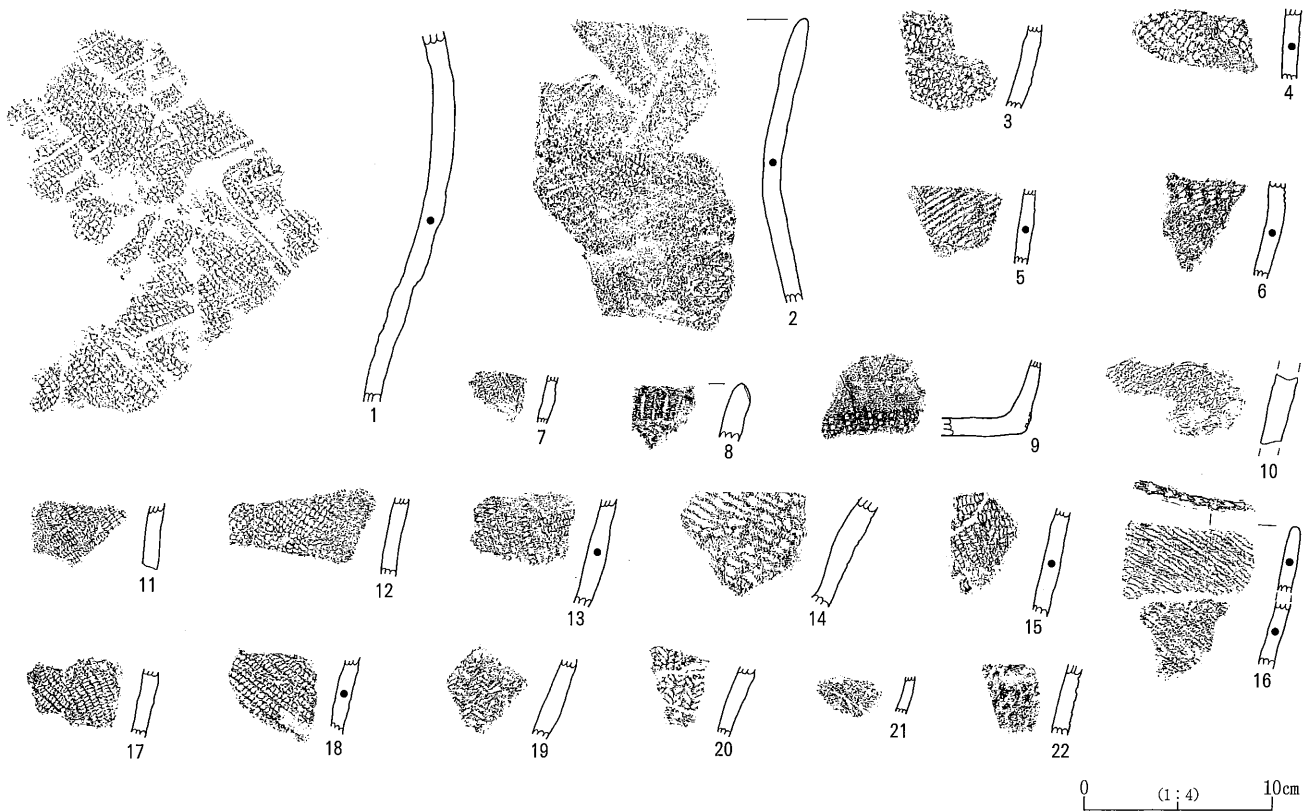
検出位置：Dい7、Dい8、Dう7、Dう8、Dえ7、Dえ8グリッド。重複関係：H2号住居址、P-1に切れ、東部に攪乱を受ける。平面形態：長軸約6.4m、短軸約4.5mの楕円形を呈している。主軸方位はN-29°-Wを指す。覆土：にぶい黄褐色を基調とする土層が堆積していた。炉址：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を2段に掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。ピット：床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：遺物のほとんどが下層～床面直上での出土であった。柱穴：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

#### 遺物 (第14・15・16・17・18図、第1・4・5・6表)

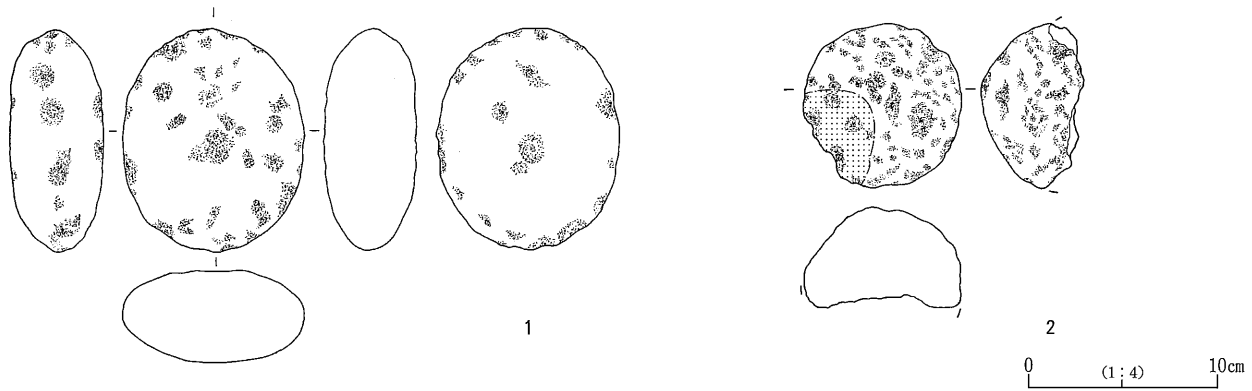
14-1～22は縄文土器の深鉢である。1・2は羽状縄文が施されている。16は口縁部で、外面には無節縄文が施されている。口唇部には刻目が施されている。3には異条縄文が施されている。5・14には無節縄文が施されている。19・20には組紐原体を施している。7には浅い櫛歯文が施されている。8は口縁部で、単沈線による連続刻みを施している。6には櫛歯状工具による刻み目が施されている。9は底部で3本一組の櫛歯様工具による刺突文が施されている。21には単沈線による格子目文が施されている。22には押型文が施されている。15-1は凹石で表裏面に浅い敲打痕を残す。2は凹石で全面に顕著な敲打痕を残し、側面



第13図 H3号住居址実測図



第14図 H3号住居址出土土器実測図



第15図 H3号住居址出土石器実測図〈1〉

に磨滅痕を残す。16-1～18-17は黒耀石である。16-1～3は石核である。4は石錐の未製品が欠損したものである。5は石鏃である。16-6～17-7は石鏃の未製品で製作途中に欠損したものもある。8は再加工痕のみとめられる剥片である。17-9～18-17は素材である。時期：出土遺物や住居址の形態から縄文時代前期の所産と思われる。

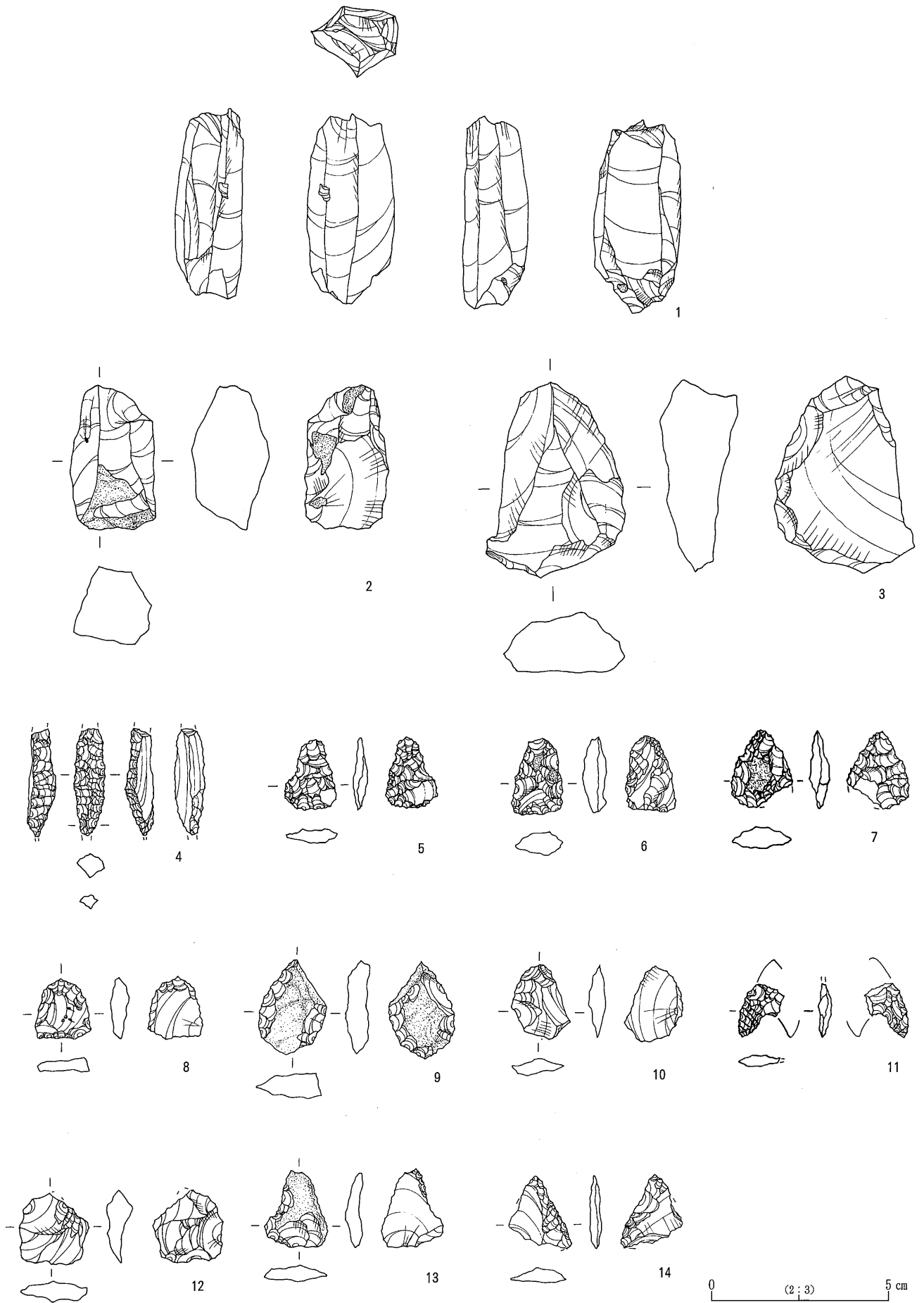
#### (4) H4号住居址

##### 遺構 (第19図)

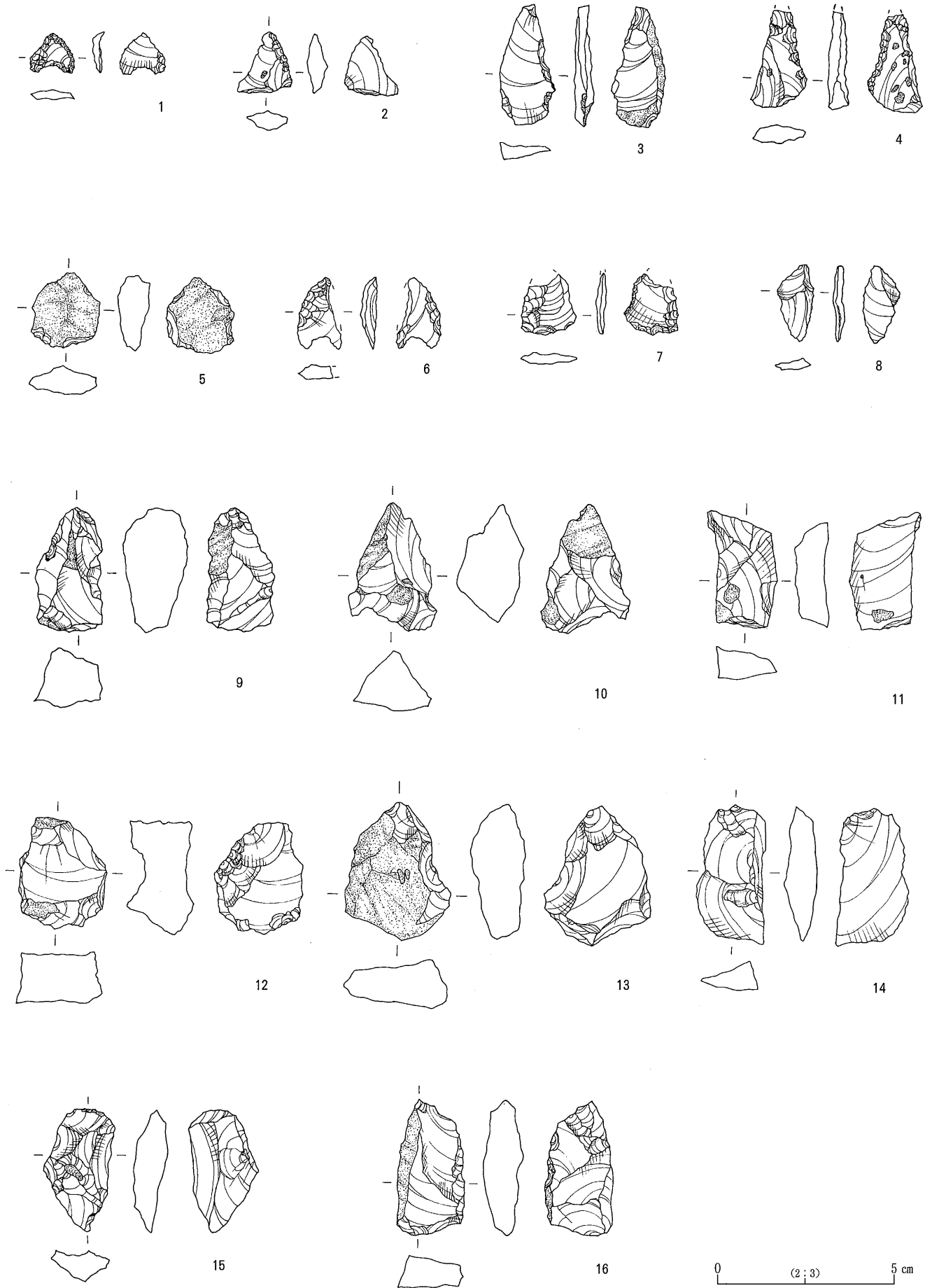
**検出位置：**Dい9、Dう9、Dい10、Dう10、Eい1、Eう1グリッド。**重複関係：**東側が調査区外未検出のため不明である。覆土中より縄文・弥生時代の遺物が多く出土していることから、調査区外において縄文・弥生時代の遺構と重複関係にあることも推知される。**平面形態：**調査区外未検出のため詳細は不明であるが、概ね6m×6mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-85°-Eを指す。**覆土：**暗褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。**カマド：**今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況：**概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット：**床面及び掘り方底面において、2基のピットが確認された。**遺物出土状況：**住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴：**本住居址では柱穴が2箇所確認された。残りの2箇所は調査区外の東側に所在しているものと思われる。断面形態は逆台形を呈しており、床面からの深さは約50cmであった。

##### 遺物 (第20・21・22図、第1・2・4・6表)

20-1～4は土師器甕である。1～3は底部に木葉痕を残す。21-1は縄文土器の深鉢の底部で、櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。22-1は黒耀石の素材である。2は表裏面全体に粗い剥離調整を施して大型の石鏃様の形状を作出している。詳細な使用目的や製作時期は不明である。4は凹石で表裏面と側縁に弱い敲打痕を残す。5は磨石で表裏面に磨滅痕を残す。7・8は石皿で、大きな河原自然石の表面に深い凹面を持ち、若干の敲打痕を残す。時期：出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期頃の所産と思われる。



第16图 H3号住居址出土石器实测图〈2〉



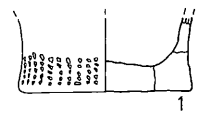
第17图 H3号住居址出土石器实测图〈3〉



第18图 H 3号住居址出土石器实测图〈4〉

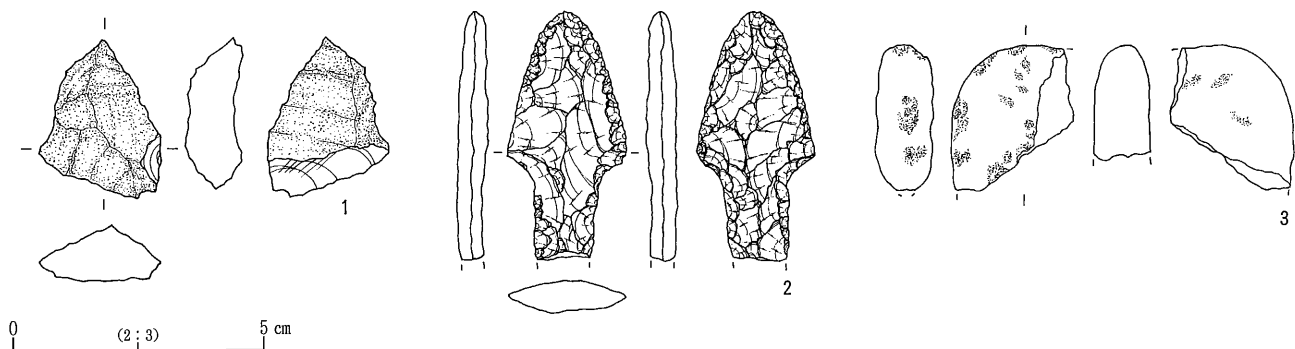




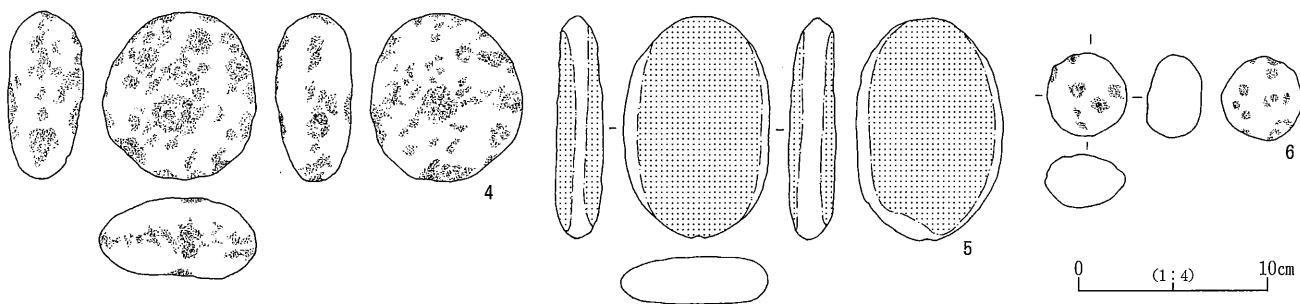


0 (1:4) 10cm

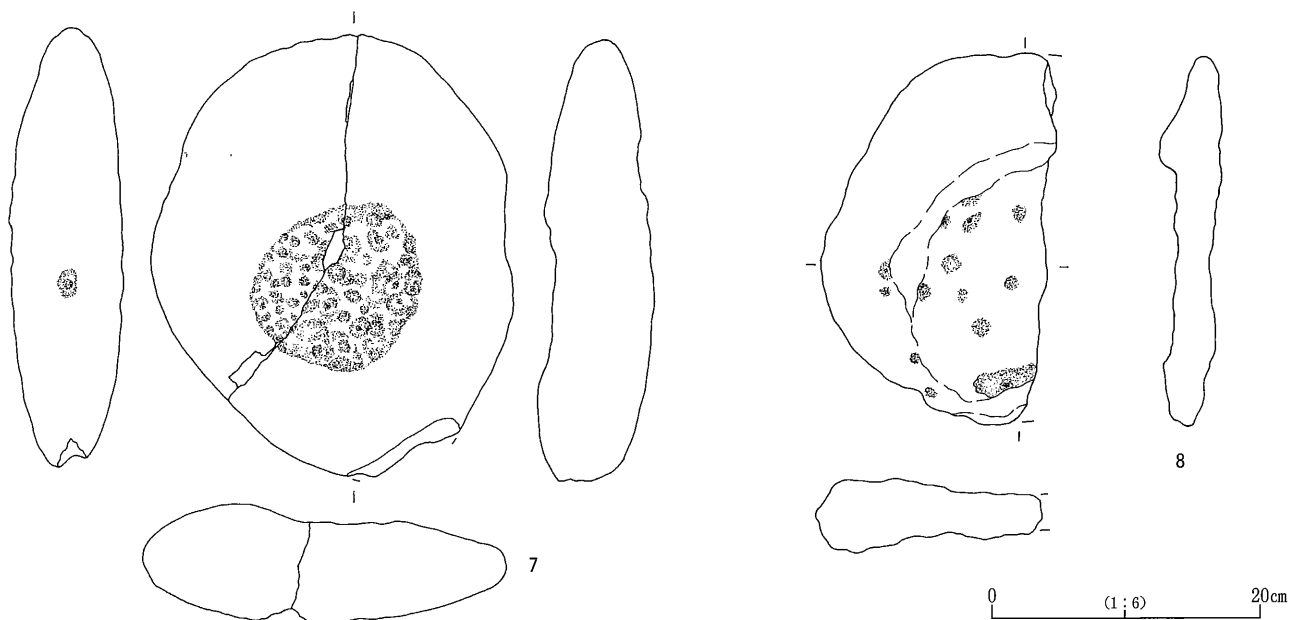
第21图 H 4 号住居址混入土器实测图



0 (2:3) 5 cm

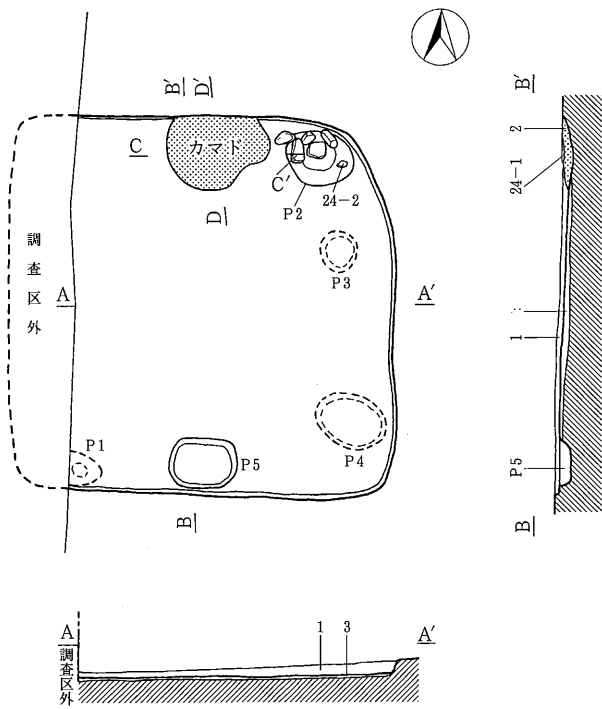


0 (1:4) 10cm

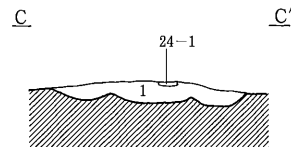
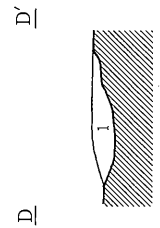
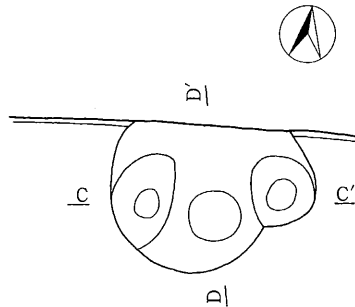
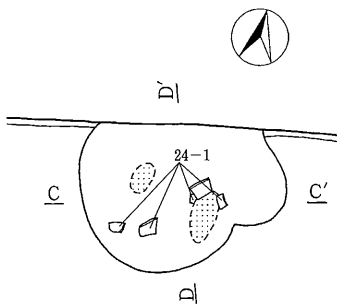


0 (1:6) 20cm

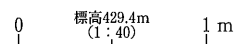
第22图 H 4 号住居址出土石器实测图



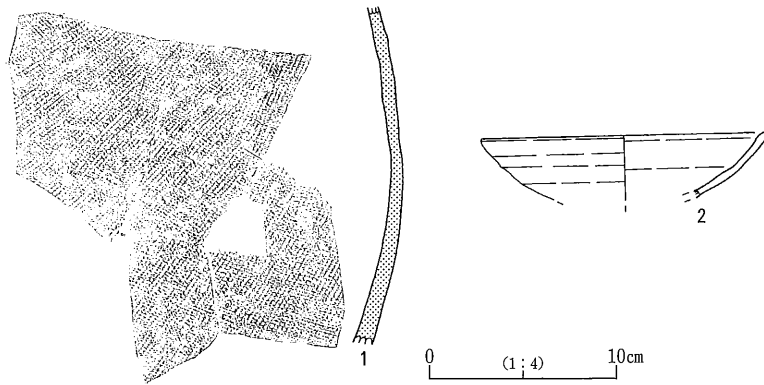
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 砂礫を多く含む。
2. 明黄褐色土 (10YR6/6) 焼土粒を多く、炭化粒を少量含む。カマドの堆積。
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂礫を多く含む。貼り床層。



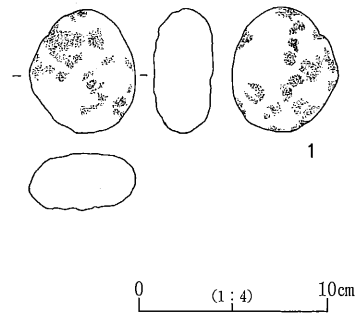
1. 明黄褐色土 (10YR6/6) 炭化粒・焼土粒・明黄褐色粘土ブロックを含む。カマドの崩落層。



第23図 H5号住居址・カマド実測図



第24図 H5号住居址出土土器実測図



第25図 H5号住居址出土石器実測図

## (5) H5号住居址

### 遺構 (第23図)

**検出位置：**Dう10、Dえ10グリッド。**重複関係：**西側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態：**調査区外など未検出であるが、概ね4m×4mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-0°-Eを指す。**覆土：**黒褐色を基調とする土層が、緩やかな堆積を呈していた。**カマド：**住居址の北側中央付近から確認された。住居址自体の削平が進んでいたため、カマドも基礎部分しか残存しておらず、明確なソデ構造を確認することはできなかった。**床面の状況：**概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット：**床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。カマドの東側のP2では、覆土中から径25cm程度の礫が検出されたがその意図するところは不明である。**遺物出土状況：**住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層～床面直上からの出土であった。**柱穴：**本住居址では支柱穴は確認できなかった。

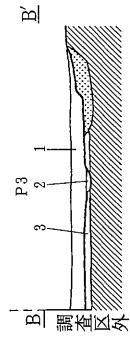
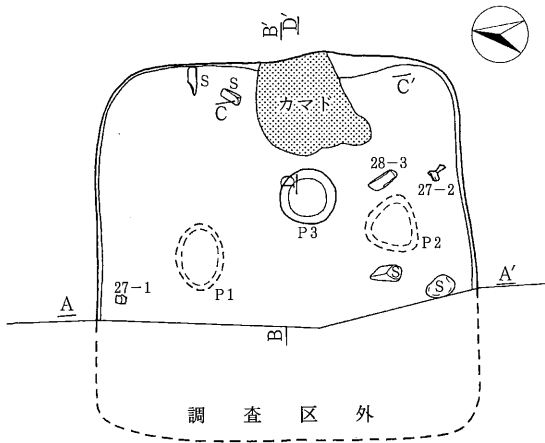
### 遺物 (第24・25図、第2・4表)

24-1は須恵器甕の胴部片である。2は土師器の坏である。25-1は敲石で表裏面に敲打痕を残す。**時期：**出土遺物や住居址の形態から平安時代の所産と思われる。

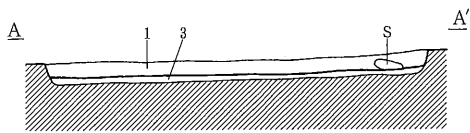
## (6) H6号住居址

### 遺構 (第26図)

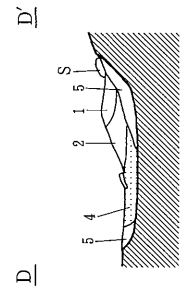
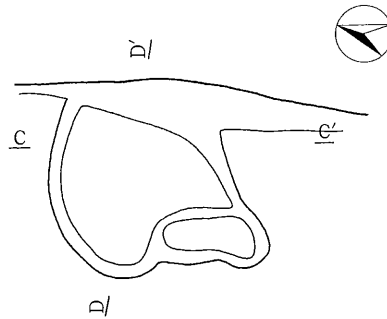
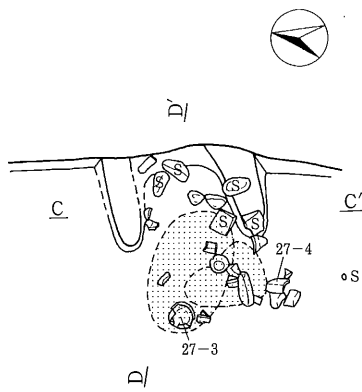
**検出位置：**Eう1、Eう2、Eえ1、Eえ2グリッド。**重複関係：**西側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態：**調査区外など未検出であるが、概ね4m×4mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-83°-Eを指す。**覆土：**暗褐色を基調とする土層に覆われていた。**カマド：**住居址の北側から確認された。住居址自体の削平が進んでいたため、カマドも基礎部分しか残存しておらず、ソデの下部構造の一部が確認されたにすぎなかった。**床面の状況：**概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット：**掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況：**住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。床面からは被熱したと思しき板状の石材が出土した。(写真図版2) **柱穴：**本住居址では支柱穴は確認できなかった。



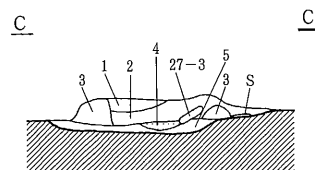
1. 暗褐色土 (10YR3/3) 礫を含む。
2. におい黄褐色土 (10YR6/4) 焼土粒・炭化粒を多く含む。カマドの堆積土層。
3. におい黄褐色土 (10YR4/3) 礫を含む。貼り床層。



0 標高429.5m (1:80) 2 m

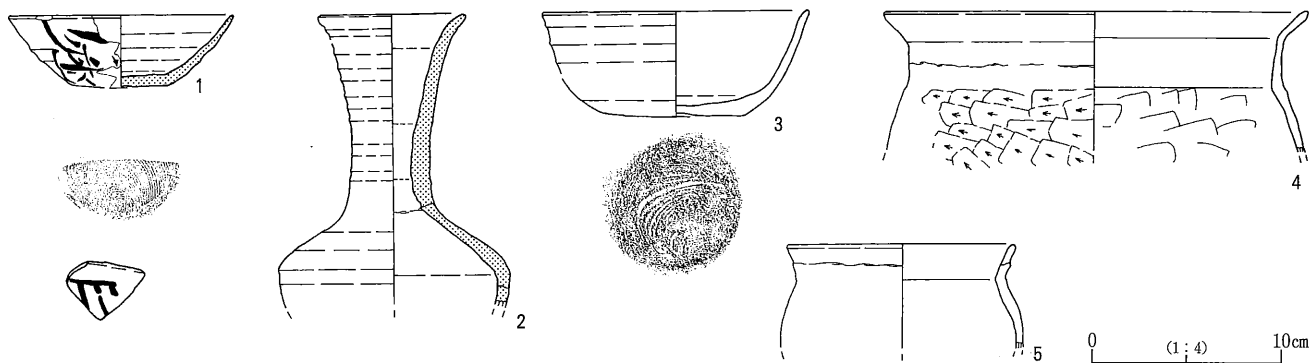


1. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘土・砂粒を含む。崩落したカマドの天井部。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化粒・焼土粒を多く含む。カマド流出層。
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 焼けた粘土ブロックを含む。カマドの袖部構築材。
4. 暗赤褐色土 (5YR3/6) 焼土粒・炭化粒を多く含む。カマドの焼土層。
5. におい黄褐色土 (10YR5/4) 礫を多く含む。カマド掘り方埋土。

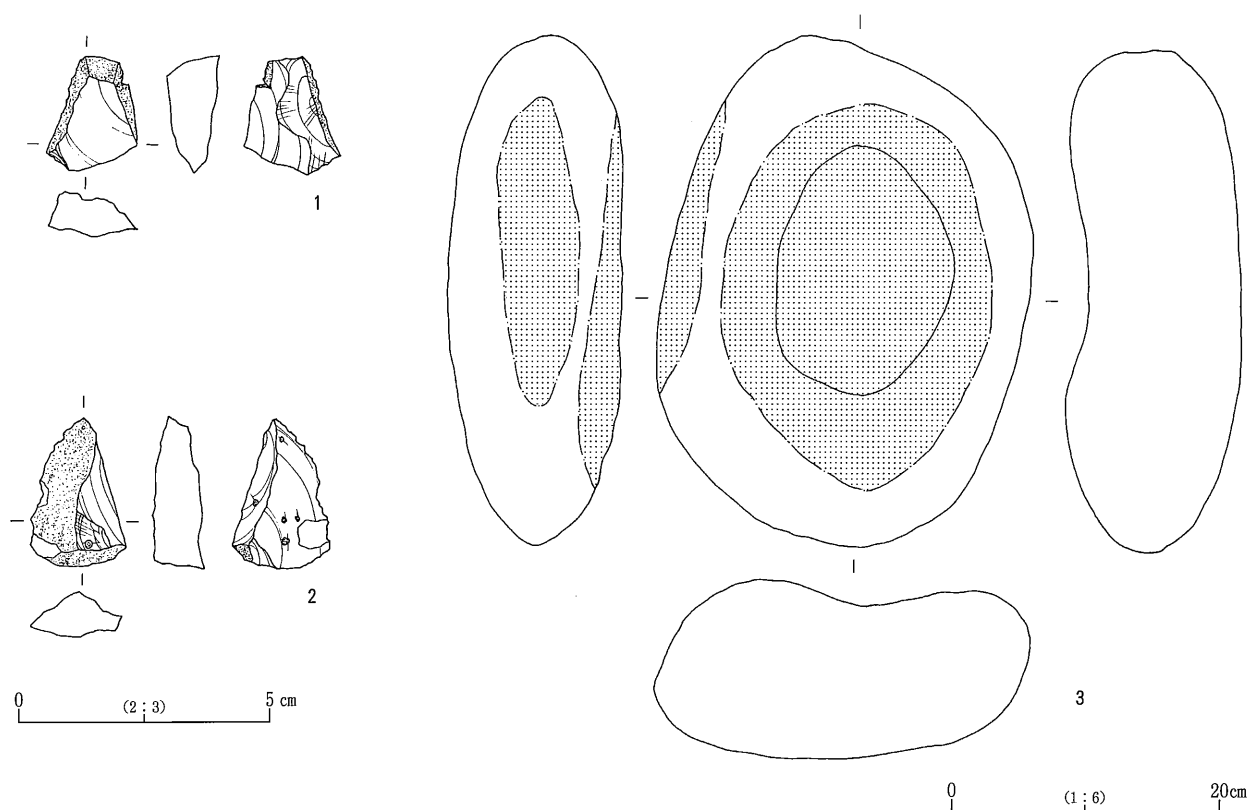


0 標高429.5m (1:40) 1 m

第26図 H6号住居址・カマド実測図



第27図 H6号住居址出土土器実測図



第28図 H6号住居址出土石器実測図

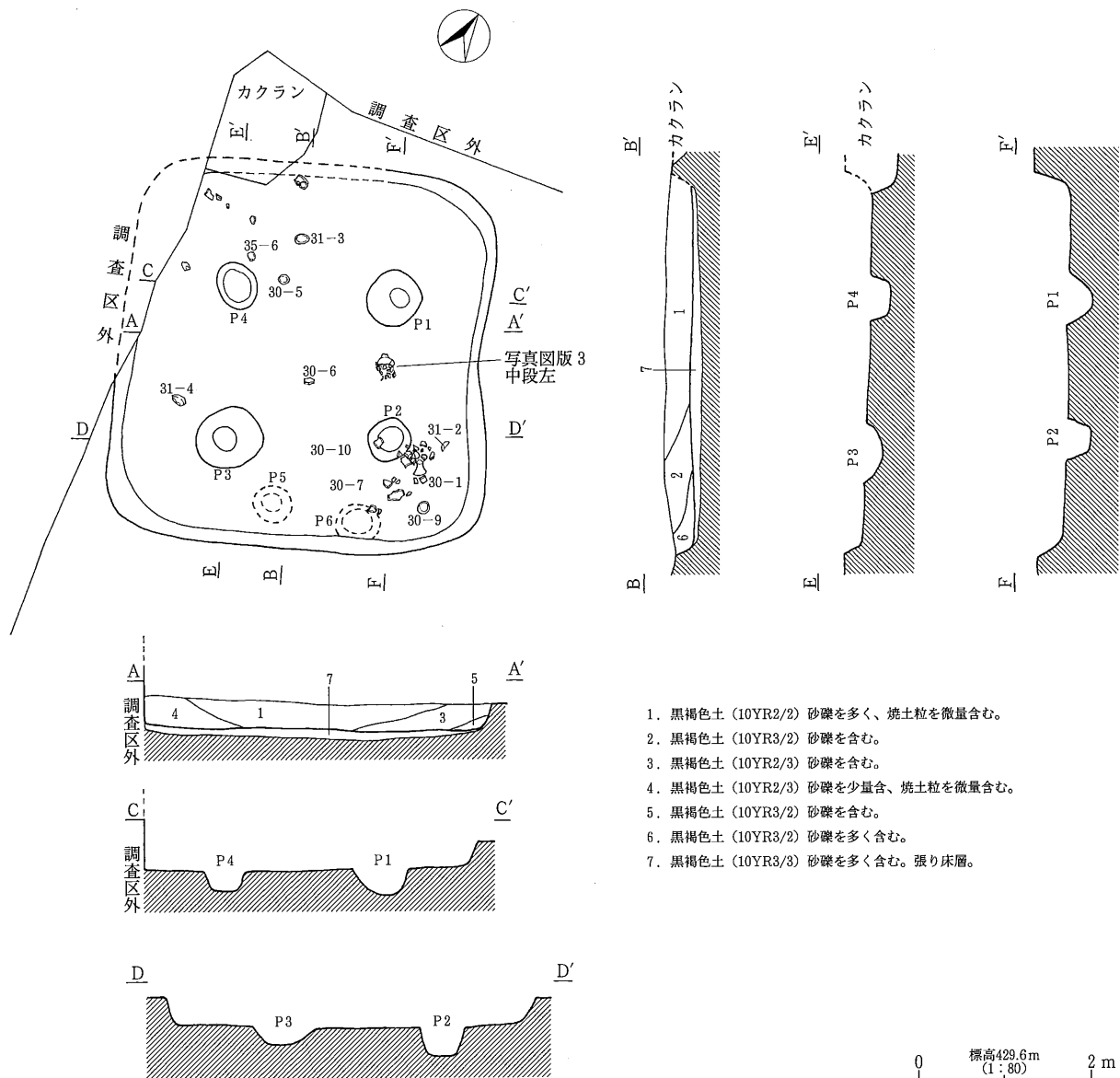
遺物 (第27・28図、第2・4・6表)

27-1は須恵器の坏である。坏部外面には墨書で「継」の文字が書かれている。この文字の上にも判然としない一文字があるので「□継」と読みとることができ、人名ではないかと思われる(平川南氏教示)。2は須恵器の長頸壺である。底部を欠損している。3は土師器坏である。口縁部は若干外弯しており底部は回転糸切り痕が顕著である。4は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕である。口頸部が「コ」の字状を呈し、胴部にヘラケズリが施されている。5は土師器甕である。28-1・2は黒耀石の素材である。3は石皿である。硬く重い大きい川原自然礫の中央に磨滅使用に伴う顕著な凹面を持つ。時期：出土遺物や住居の形態から、平安時代前半頃の所産と考えられる。

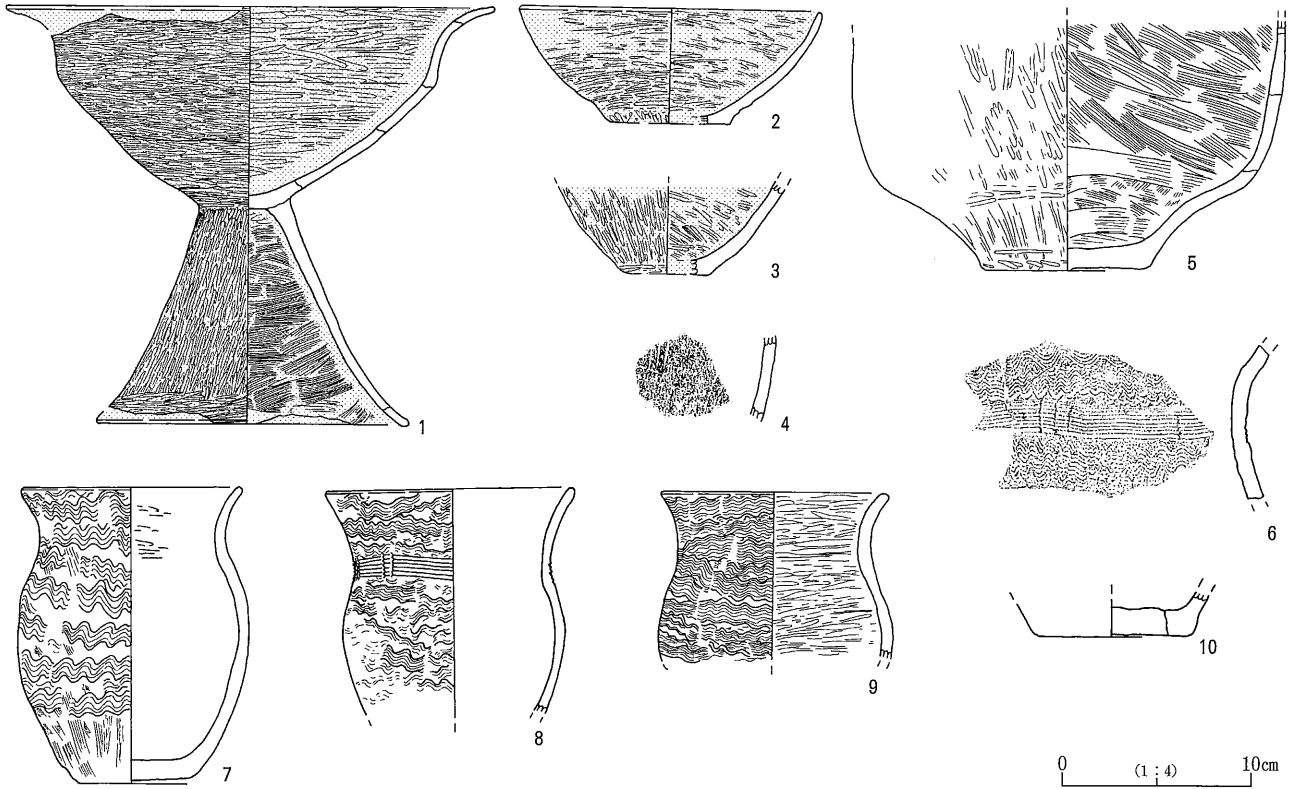
(7) H7号住居址

遺構 (第29図)

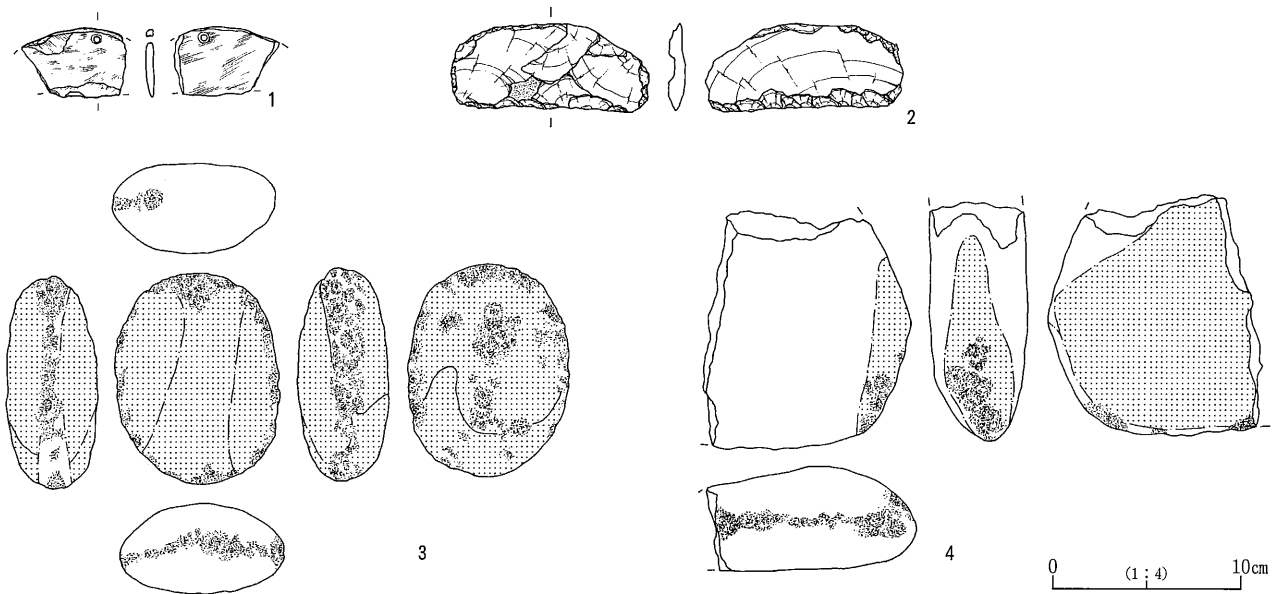
検出位置：Eう4、Eう5、Eえ4、Eえ5グリッド。重複関係：調査区北側に攪乱を受け、H8・9号住居址を切っている。その他は東側が調査区外未調査のため不明である。平面形態：長軸約4.5m、短軸約4.2mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-32°-Wを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。炉址：今回の調査では検出されなかった。床面付近における焼土や炭化物の検出も見られなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。ピット：床面及び掘り方底面において、6基のピットが確認された。遺物出土状況：住居址の覆土中から多くの遺物が出土したが、そのほとんどが下層からの出土であった。混入遺物の縄文土器は上層からも出土しているが、本住居址に伴う箱清水期の土器・石器類は下層～床面直上から、とりわけ床面直上からの出土が多かった。柱穴：本住居址では主柱穴が4箇所確認された。断面形態は逆台形を呈し、住居址床面からの深さは30cm程度であった。



第29図 H7号住居址実測図



第30図 H7号住居址出土土器実測図

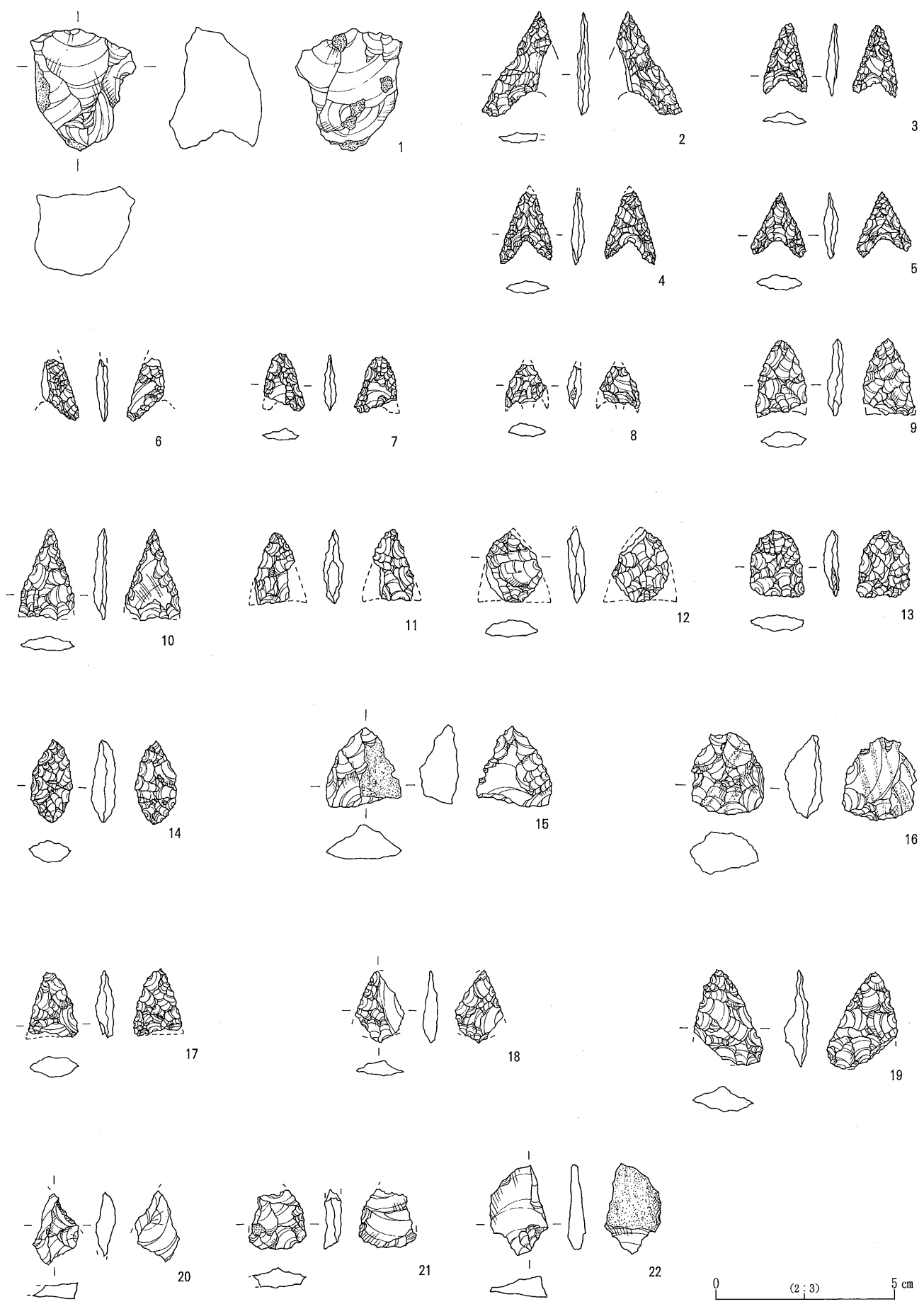


第31図 H7号住居址出土石器実測図〈1〉

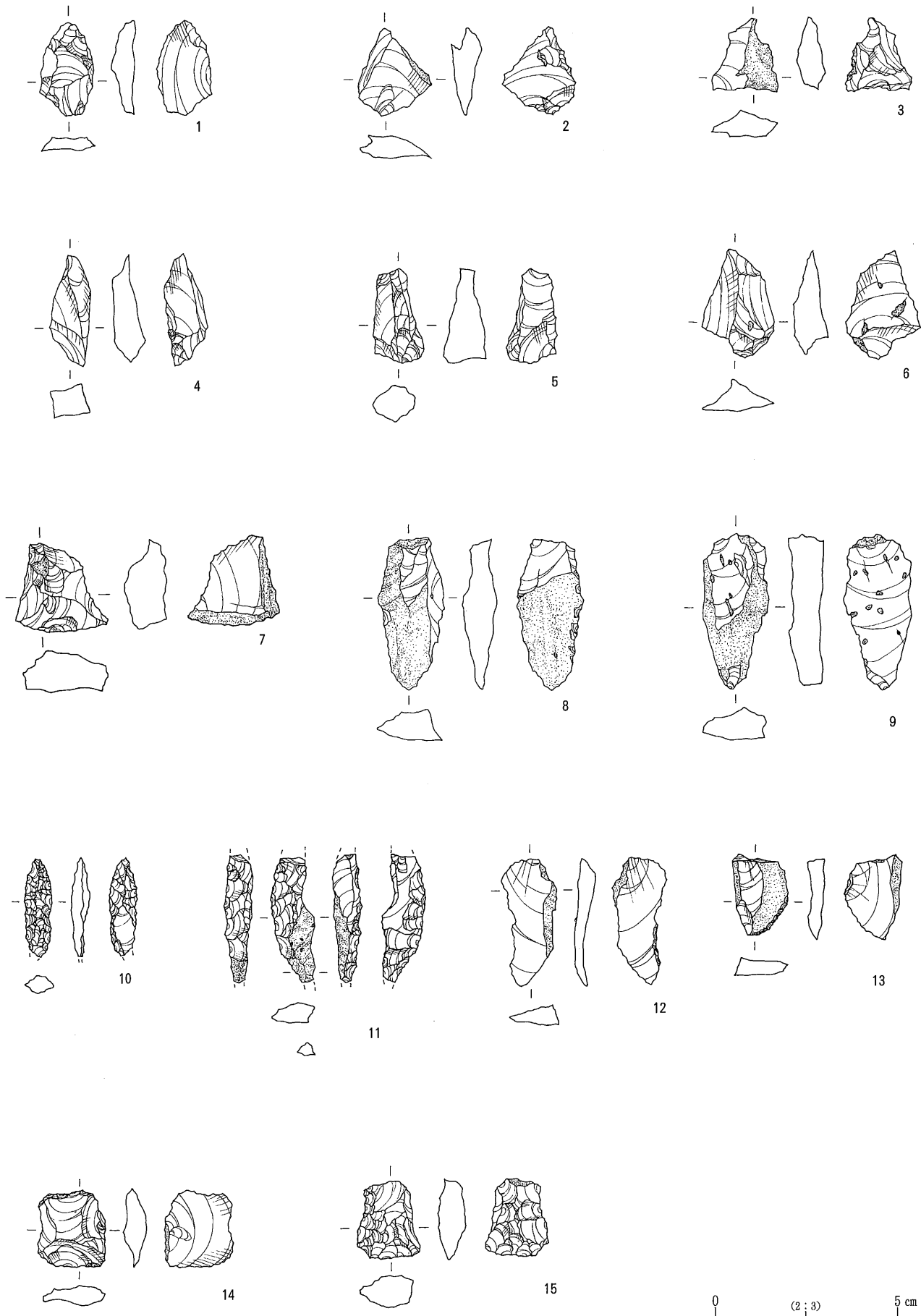
遺物 (第30・31・32・33・34・35図、第2・4・6・7表)

30-1~10は弥生土器である。1は高坏で丁寧なヘラミガキと赤色塗彩が施されている。2・3は鉢で横位あるいは縦位のヘラミガキと赤色塗彩が施されている。4は壺で細い単沈線による鋸歯文が施されている。5は壺の胴下半部である。6・8は壺で口縁部から胴部にかけて櫛描き波状文を施し、頸部には櫛描き簾状

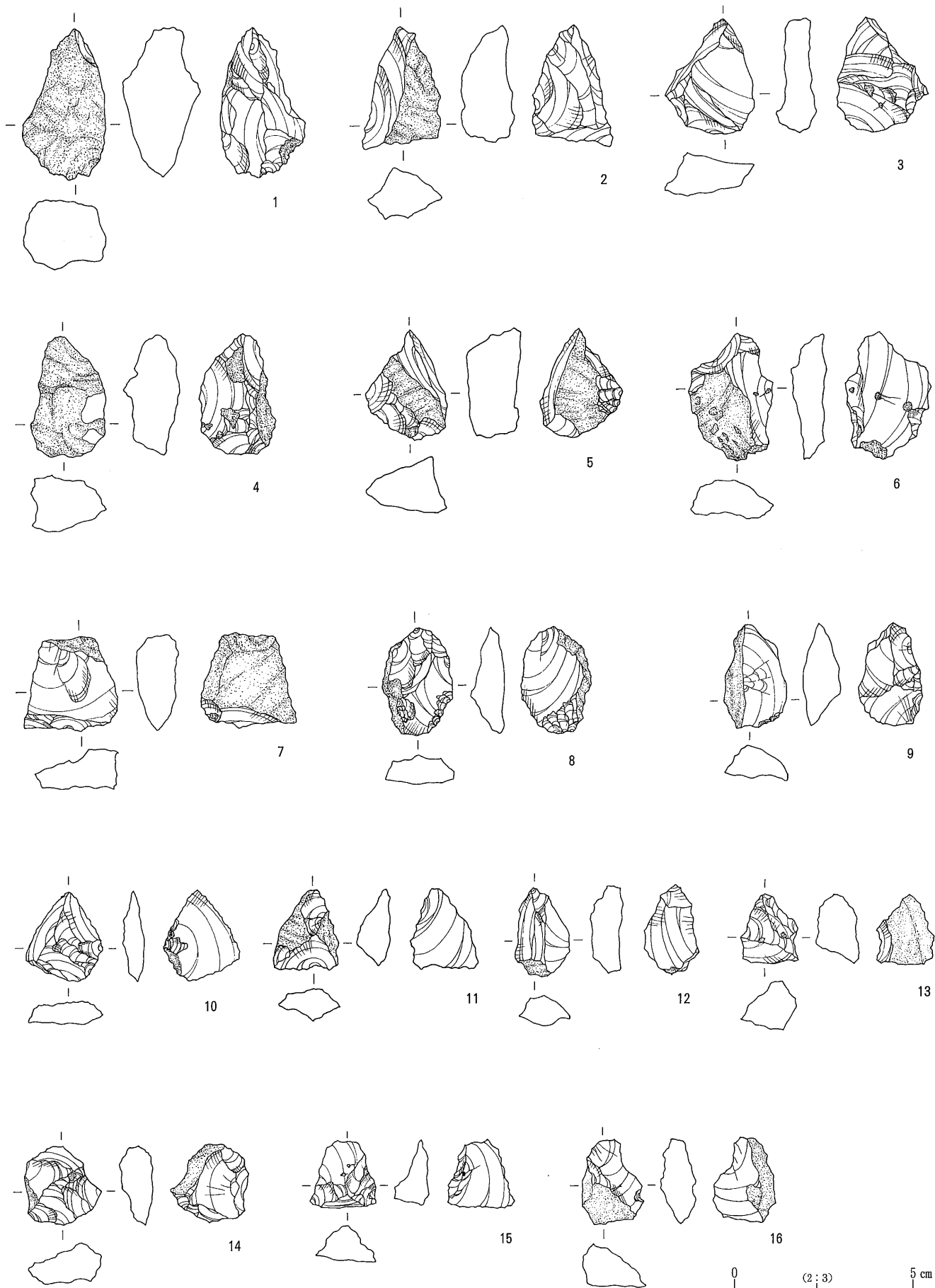




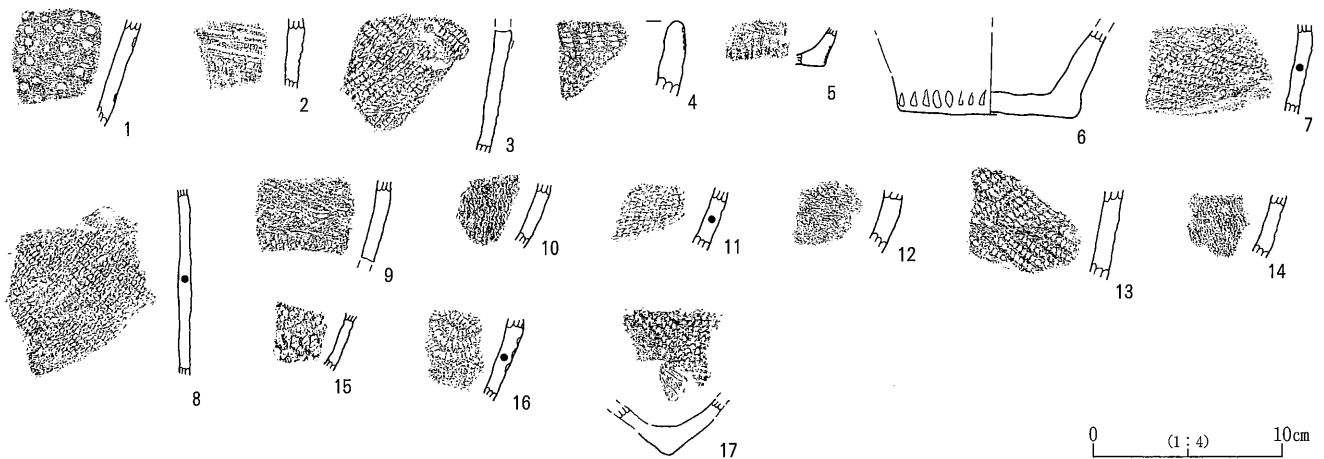
第32图 H 7 号住居址出土石器实测图〈2〉



第33图 H 7号住居址出土石器实测图〈3〉



第34图 H7号住居址出土石器实测图〈4〉



第35図 H7号住居址混入土器実測図

文を施しているが、30-7・9は甕で口縁部から胴部にかけて櫛描き簾状文が施されない。10は甕の底部である。31-1は磨製の石包丁である。表裏面から穿孔され、表裏面ともに丁寧な研磨が施されている。2は石包丁の未成品である。表面は周縁よりの粗い剥離により調整され、裏面は主要剥離面に刃部調整を施している。3・4は磨石あるいは敲石である。磨滅痕と敲打痕を残す。32-1～33-9、33-11～34-16は黒耀石である。32-1は石核である。2～14は石鏃で、欠損したものも見られる。15・16は石鏃の未製品である。17～21は石鏃の未製欠損品である。32-22～33-9、34-1～16は素材である。33-10は石英製の石錐である。11は黒耀石製の石錐未製欠損品である。12・13は再加工痕のみとめられる剥片である。14・15はスクレイパーである。35-1～17は縄文土器片である。1は深鉢の胴部片で集合円形刺突文が施されている。2は半裁竹管による平行沈線文が施されている。3は深鉢の胴部片でLR縄文による結節羽状縄文が施されている。4は櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。5は底部片で櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。6は底部片で連続刻目文が施されている。7・8は深鉢の胴部片でRL縄文による結節羽状縄文が施されている。16は半裁竹管連続刺突文による同心円文が施されている。17は尖底土器の底部である。RL縄文が施されている。時期：出土遺物や住居址の形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

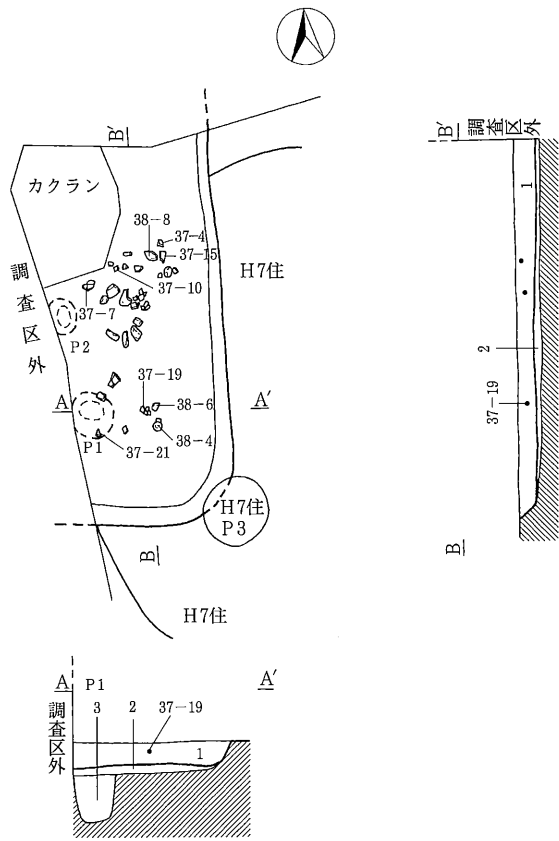
## (8) H8号住居址

### 遺構 (第36図)

検出位置：Eう4、Eえ4グリッド。重複関係：住居址中央付近に攪乱を受け、H7号住居址に切られている。このほか詳細は北及び西側が調査区外未検出のため不明である。またH9号住居址とも重複関係にあるが、詳細は不明である。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明である。主軸方位はN-5°-Wを指すものと推定される。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。炉址：今回の調査では検出されなかった。調査区外に所在しているものと思われる。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。ピット：掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址の覆土上・中層からも出土したが、多くの遺物は下層からの出土であった。柱穴：本住居址では支柱穴は確認できなかった。

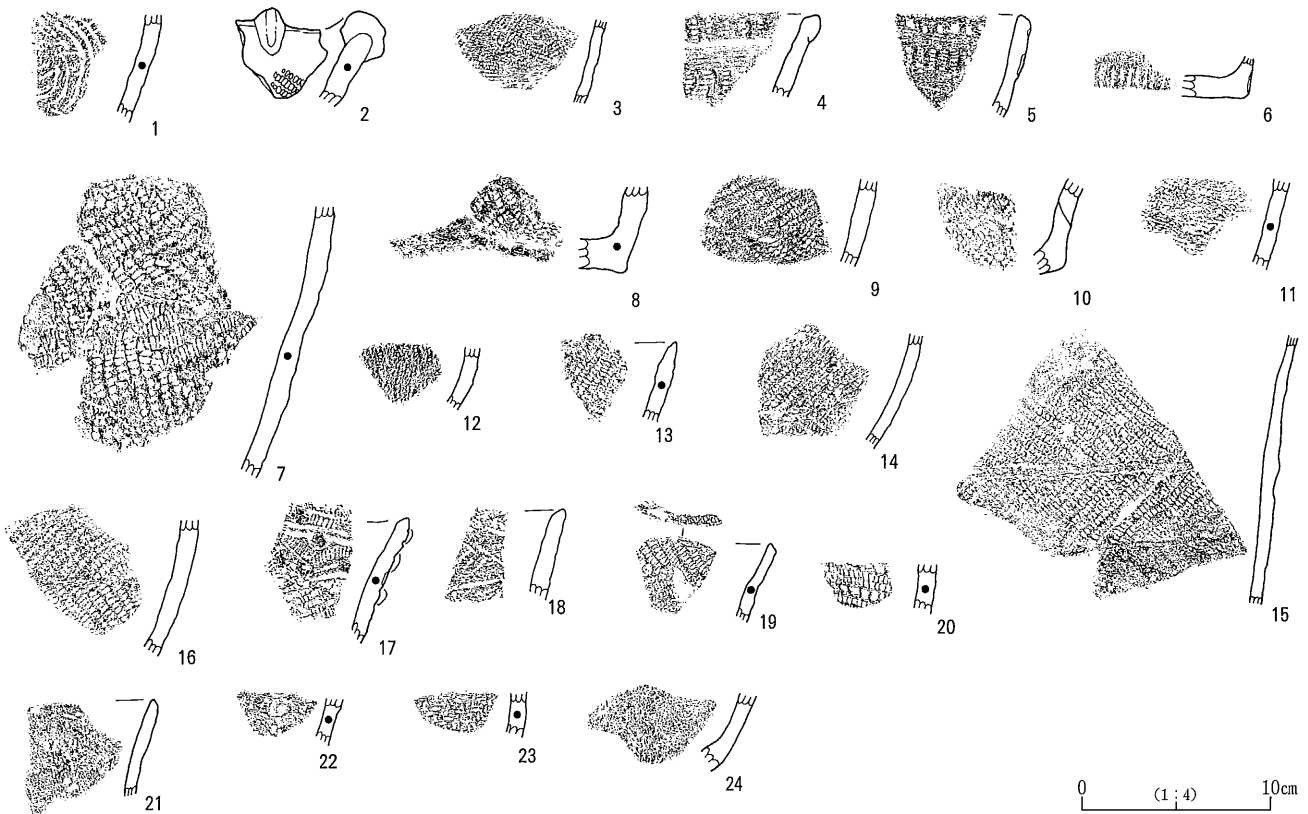
### 遺物 (第37・38・39・40図、第3・4・7・8表)

H7号住居址と切りあっているため弥生時代の遺物も多く出土している。37-1～24は縄文土器の深鉢である。1は半裁竹管による平行沈線文が施されている。2は口縁部で側面にはRL縄文が、口唇部には帯状

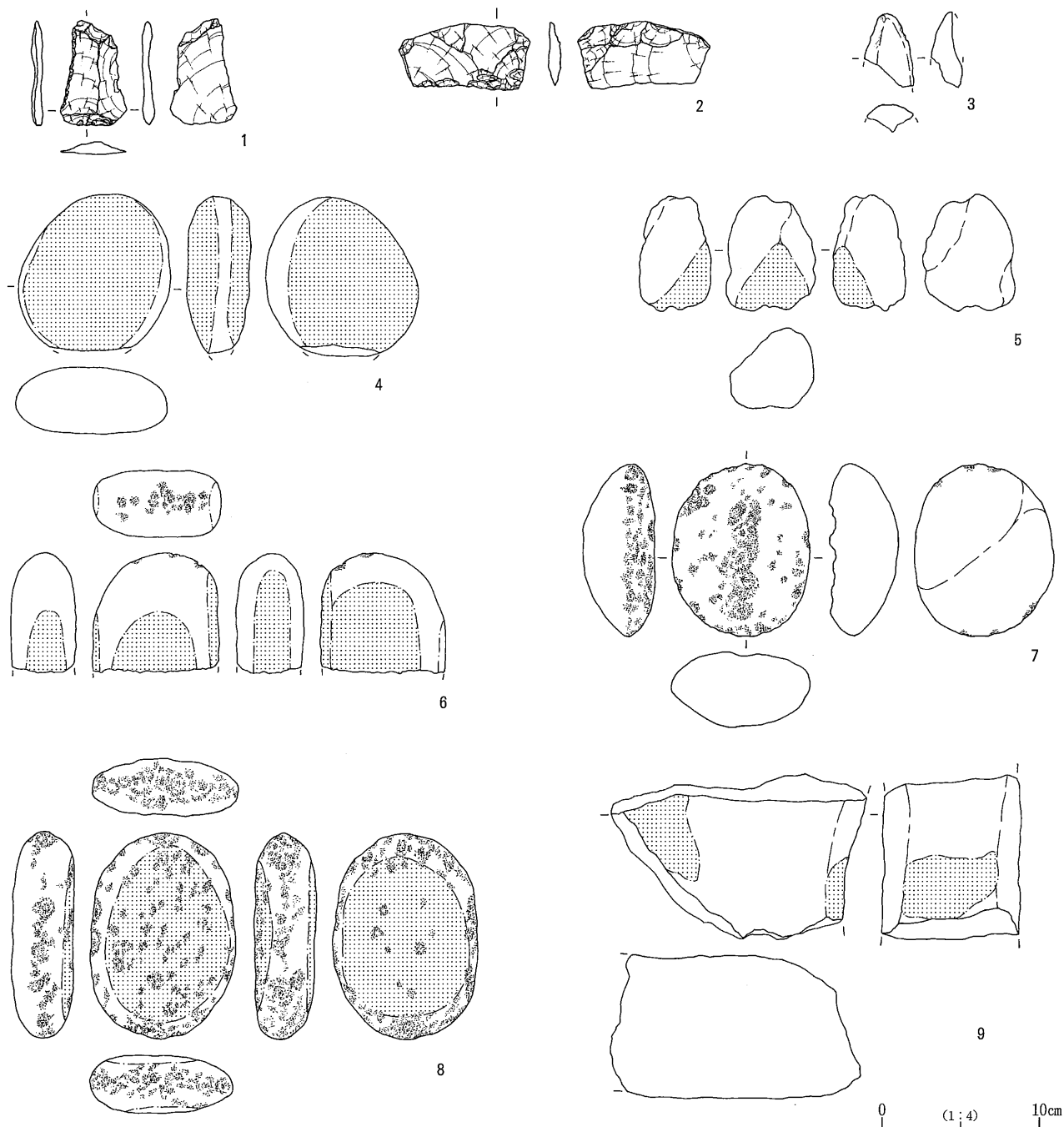


1. 黒褐色土 (10YR2/2) 砂礫を多く、焼土粒を微量含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 砂礫を多く含む。貼り床層。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫を含む。ピット覆土。

第36図 H 8 号住居址実測図

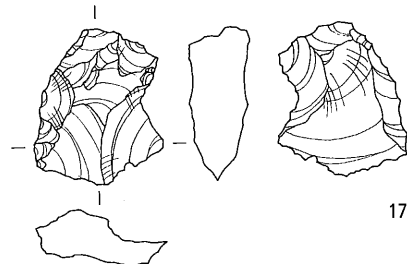
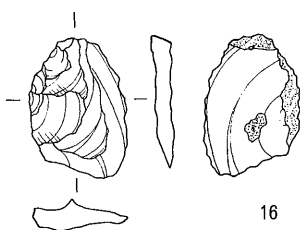
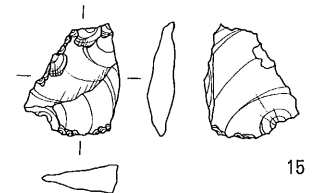
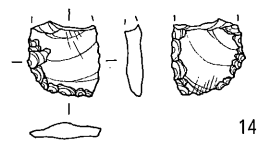
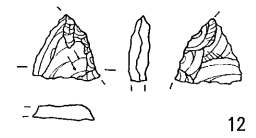
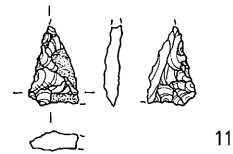
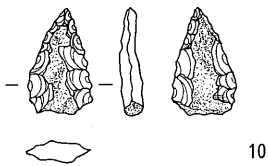
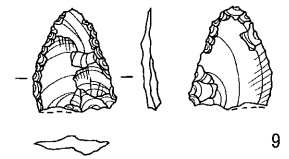
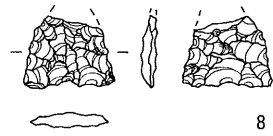
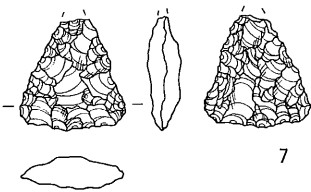
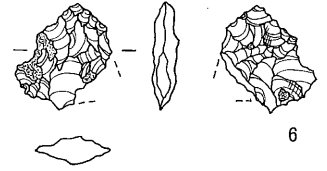
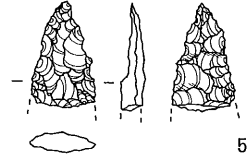
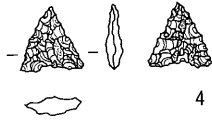
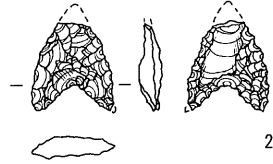
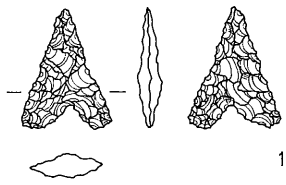


第37図 H 8 号住居址出土土器実測図



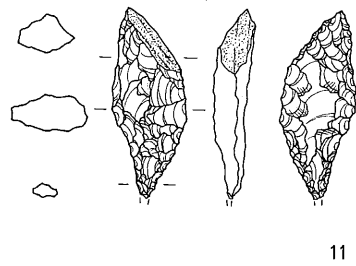
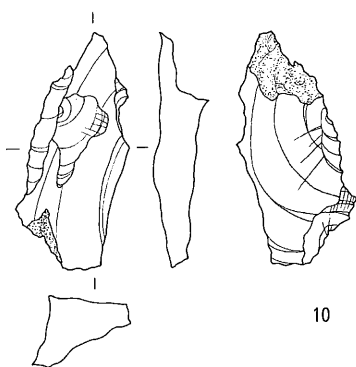
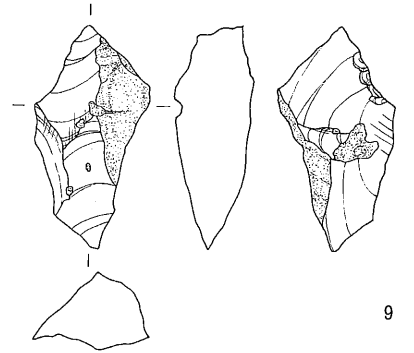
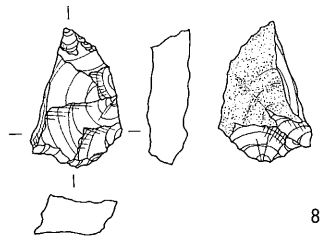
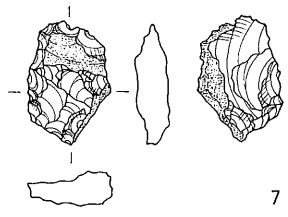
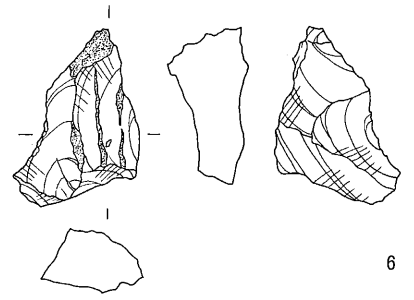
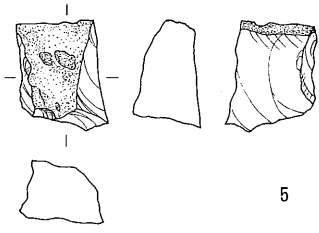
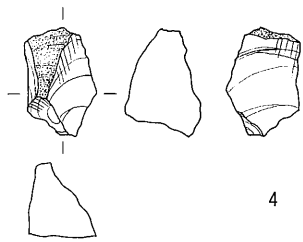
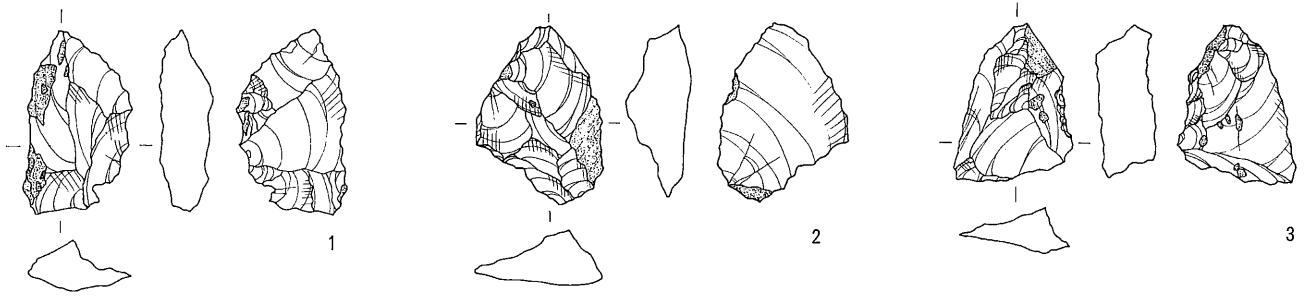
第38図 H8号住居址出土石器実測図〈1〉

貼付文が施されている。3・19は胴部片でLR縄文による結節羽状縄文が施されている。4は折り返し口縁で櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。5は口縁部片で櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。6は底部片で連続刻み目文が施されている。7は胴部片でRL縄文異原体による羽状縄文が施されている。8・10は底部片でRL縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。9・11は胴部片でRL縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。13は口縁部片でRL縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。14・16は胴部片で結束羽状縄文が施されている。15はRL縄文端部多条結節による羽状縄文が施されている。17は口縁部片でLR縄文を施した後に半裁竹管による連続刻み目文が施されている。20は胴部片でrl+LRの附加条縄文が施されている。18・21は絡条体回転施文であろうか。22は胴部片で半裁竹管によるコンパス文が施されている。23は組紐原体により施文されている。24は尖底土器で



0 (2:3) 5 cm

第39图 H 8号住居址出土石器实测图〈2〉



0 (2:3) 5 cm

第40图 H 8号住居址出土石器实测图〈3〉

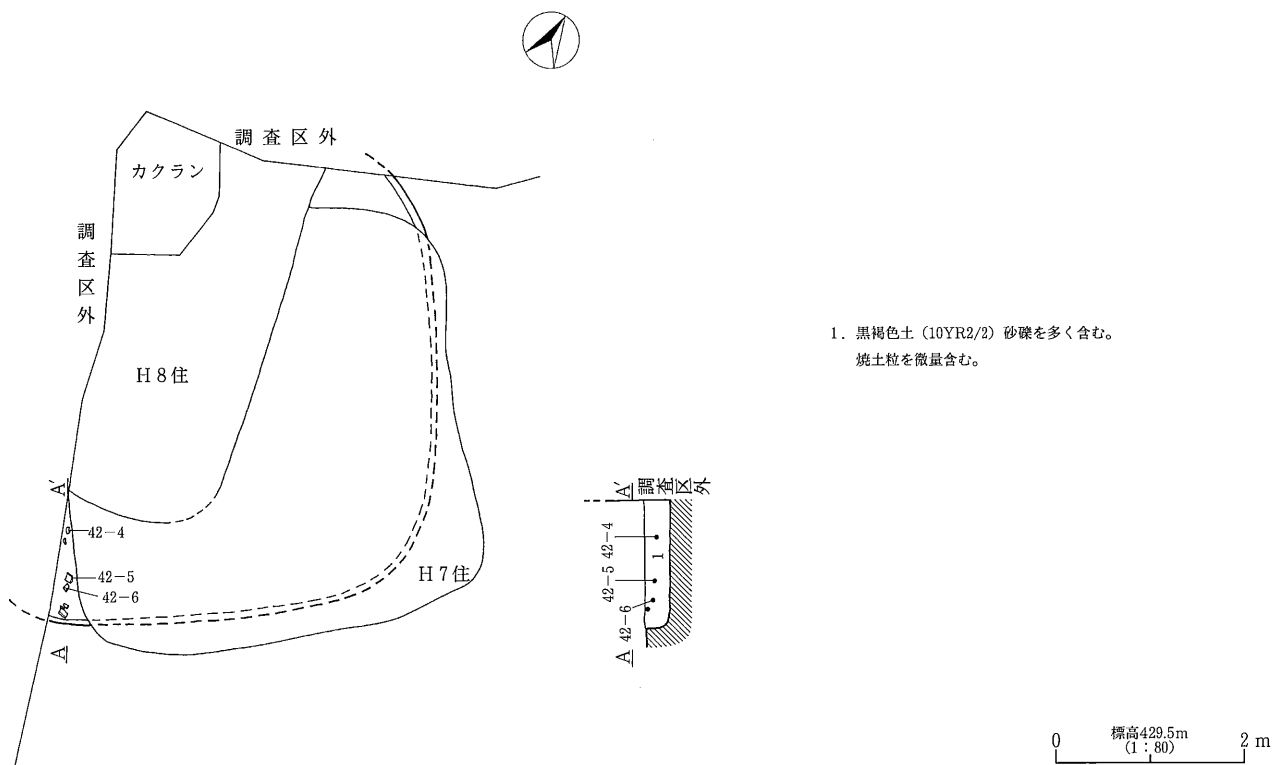


ある。38-1は 打製石斧である。縦長剥片の表面に粗い剥離を施し、長辺に細かい剥離調整を施し、断面三角形を作出している。2は打製石包丁である。表裏面ともに周縁より粗い剥離により調整しているが、刃部の調整も粗く未製品の可能性がある。3と共にH7号住居址に所属するものであろう。3は硬い小型の亜角礫表面に細かい擦過痕を残す。4は磨石である。断面扁平の円礫を使用し、表裏面に広く磨滅痕を残す。5は磨石である。断面円形の拳大自然石の表面の一部に弱い磨滅痕を確認できる。6も礫石器である。断面扁平の円礫を使用し、表裏・側面に広く磨滅痕を残し、端部に敲打痕が確認できる。7は凹石で断面算盤球状の表面に深い敲打痕が残る。8は敲石である。断面扁平の円礫を使用し、表裏面及び側面に浅い敲打痕が確認できる。9は磨石である。硬い亜角礫の表面及び側面に磨滅による凹面を残す。据置きにより使用したものであろうか。39-1～40-11は黒耀石である。39-1～6、8・9は石鏃で欠損品も見られる。7、11～15は未製欠損品である。10、16・17は未製品である。40-1～10は素材である。11は石錐である。時期：出土遺物から縄文時代前期頃の所産と思われる。

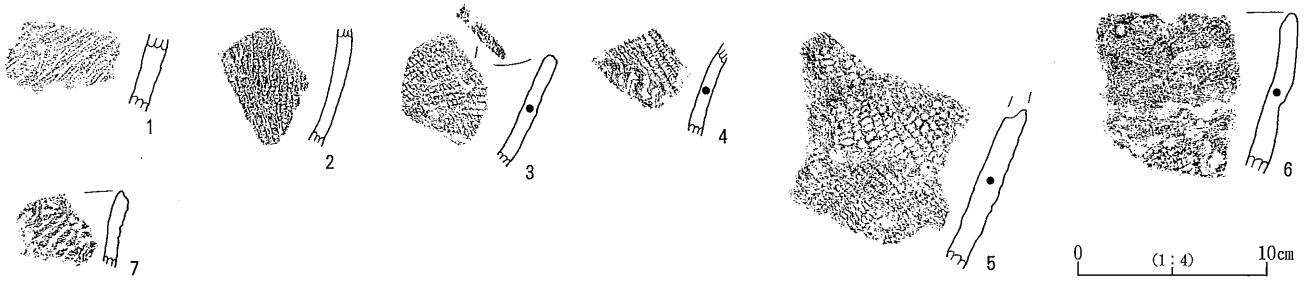
### (9) H9号住居址

#### 遺構 (第41図)

検出位置：Eう4、Eう5、Eえ4、Eえ5グリッド。重複関係：北西側に攪乱を受け、H7号住居址に切られている。このほかH8号住居址とも重複関係にあるが、詳細は不明である。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明である。主軸方位はN-28°-Wを指すものと推定される。覆土：黒褐色を基調とする土



第41図 H9号住居址実測図

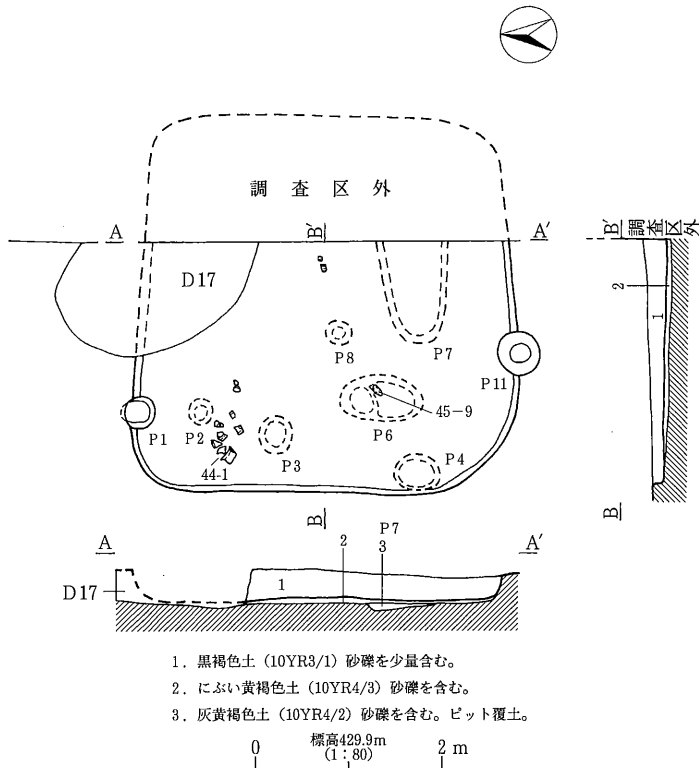


第42図 H9号住居址出土土器実測図

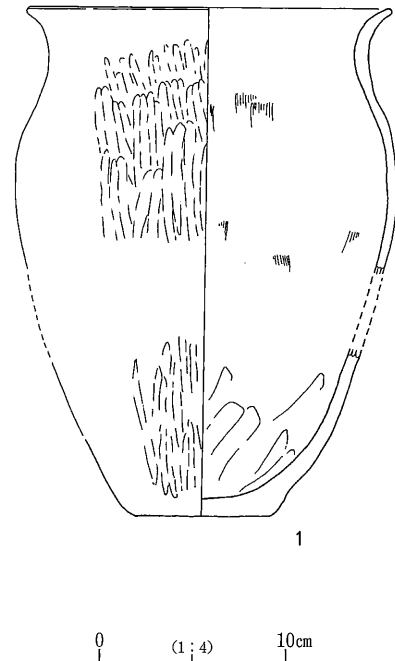
層が堆積していた。炉址：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。検出範囲が限られていたためか貼り床は確認されなかった。ピット：検出範囲が限られていたためかピットは確認されなかった。遺物出土状況：住居址の覆土から多くの縄文土器片が出土した。柱穴：本住居址では支柱穴は確認できなかった。

遺物（第42図、第3表）

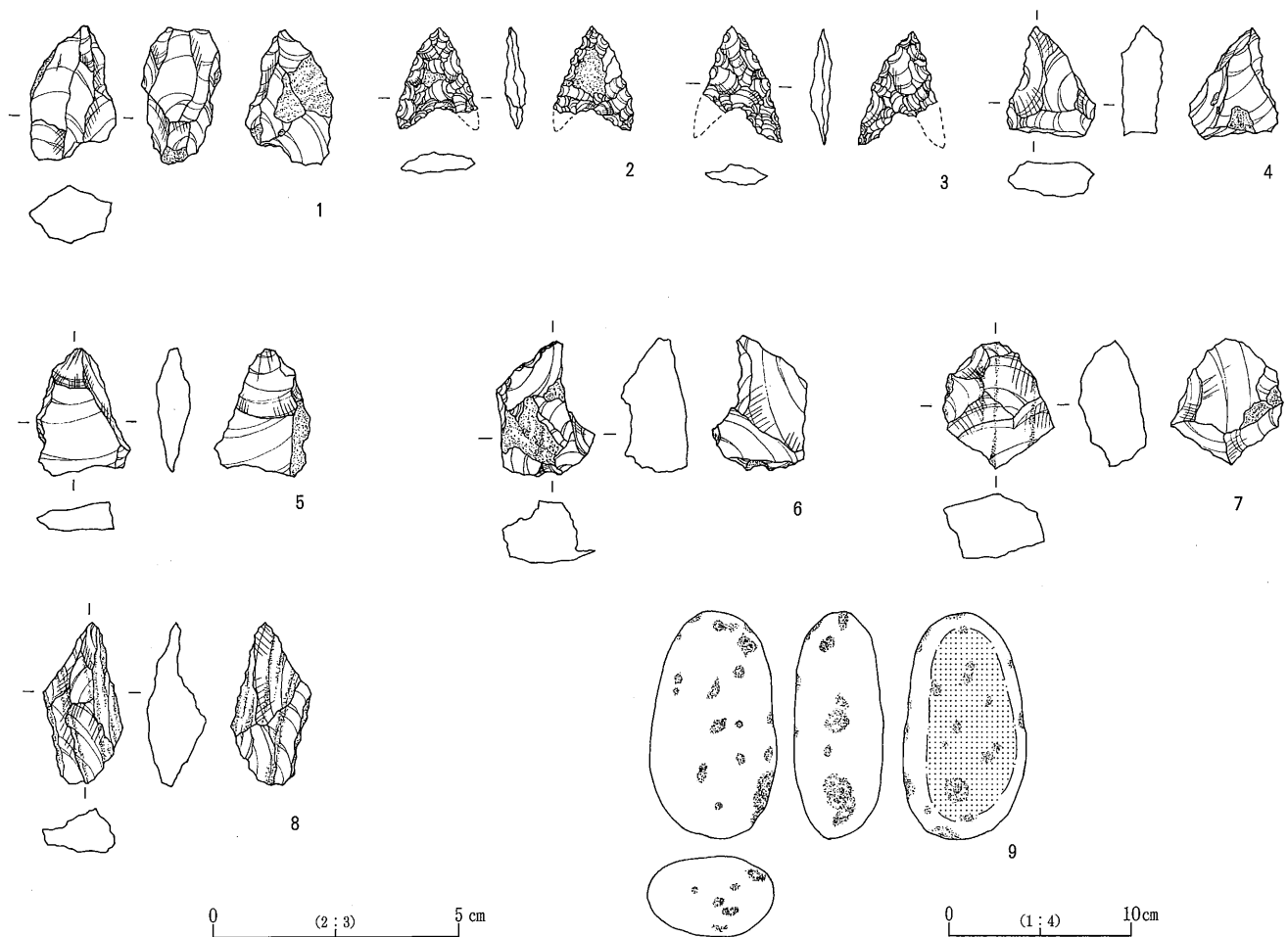
42-1～7は深鉢の破片である。3は口縁部で波状口縁である。R L縄文端部閉束回転方向変換による羽状縄文が施されている。4は胴部片で、R L縄文を施文した後に半裁竹管によるコンパス文が施されている。5は胴部片でR L異原体による羽状縄文が施されている。6は口縁部で無節縄文による羽状縄文が施されている。7は押型文土器の口縁部である。時期：出土遺物から縄文時代前期頃の所産と思われる。



第43図 H10号住居址実測図



第44図 H10号住居址出土土器実測図



第45図 H10号住居址出土石器実測図

#### (10) H10号住居址

##### 遺構 (第43図)

**検出位置：**Eい6、Eい7グリッド。**重複関係：**D17に切られる。このほか詳細は東側が調査区外未検出のため不明である。**平面形態：**調査区外など未検出であるが、概ね4.1m×4.1mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-90°-Eを指す。**覆土：**黒褐色を基調とする土層が堆積していた。**カマド：**今回の調査では検出されなかった。東側の調査区外に所在するものと思われる。**床面の状況：**概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。**ピット：**床面及び掘り方底面において、複数のピットが確認された。用途などは判然としない。**遺物出土状況：**住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。**柱穴：**本住居址では主柱穴については判然としない。

##### 遺物 (第44・45図、第3・4・8表)

44-1は土師器の甕で全体的にナデ調整が施されている。45-1～8は黒耀石である。2・3は石鏃であるが欠損している。1、4～8は素材である。45-9は敲石で、断面卵型の長楕円礫の表裏面および片側面に浅い敲打痕が確認できる。**時期：**出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期頃の所産と思われる。

## 第2節 土坑址

### (1) D1号土坑

#### 遺構 (第46図)

検出位置：Cう8グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.2m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-51°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは12cmである。覆土：暗褐色土（10YR3/4）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

### (2) D2号土坑

#### 遺構 (第46図)

検出位置：Cう8グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.4m、短軸約1.1mの三角形を呈し、主軸方位はN-38°-Eを指す。断面形態：概ね逆台形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。覆土：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

### (3) D3号土坑

#### 遺構 (第46図)

検出位置：Cう9グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約60cm、短軸約50cmの円形を呈する。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。覆土：褐色（10YR4/4）の砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

### (4) D4号土坑

#### 遺構 (第46図)

検出位置：Dい1グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：箱形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

### (5) D5号土坑

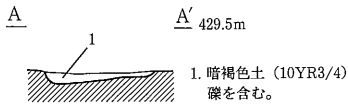
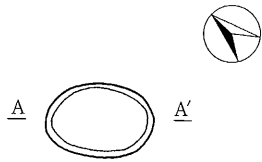
#### 遺構 (第46図)

検出位置：Dう6グリッド。重複関係：D13に切られる。平面形態：長軸約80cm、短軸約70cmの円形を呈し、主軸方位はN-50°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは8cmである。覆土：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

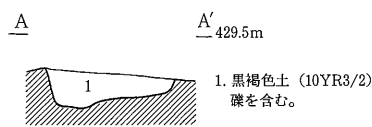
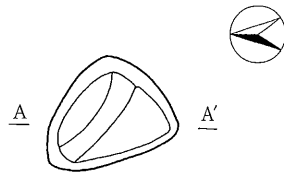
### (6) D6号土坑

#### 遺構 (第46図)

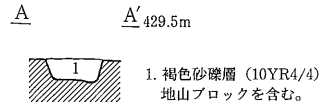
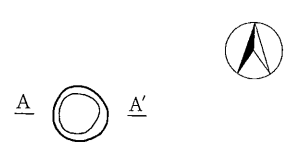
検出位置：Dう6、Dえ6グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約70cmの円形を呈し、主軸方位はN-48°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは15cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：覆土中より数点の弥生土器片が出土した。時期：出土遺物から弥生時代後期の所産と考えられる。



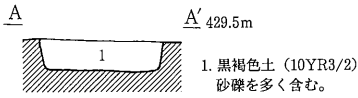
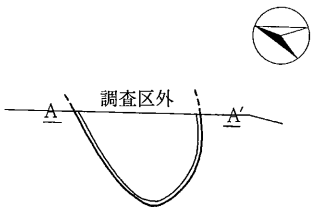
D1号土坑址



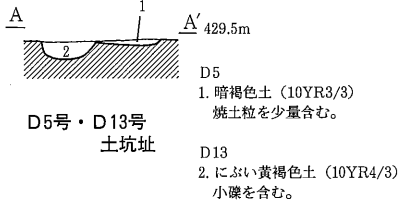
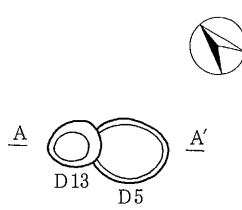
D2号土坑址



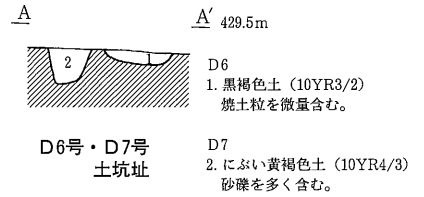
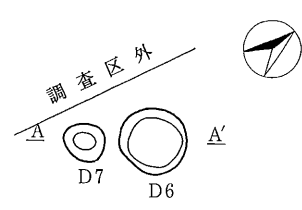
D3号土坑址



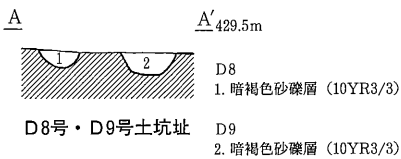
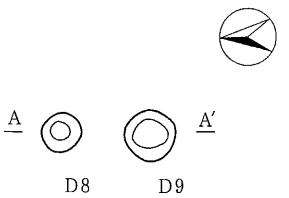
D4号土坑址



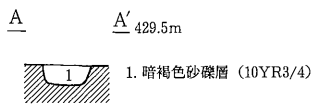
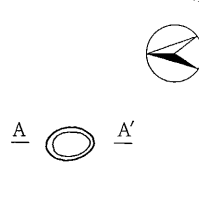
D5号・D13号土坑址



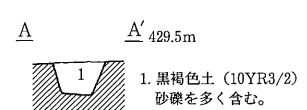
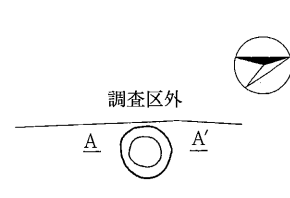
D6号・D7号土坑址



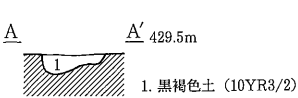
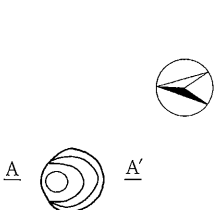
D8号・D9号土坑址



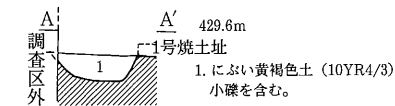
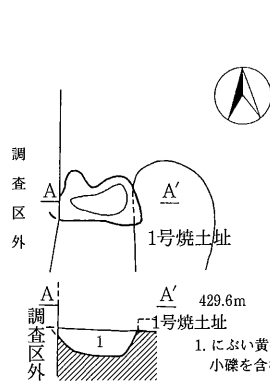
D10号土坑址



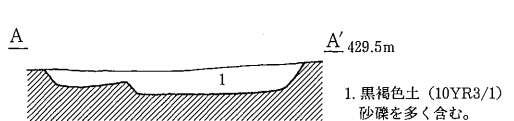
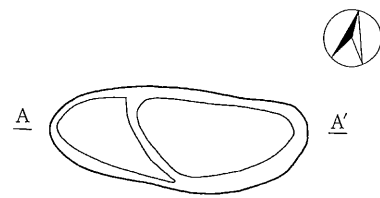
D11号土坑址



D12号土坑址



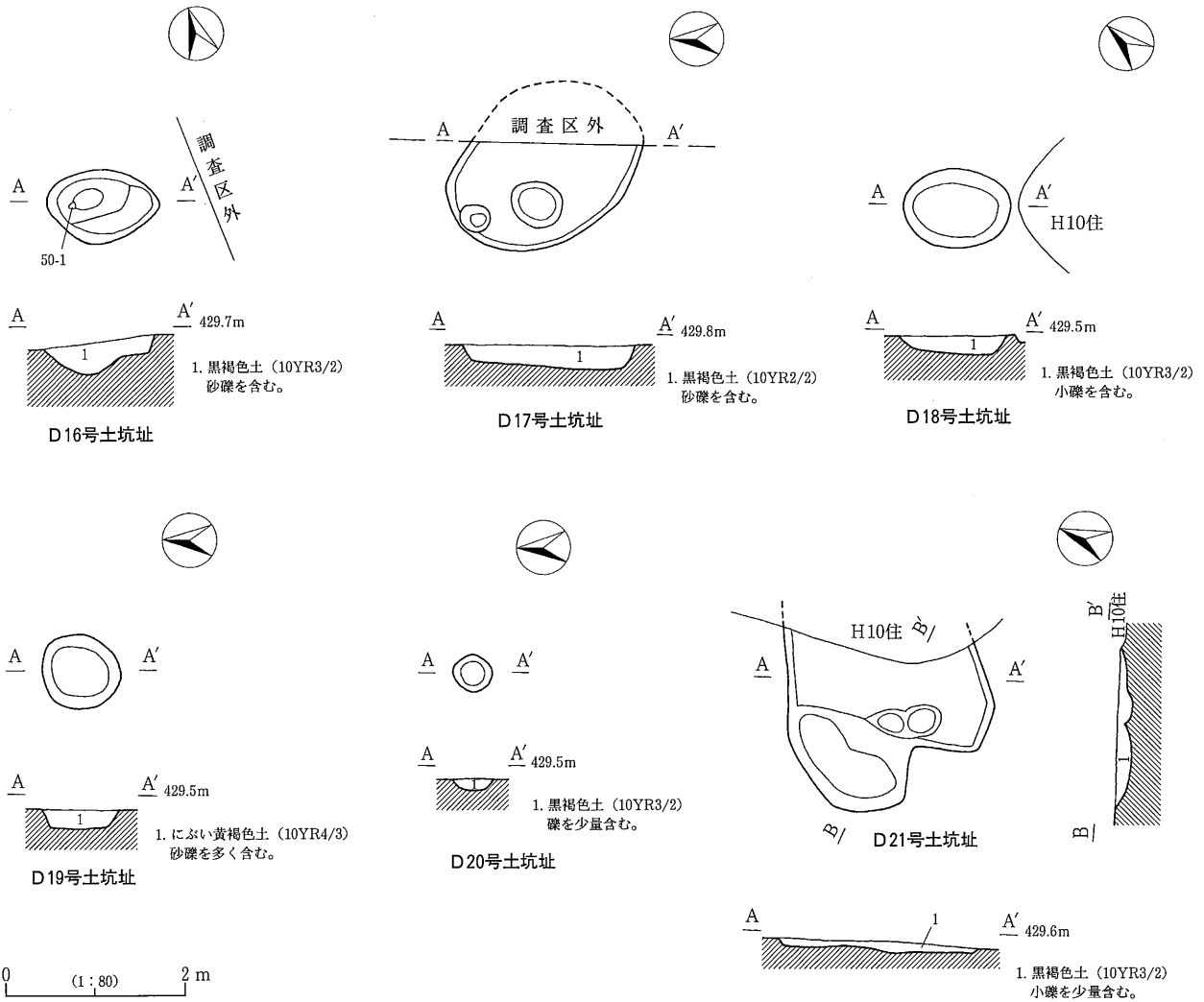
D14号土坑址



D15号土坑址

0 (1:80) 2 m

第46図 土坑址実測図〈1〉



第47図 土坑址実測図〈2〉

(7) D7号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dえ6グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN-48°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは35cmである。覆土：にぶい黄褐色土 (10YR4/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(8) D8号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dう8グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN-3°-Eを指す。断面形態：やや深い皿状を呈し、検出面からの深さは15cmである。覆土：暗褐色土 (10YR3/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(9) D9号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dう8グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約55cmの円形を呈し、主軸方位はN-3°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmである。覆土：暗褐色土 (10YR3/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(10) D10号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dえ9グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約50cm、短軸約35cmの円形を呈し、主軸方位はN-0°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。覆土：暗褐色土 (10YR3/4) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(11) D11号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dえ6グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約55cmの円形を呈し、主軸方位はN-23°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。覆土：黒褐色土 (10YR3/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(12) D12号土坑

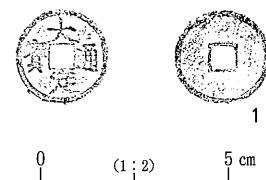
遺構 (第46図)

検出位置：Eい3、Eう3グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約70cmの円形を呈し、主軸方位はN-0°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。覆土：黒褐色土 (10YR3/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(13) D13号土坑

遺構 (第46図)

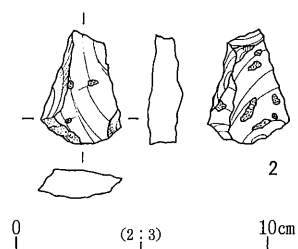
検出位置：Dう6グリッド。重複関係：D5を切る。平面形態：長軸約55cm、短軸約50cmの円形を呈し、主軸方位はN-50°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約30cmである。覆土：にぶい黄褐色土 (10YR4/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。



(14) D14号土坑

遺構 (第46図)

検出位置：Dう5グリッド。重複関係：1号焼土址を切っている。調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。覆土：にぶい黄褐色土 (10YR4/3) の単層であった。遺物出土状況：覆土中から古銭



第48図 D14号土坑址出土遺物実測図

のほか縄文土器片などが数点出土した。

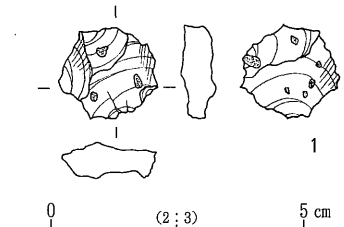
遺物（第48図、第3・8表）48-1は大定通宝である。女真族建国の金で鑄造されたもので、1178年が初鑄年代である。表面は腐食しているが金属の遺存状況は良好である。2は黒耀石の素材である。時期：出土遺物から古代から中世にかけての所産であると思われる。

#### (15) D15号土坑

##### 遺構（第46図）

検出位置：Eい5、Eう5グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約2.8m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-86°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/1）の単層であった。遺物出土状況：覆土中から縄文土器片が数点出土した。

遺物（第49図、第8表）49-1は黒耀石の素材である。時期：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。



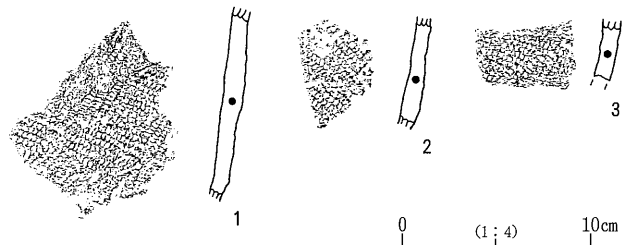
第49図 D15号土坑址出土遺物実測図

#### (16) D16号土坑

##### 遺構（第47図）

検出位置：Eい5グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN-73°-Wを指す。断面形態：やや深い皿状を呈し、検出面からの深さは約35cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：覆土中から縄文土器片が数点出土した。

遺物（第50図、第3表）50-1・3は深鉢の胴部片で結節羽状縄文が施されている。2は深鉢の胴部片で羽状縄文が施されている。時期：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。



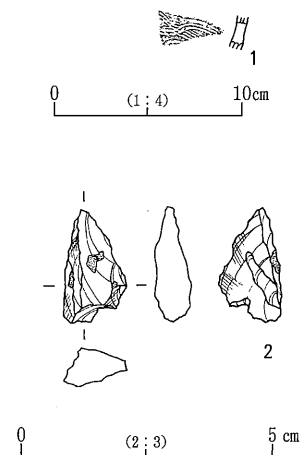
第50図 D16号土坑址出土遺物実測図

#### (17) D17号土坑

##### 遺構（第47図）

検出位置：Eい6グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。覆土：黒褐色土（10YR2/2）の単層であった。遺物出土状況：覆土中から弥生土器が数点出土した。

遺物（第51図、第3・8表）51-1は弥生時代の甕の胴部片で櫛描き波状文が施されている。2は黒耀石製石鏃の未製品である。時期：出土遺物から弥生時代後期以降の所産と考えられる。



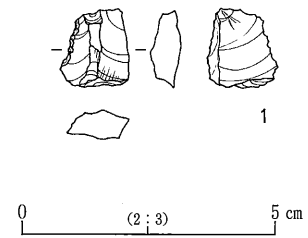
第51図 D17号土坑址出土遺物実測図



(18) D18号土坑

遺構 (第47図)

検出位置：Eい6グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN-41°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約25cmである。覆土：黒褐色土（10YR 3/2）の単層であった。遺物出土状況：時期不明の土器片が数点出土した。遺物（第52図、第8表）52-1は再加工痕のみとめられる剥片である。時期：帰属時期は不明である。



第52図 D18号土坑址出土遺物実測図

(19) D19号土坑

遺構 (第47図)

検出位置：Eう6グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約90cm、短軸約80cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-0°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。覆土：にぶい黄褐色土（10YR4/3）の単層であった。遺物出土状況：時期不明の土器片が数点出土した。時期：帰属時期は不明である。

(20) D20号土坑

遺構 (第47図)

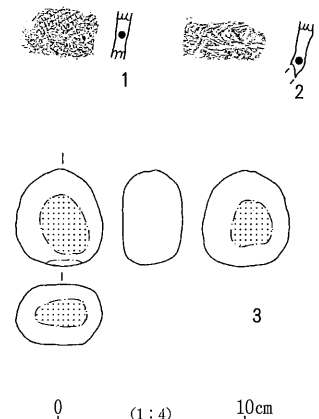
検出位置：Eう6グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約40cmの円形を呈し、主軸方位はN-0°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(21) D21号土坑

遺構 (第47図)

検出位置：Eい6、Eい7、Eう7グリッド。重複関係：H10号住居址に切られる。平面形態：H10号住居址に切られており不明である。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは12cmである。覆土：黒褐色土（10YR 3/2）の単層であった。遺物出土状況：覆土中から縄文土器が十数点出土した。

遺物（第53図、第3・4表）53-1は深鉢の胴部片で羽状縄文が施されている。2は深鉢の胴部片でループ文が施されている。3は磨石で断面卵型の円礫の表裏面に広く磨滅痕が確認できる。時期：出土遺物から縄文時代前期の所産と考えられる。



第53図 D21号土坑址出土遺物実測図

第3節 その他の遺構

(1) 1号集石遺構

遺構 (第54図)

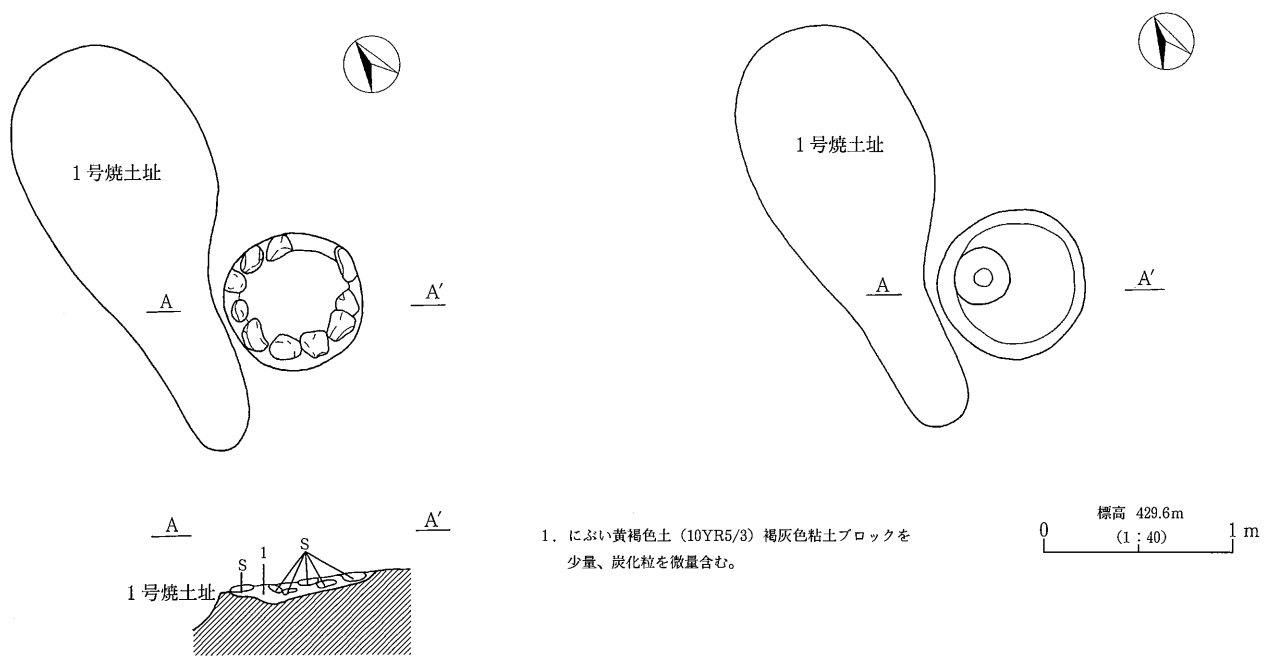
検出位置：Dう5グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約80cmの円形を呈し、主軸方位はN-0°-E

を指す。地面を浅く掘り込んで、礫を敷き詰めた状態であった。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約8cmである。覆土：にぶい黄褐色土(10YR5/3)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

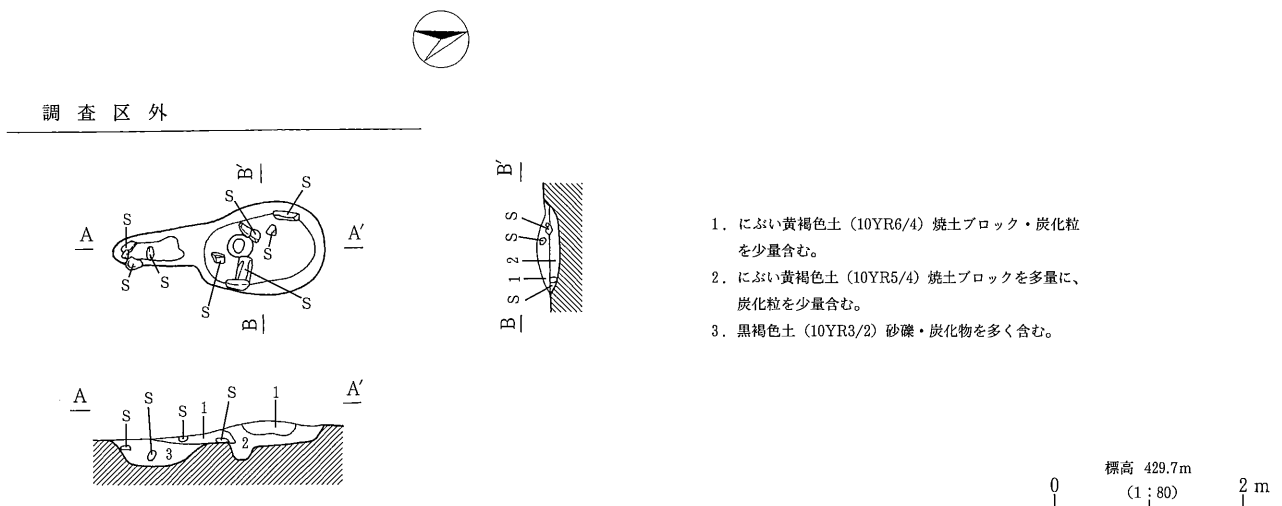
(2) 1号焼土址

遺構(第55図)

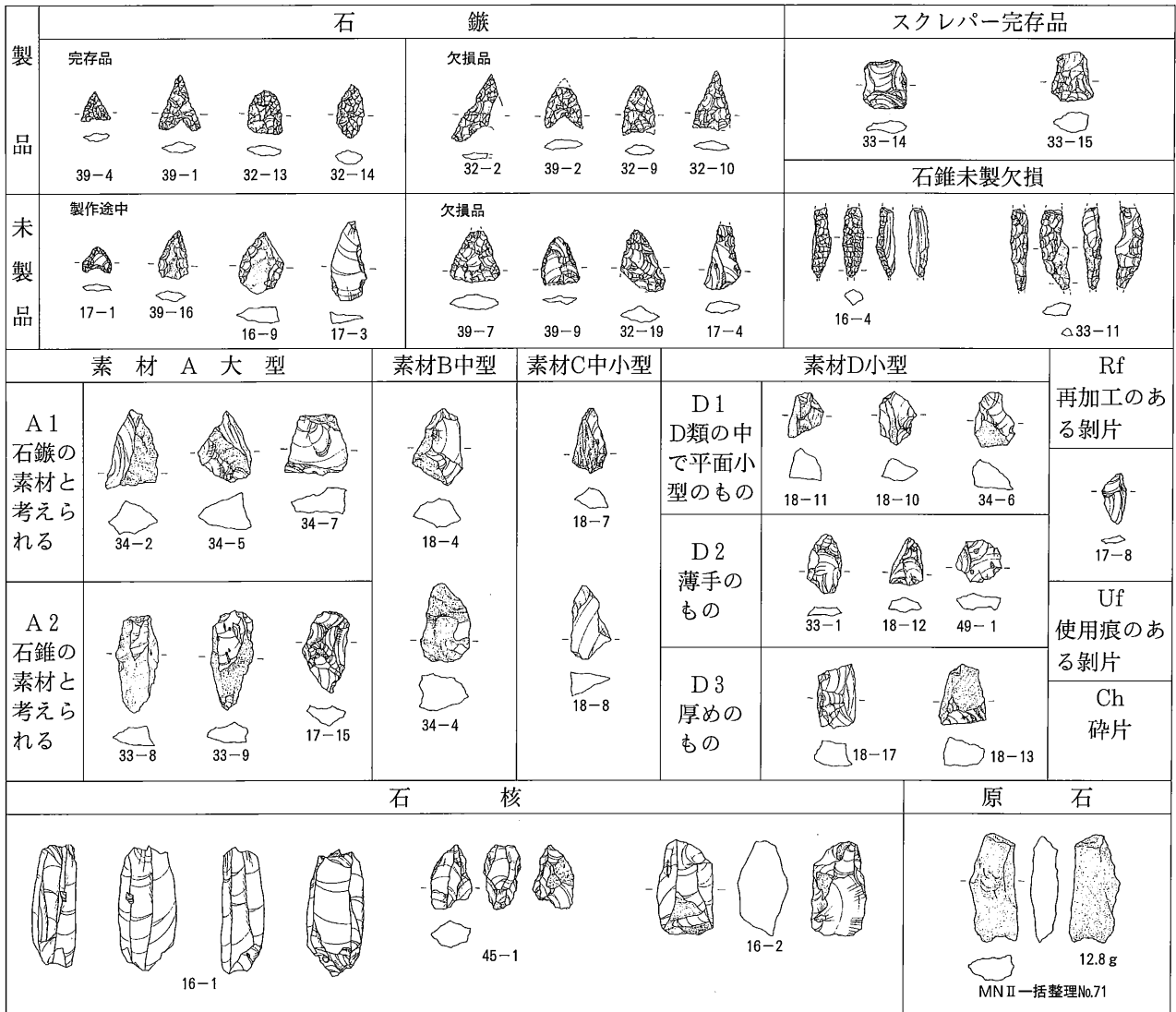
検出位置：Dう5、Dう6グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約2.2m、短軸約1mの楕円形を呈し、主軸方位はN-17°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。上部を粘土状の土で覆った、カマド状の構造物であったものと思われる。覆土：にぶい黄褐色土(10YR5/4)で覆われる構造であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明であるが、古代以降の所産であると思われる。



第54図 1号集石遺構実測図



第55図 1号焼土址実測図



町横尾遺跡Ⅱ出土黒耀石出土数（遺構毎の出土数を示すもので、必ずしも黒耀石の帰属時期を示すものではない）

遺構名	帰属時期	製品 (欠損品含)		未製品 (未製欠損品含)		製品 スクレ パー	素 材						剥片			石核	原石	総数	
		石鏃	石錐	石鏃	石錐		A1	A2	B	C	D1	D2	D3	Rf	Uf				Ch
H1	平安前半			1								1		1	1	17			21
H2	奈良				1				1			2	2			6			12
H3	縄文前期	3		13	3		5	3	15	9	12	9	2	1	3	93	2		173
H4	古墳後期												1			3			4
H5	古代								1							3			4
H6	平安前半										1		1			3			5
H7	弥生後期	13		7	1	2	5	1	10		17	15	4	2	6	164	1		248
H8	縄文前期	8		11	1			5	8		11	2	2		1	124			173
H9	縄文前期			1				1	4		5	5	3			35			54
H10	古墳後期	2							2		2	3	1	2		120			132
D14	古代～中世												1			2			3
D15	縄文前期												1			2			4
D16	縄文前期															9			9
D17	弥生後期			1												1			2
D18	不明													1					1
D21	縄文前期															2			2
遺構外	不明						1	1	2		3					10		1	18
計		26	—	34	6	2	11	13	40	12	52	37	17	5	12	594	3	1	865

第1表 掲載土器観察表

< > 推定値 ( ) 残存値を示す。

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種	残存度	法量 (cm)			調整・文様		色調	注記	備考
							口径	器高	底径	外面	内面			
7-1	H1	7	7	須恵器	坏	完存	13.5	3.3	6.0	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内) 2.5Y7/2灰黄色	MM II H1住No7、a区、a区中層	
7-2	H1	6	6	須恵器	坏	完存	12.0	3.1	6.6	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内) 10G5/1緑灰色	MM II H1住No6	
7-3	H1	3	3	須恵器	坏	口~底部1/2	<13.0>	3.8	<6.8>	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外断) 10YR4/2灰黄褐色 内) 7.5YR5/2灰オリブ色	MM II H1住No3、a区中層、b区中層、b区上層	
7-4	H1		11	須恵器	坏	口~底部1/4	<13.0>	3.5	<6.2>	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内断) 10G5/1緑灰色	MM II H1住a区、b区中層、b区床直	
7-5	H1		10	須恵器	坏	口~底部1/2	<13.0>	3.7	<7.4>	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内断) 7.5YR6/1灰色	MM II H1住a区、a区中層	
7-6	H1		12	須恵器	短頸壺	口~胴中位	<9.6>	(6.9)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内断) 2.5GY5/1暗オリブ灰色	MM II H1住a区、a区中層、床土層	自然釉付着
7-7	H1	5	5	土師器	鉢	口~体部	—	(10.4)	—	口~頸部)ヨコナデ、頸~胴部)ヘラケズリ	ヨコナデ	外内断) 5YR5/6明赤褐色	MM II H1住No5	
7-8	H1	13	13	土師器	甕	底部	—	(4.8)	6.1	ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ハケメ	外) 2.5YR5/4にふい赤褐色 内) 7.5YR7/3にふい橙色	MM II H1住a区、b区中層	
10-1	H2		3	須恵器	坏	口~底部1/3	<12.8>	4.0	<9.6>	ロクロヨコナデ、底部高台貼付後ロクロ調整	ロクロヨコナデ	外内) 2.5Y4/1灰黄色 断) 10YR4/2灰黄褐色	MM II H2住b区サブトレ	
11-1	H2		4	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	櫛歯模刻み目・斜位条痕文	ナデ	外内断) 7.5YR5/3にふい褐色	MM II H2住床	神ノ木
14-1	H3	1	1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	附加条縄文、回転方向転換による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR4/3褐色	MM II H3住No1	含繊維
14-2	H3	10	10	縄文	深鉢	口~胴部1/8	—	—	—	羽状縄文(磨滅著しく原体不明)	ナデ	外内) 7.5YR4/3褐色 断) 7.5YR3/1黒褐色	MM II H3住No10	含繊維 関山IIか
		18	18	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	羽状縄文(磨滅著しく原体不明)	ナデ	外内断) 10YR5/3にふい黄褐色	MM II H3住No18	
14-3	H3		26	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	異条縄文	ナデ	外内断) 10YR5/4にふい黄褐色	MM II H3住P1	
14-4	H3		41	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文回転方向転換による羽状縄文	ナデ	外断) 10YR5/4にふい黄褐色 内) 10YR6/4にふい黄褐色	MM II H3住b区	含繊維 関山IIか
14-5	H3		48	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	無節縄文	ナデ	外内断) 5YR5/4にふい黄褐色	MM II H3住P1	含微繊維
14-6	H3	2	2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	櫛歯模工具による刻み目文	ナデ	外内断) 7.5YR5/6明褐色	MM II H3住No2	神ノ木
14-7	H3		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	浅い櫛歯	ナデ	外内断) 10YR4/3にふい黄褐色	MM II H3住b区	神ノ木
14-8	H3		24	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	単沈線による連続刻み目文	ナデ	外内断) 10YR6/4にふい黄褐色	MM II H3住b区	神ノ木 異系統
14-9	H3		49	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	櫛歯模工具による連続刻み目文	ナデ	外) 5YR4/4にふい赤褐色 内断) 5YR3/3暗赤褐色	MM II H3住a区	神ノ木 異系統
14-10	H3	11	11	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	束の縄	ナデ	外内断) 10YR5/3にふい黄褐色	MM II H3住No11	
14-11	H3		46	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RLとLR縄文結節羽状縄文	ナデ	外断) 5YR4/6赤褐色 内) 10YR4/1褐灰色	MM II H3住c区サブトレ	
14-12	H3		43	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文回転方向転換による羽状縄文	ナデ	外内断) 10YR4/2にふい黄褐色	MM II H3住d区	
14-13	H3		45	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	LR縄文とR縄文終条体回転施文による羽状縄文	ナデ	外内) 7.5YR5/6明褐色 断) 7.5YR3/2黒褐色	MM II H3住c区サブトレ	含繊維
14-14	H3		40	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	無節端部結束	ナデ	外) 10YR4/2灰黄褐色 内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H3住c区	
14-15	H3		42	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文回転方向転換による羽状縄文	ナデ	外内断) 10YR5/4にふい灰黄褐色	MM II H3住c区	含繊維
14-16	H3	21	21	縄文	深鉢	口縁部	—	—	—	無節縄文、口唇部刻み目	ナデ	外内) 10YR5/3にふい黄褐色 断) 10YR3/1黒褐色	MM II H3住No21、d区	含繊維
14-17	H3		44	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文	ナデ	外) 7.5YR4/6褐色 内断) 7.5YR3/2黒褐色	MM II H3住a区サブトレ	中期か
14-18	H3		47	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文	ナデ	外内断) 5YR5/4にふい黄褐色	MM II H3住c区	含繊維
14-19	H3		28	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	組組原体	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H3住a区サブトレ	
14-20	H3		27	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	組組原体	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H3住c区	
14-21	H3		25	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	単沈線による格子目文	ナデ	外内断) 7.5YR4/3褐色	MM II H3住c区	
14-22	H3		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	押型文	ナデ	外内断) 5YR4/4にふい赤褐色	MM II H3住c区	
20-1	H4	4	4	土師器	甕	口~底部3/4	13.2	15.7	7.5	ナデ、底部木葉痕	ナデ	外内断) 5YR5/6明赤褐色	MM II H4住No4、c区サブトレ	
20-2	H4	8	8	土師器	甕	胴~底部2/3	—	(10.0)	6.5	丁寧なヘラミガキ、底部木葉痕	ヘラナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい赤褐色	MM II H4住No8	
20-3	H4	6	6	土師器	甕	底部	—	(4.0)	8.0	ヘラナデ、底部木葉痕	ヘラナデ	外) 10YR3/3暗褐色 内) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H4住No6	

第2表 掲載土器観察表

< > 推定値 ( ) 残存値を示す。

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種	残存度	法量 (cm)			調整・文様		色調	注記	備考
							口径	器高	底径	外面	内面			
20-4	H4	2	2	土師器	甕	胴部片	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	外断) 10YR4/2灰黄褐色 内) 10YR5/4にふい黄褐色	MM II H4住No2	
21-1	H4	12	12	縄文	深鉢	底部1/2	—	(3.6)	(9.0)	櫛歯様工具による連続 刺突文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい赤褐色	MM III H4住区上・中・ 下層	神ノ木 異系統
24-1	H5	1	1	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目叩き目文	青海波文	外内断) N5/0灰色	MM II H5住No1	同一個体
		2	2	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目叩き目文	青海波文		MM II H5住No2	
		3	3	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目叩き目文	青海波文		MM II H5住No3	
		4	4	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目叩き目文	青海波文		MM II H5住No4	
		5	5	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目叩き目文	青海波文		MM II H5住No5	
24-2	H5	6	6	土師器	坏	口~底部 1/3	(15.0)	(3.4)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内断) 10YR7/2にふい黄褐色	MM II H5住No6	
27-1	H6	9	9	須恵器	坏	口~底部 1/3	(11.8)	3.7	6.0	ロクロヨコナデ、底部 回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内断) 5YR5/1灰色	MM II H6住No9	墨書土器 「口継」
27-2	H6	1	1	須恵器	長頸甕	口~肩部 1/3	(7.7)	(15.3)	—	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	外内断) N5/0灰色	MM II H6住No1	
27-3	H6	10	10	土師器	坏	口~底部 3/4	(14.0)	(5.5)	7.4	ロクロヨコナデ、底部 回転糸切り	ロクロヨコナデ	外内断) 5YR6/6橙色	MM II H6住No10	
27-4	H6	4	4	土師器	長胴甕	口~頸部 片	(22.2)	(7.2)	—	口縁部) ヨコナデ 頸部) ヘラケズリ	ナデ	外内断) 5YR5/1灰色	MM II H6住No4	
27-5	H6	13	13	土師器	甕	口~胴部 1/5	(12.0)	(5.5)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	外内断) 7.5YR6/4にふい橙色	MM II H6住No13	
30-1	H7	1	1	弥生	高坏	ほぼ完形	26.0	22.0	16.5	丁寧なヘラミガキ・赤 色塗彩	丁寧なヘラミガキ・赤 色塗彩	坏内外、脚外) 10R4/6赤色 脚内、断) 5YR6/4にふい橙色	MM II H7住No1	
30-2	H7	17	17	弥生	浅鉢	口~底部 3/5	15.8	6.0	(5.2)	横位ヘラミガキ・赤色 塗彩	横位ヘラミガキ・赤色 塗彩	外内) 2.5YR4/4にふい赤褐色 断) 5YR3/1黒褐色	MM II H7住No17	
30-3	H7	18	18	弥生	浅鉢	底部1/5	—	(4.5)	(4.5)	縦位ヘラミガキ・赤色 塗彩	横位ヘラミガキ・赤色 塗彩	外内) 2.5YR4/4にふい赤褐色 断) 5YR3/1黒褐色	MM II H7住No18	
30-4	H7		30	弥生	壺	胴部片	—	—	—	細い単沈線による櫛歯 文	ナデ	外内断) 5YR4/4にふい赤褐色	MM II H7住カクラン	吉田
30-5	H7	7	7	弥生	壺	胴~底部 1/3	—	(13.0)	8.5	ヘラミガキ	ハケメ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H7住No7	
30-6	H7	5	5	弥生	甕	頸部片	—	—	—	8本一組の櫛歯き波状 文(下→上)・同工具 による糜状文3連止め、 胴部波状文→頸部糜状 文→頸部波状文	ヨコナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H7住No5	
30-7	H7	3	3	弥生	甕	ほぼ完形	11.6	15.1	6.0	4~5本一組櫛歯き波状 文(上→下)	ヘラミガキ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H7住No3	
30-8	H7	19	19	弥生	甕	口~胴部 1/4	13.1	(12.0)	—	6本一組の櫛歯き波状 文(下→上)→同工具 による糜状文2連止め	ヨコナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H7住No19、c 区上層	
30-9	H7	2	2	弥生	甕	口~胴部 2/3	12.0	(8.5)	—	8~9本一組の櫛歯き波 状文(上→下)	ヘラミガキ	外内断) 7.5YR4/4褐色	MM II H7住No2	
30-10	H7	15	15	弥生	甕	底部	—	—	7.8	ナデ、底面ヘラミガキ	ナデ	外内断) 10YR4/4褐色	MM II H7住No15	
35-1	H7	29		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	集合円形刺突文	ナデ	外内断) 10YR4/3にふい黄褐色	MM II H7住床	
35-2	H7	28		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半截竹管腹による並行 沈線文	ナデ	外内断) 7.5YR4/3褐色	MM II H7住床	有尾
35-3	H7	25		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	LR縄文端部他繊維結 束・緩いRL縄文端部 他繊維結束原体による 羽状縄文、円形貼付文	丁寧なミガキ	外内断) 10YR6/3にふい黄橙 色	MM II H7住	諸磯b
35-4	H7	32		縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	櫛歯様工具による連続 刺突文	丁寧なミガキ	外内) 10YR5/4にふい黄褐色 断) 10YR4/2灰黄褐色	MM II H7住床	神ノ木 異系統
35-5	H7	20		縄文	深鉢	底部片	—	—	—	櫛歯様工具による連続 刺突文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MM II H7住床直	神ノ木 異系統
35-6	H7	8	8	縄文	深鉢	底部	—	(4.4)	9.2	連続刻目文	ヘラナデ	外内断) 10YR5/6黄褐色	MM II H7住No8	
35-7	H7	21		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文による結節羽 状縄文	ナデ	外内) 10YR4/2にふい黄褐色 断) 10YR2/1黒色	MM II H7住	関山II 含繊維
35-8	H7	22		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文による結節羽 状縄文	ナデ	外内) 10YR4/3にふい黄褐色 断) 10YR2/1黒色	MM II H7住	関山II 含繊維
35-9	H7	34		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	束の縄	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい黄褐色	MM II H7住床直	関山II期
35-10	H7	35		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	束の縄	ナデ	外内断) 7.5YR5/6明褐色	MM II H7住カクラン	関山II期
35-11	H7	36		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉束回転 方向変換による羽状縄 文	ナデ	外内断) 10YR4/2灰黄褐色	MM II H7住カクラン	含繊維
35-12	H7	27		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	絡糸体回転施文か	ナデ	外内) 10YR6/3にふい黄橙色 断) 10YR3/1黒褐色	MM II H7住カクラン	
35-13	H7	37		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉束回転 方向変換による羽状縄 文	ナデ	外内断) 5YR5/6明赤褐色	MM II H7住床	
35-14	H7	33		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	絡糸体回転施文か	ナデ	外内断) 10YR4/4褐色	MM II H7住	
35-15	H7	24		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	ループ文・多段構成	ナデ	外内断) 10YR3/1黒褐色	MM II H7住	
35-16	H7	23		縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半截竹管連続刺突文に よる同心円文	ナデ	外内断) 10YR4/4褐色	MM II H7住	関山II 含繊維

第3表 掲載土器・金属製品観察表 < > 推定値 ( ) 残存値を示す。

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種	残存度	法量 (cm)			調整・文様		色調	注記	備考
							口径	器高	底径	外面	内面			
35-17	H7		26	縄文	深鉢	底部片	—	(2.6)	尖底	RL縄文	丁寧なナデ	外内) 7.5YR5/4にふい黄褐色断) 7.5YR3/1黒褐色	MMⅡH7住	早・前期
37-1	H8		32	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半載竹管腹による並行沈線文	ナデ	外) 10YR4/3にふい黄褐色内断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住	含繊維
37-2	H8		24	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	RL縄文、口唇部に帯条貼付文	丁寧なミガキ	外内) 10YR6/4にふい黄褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住サブトレ	関山Ⅱ含繊維
37-3	H8		23	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	LR縄文による結節羽状縄文	ナデ	外) 5YR5/6明赤褐色内) 7.5YR5/4にふい褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住	
37-4	H8	4	4	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	折り返し口縁、櫛歯様工具による連続刻突文	ナデ	外内断) 7.5YR6/4にふい橙色	MMⅡH8住No4	神ノ木
37-5	H8		33	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	櫛歯様工具による連続刻突文	ナデ	外) 10YR4/3にふい黄褐色内断) 10YR5/4にふい黄褐色	MMⅡH8住	神ノ木
37-6	H8		22	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	連続刻目	ナデ	外内断) 10YR6/4にふい黄褐色	MMⅡH8住	神ノ木期 興系統
37-7	H8	12	12	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文異原体による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/3にふい黄褐色	MMⅡH8住No12	含繊維
37-8	H8		37	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/6明褐色	MMⅡH8住	含繊維
37-9	H8		40	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/6明褐色	MMⅡH8住	
37-10	H8	10	10	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断) 10YR5/4にふい黄褐色	MMⅡH8住No10	
37-11	H8		39	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内) 10YR6/4にふい黄褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住	含繊維
37-12	H8		36	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	東の縄	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡH8住サブトレ	関山Ⅱ期
37-13	H8		38	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内) 10YR4/2灰黄褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住	含繊維
37-14	H8		34	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡH8住	
37-15	H8	1	1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部他条結節による羽状縄文	ナデ	外内断) 10YR5/4にふい黄褐色	MMⅡH8住No1	
37-16	H8		35	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結束羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/6明褐色	MMⅡH8住	
37-17	H8		26	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	波状口縁、LR縄文・半載竹管腹・連続刻目目文による重層モチーフに帯条貼付文	丁寧なミガキ	外内) 10YR3/1黒褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH8住	関山Ⅱ含繊維
37-18	H8		31	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	絡条体回転施文か	ナデ	外内断) 10YR3/2黒褐色	MMⅡH8住	
37-19	H8	18	18	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	LR縄文による結節羽状縄文	ナデ	外内断) 10YR4/3にふい黄褐色	MMⅡH8住No18	含繊維
37-20	H8		28	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	r1+LRの附加条縄文	ナデ	外内断) 10YR3/2黒褐色	MMⅡH8住	関山Ⅱ期 含繊維
37-21	H8	16	16	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	絡条体回転施文か	ナデ	外内断) 10YR4/3にふい黄褐色	MMⅡH8住No16	
37-22	H8		27	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	半載竹管腹によるコンパス文	ナデ	外内) 7.5YR5/4にふい褐色断) 7.5YR2/1黒色	MMⅡH8住	関山Ⅱ含繊維
37-23	H8		25	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	組紐原体	ナデ	外内) 7.5YR5/4にふい褐色断) 7.5YR2/1黒色	MMⅡH8住	関山Ⅱ期 含繊維
37-24	H8		29	縄文	深鉢	底部片	—	—	—	尖底	ナデ	外) 10YR6/4にふい黄褐色内断) 10YR3/1黒褐色	MMⅡH8住	早前期
42-1	H9		5	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	絡条体回転施文か	ナデ	外内断) 10YR3/2黒褐色	MMⅡH9住	
42-2	H9		6	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	東の縄	ナデ	外内断) 10YR5/3にふい黄褐色	MMⅡH9住	関山Ⅱ期
42-3	H9		7	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	波状口縁・RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内) 10YR4/3にふい黄褐色断) 10YR2/1黒色	MMⅡH9住	含繊維
42-4	H9	3	3	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文・半載竹管腹によるコンパス文	丁寧なヘラミガキ	外内) 7.5YR4/3褐色断) 7.5YR3/1黒褐色	MMⅡH9住No3	関山Ⅱ含繊維
42-5	H9	2-1	2-1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL異原体による羽状縄文	丁寧なナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡH9住No2	含繊維
42-6	H9	2-2	2-2	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	無節縄文による羽状縄文	丁寧なナデ	外内断) 7.5YR4/2灰黄褐色	MMⅡH9住No2	補修孔アリ 含繊維
42-7	H9		4	縄文	深鉢	口縁部片	—	—	—	押型文	丁寧なナデ	外内断) 5YR4/3にふい赤褐色	MMⅡH9住	早期
44-1	H10	1	1	土師器	壺	口～底部1/2	<19.0>	<27.0>	7.0	縦位ヘラナデ	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡH10住No1	図上復元
48-1	D14		1	中世	古銭	完形	タテ2.4	ヨコ2.4	厚さ0.2	大定通寶			MMⅡD14	大定通寶
50-1	D16		1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結節羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡD16	含繊維
50-2	D16		3	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR4/2灰黄褐色	MMⅡD16	含繊維
50-3	D16		2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	結節羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR4/2灰黄褐色	MMⅡD16	含繊維
51-1	D17		1	弥生	壺	胴部片	—	—	—	櫛歯波状文	ヘラナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡD17	
53-1	D21		1	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	RL縄文端部閉東回転方向変換による羽状縄文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡD21	含繊維
53-2	D21		2	縄文	深鉢	胴部片	—	—	—	ループ文	ナデ	外内断) 7.5YR5/4にふい褐色	MMⅡD21	含繊維

第4表 掲載石器観察表（黒耀石・石英以外）

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm)			質量 (g)	注 記	備 考
								長さ	幅	厚さ			
8-4	H1	2	2	礫石器	磨石	安山岩	1/3残	19.7	12.7	5.7	1830.0	MM II H1住No2	大型の断面扁平な自然石の、表面と側面に広く磨減痕が認められる。
12-6	H2		3	礫石器	磨石 叩石	安山岩	1/2残	7.3	6.2	3.3	226.0	MM II H2住d区サブトレ	断面扁平の楕円形凹礫の先端部に顕著な敲打痕を残し、裏面と側面に磨減痕を残す。
12-7	H2	1	1	礫石器	凹石	安山岩	完存	14.6	13.1	6.7	1084.6	MM II H2住No1	円形に深い溝状に敲き、その中央に数箇所小さな敲打痕を残す。
15-1	H3	17	17	礫石器	凹石	安山岩	完存	11.8	9.5	4.9	757.7	MM II H3住No17	扁平な凹礫の表裏面に浅い敲打痕を残す。
15-2	H3	16	16	礫石器	凹石	凝灰岩	1/2残	8.8	8.3	5.3	323.0	MM II H3住No16	円形凹礫の全面に顕著な敲打痕を残し、側面に磨減痕を残す。
22-2	H4	9	9	剥片石器	石槍	安山岩	基部欠損	13.2	6.3	1.8	117.0	MM II H4住No9	表裏面全体に粗い剥離調整を施し、大型石槍の形状を呈する。畏敬財か。
22-3	H4		12	礫石器	凹石	安山岩	1/4残	7.6	6.5	3.0	171.4	MM II H4住d区中・下層	扁平な凹礫の表裏面に浅い敲打痕を残す。
22-4	H4	1	1	礫石器	凹石	安山岩	完存	8.9	8.1	4.2	354.1	MM II H4住No1	扁平な凹礫の表裏面と側縁に弱い敲打痕を残す。
22-5	H4	3	3	礫石器	磨石	安山岩	完存	11.8	7.8	2.5	343.6	MM II H4住No3	扁平な凹礫の表裏面に磨減痕を残す。
22-6	H4		13	礫石器	敲石	安山岩	完存	4.4	4.2	3.8	71.1	MM II H4住d区上層	断面卵型の凹礫で表裏面に浅い敲打痕を残す。
22-7	H4	10	10	礫石器	石皿	安山岩	完存	34.0	28.2	9.0	10kg以上 計測不能	MM II H4住No10	大きな河原自然石の表面に深い凹面を持ち、左側面一箇所に若干の敲打痕を残す。
22-8	H4	5	5	礫石器	石皿	安山岩	1/2残	29.5	18.2	5.8	3280.0	MM II H4住No5	大きな河原自然石の表面に深い凹面を持ち、若干の敲打痕を残す。
25-1	H5		8	礫石器	敲石	軽石	完存	6.6	5.5	3.0	36.4	MM II H5住カマド	握り拳大の断面扁平礫の表裏面に、浅い敲打痕を残す。
28-3	H6	2	2	礫石器	石皿	安山岩	完存	33.3	24.5	11.5	10kg以上 計測不能	MM II H6住No22	硬く重い大きい河原自然礫の中央に、磨減使用に伴う顕著な凹面を持つ。
31-1	H7		17	剥片石器	磨製 石包丁	頁岩	1/3残	3.7	5.6	0.4	13.5	MM II H7住c区サブトレ	表裏面からの穿孔を有し、表裏面ともに丁寧な磨きを施し、成形している。
31-2	H7	16	16	剥片石器	打製 石包丁	頁岩	完存	4.7	10.6	0.8	39.3	MM II H7住No16	表面に自然面を一部残し、不定形に掛り剥落する部分を持つ。表面は周縁よりの粗い剥離により調整され、裏面は主要剥離面に刃部調整を施している。
31-3	H7	10	10	礫石器	磨石 敲石	安山岩	完存	11.2	8.6	4.8	635.5	MM II H7住No10	扁平な凹礫の側面に顕著な磨減痕を残し、表面に磨減痕を残す。裏面に広く黒色化した部分が確認できる。
31-4	H7	6	6	礫石器	磨石 敲石	安山岩	1/4残	11.1	12.7	5.4	1183.0	MM II H7住No6	扁平な凹礫の表面一部と裏面一面に顕著な磨減痕を残し、側面に顕著な敲打痕が確認できる。
38-1	H8	24	24	剥片石器	打製石斧	安山岩	完存	6.7	4.2	0.8	19.4	MM II H8住一括	縦長剥片の表面に粗い剥離を施し、長辺に細かい剥離調整を施し、断面三角形を作出する。
38-2	H8	23	23	剥片石器	打製 石包丁	頁岩	完存	4.2	8.3	0.8	33.1	MM II H8住サブトレ	表裏面ともに周縁より粗い剥離により調整しているが、刃部の調整も粗く未製品の可能性が有る。
38-3	H8	25	25	礫石器	砥石か	砂岩	1/4残	4.7	3.0	1.8	13.5	MM II H8住一括	硬い小型の凹礫表面に細かい磨減痕を残す。
38-4	H8	20	20	礫石器	磨石	安山岩	完存	10.0	9.7	4.2	608.9	MM II H8住No20	断面扁平の凹礫を使用し、表裏面に広く磨減痕を残す。
38-5	H8	22	22	礫石器	磨石	軽石	完存	7.4	5.6	5.0	53.3	MM II H8住一括	断面円形様の拳大自然石の表面の一部に弱い磨減痕が確認できる。
38-6	H8	19	19	礫石器	敲石 磨石	安山岩	1/2残	7.6	8.0	4.3	747.7	MM II H8住No19	断面扁平の凹礫を使用し、表裏・側面に広く磨減痕を残し、端部に敲打痕が確認できる。
38-7	H8	5	5	礫石器	凹石	安山岩	完存	11.0	8.7	4.8	510.9	MM II H8住No2	断面算盤球様の表面に深い敲打痕が残る。
38-8	H8	6	6	礫石器	敲石 磨石	安山岩	完存	13.0	9.2	3.7	743.4	MM II H8住No6	断面扁平の凹礫を使用し、表裏面および側面に浅い敲打痕が確認できる。表裏面に広く磨減痕を残す。
38-9	H8	21	21	礫石器	磨石	安山岩	完存	10.5	16.3	9.1	194.0	MM II H8住No21	硬い凹礫の表面および側面に磨減による凹面を残す。据置きにより使用したものか。
45-9	H10	3	3	礫石器	敲石	安山岩	完存	12.3	6.6	4.5	606.2	MM II H10住No3	断面卵型の長楕円礫の表裏面および片側面に、浅い敲打痕が確認できる。
53-3	D21		1	礫石器	磨石	安山岩	完存	5.1	4.6	3.2	115.4	MM II D21上層	断面卵型の凹礫の表裏面に広く磨減痕が確認できる。

第5表 掲載石器観察表（黒耀石・石英）

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm)			質量 (g)	注 記	備 考
								長さ	幅	厚さ			
8-1	H1		26	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.2	1.5	0.6	1.8	MM II H1住a区	不純物のやや多い素材を使用し、旧剥離面を広く残す。
8-2	H1		127	素材	D2	黒耀石	—	2.2	1.6	0.5	1.4	MM II H1住床層	断面三角形で不純物をやや含む。
8-3	H1		66	剥片	Rf	黒耀石	—	3.3	1.4	0.5	1.1	MM II H1住b区中層	上面と片側面に自然面を残す薄い剥片の裏面側縁に、細かい剥離調整を施す。
12-1	H2		27	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.5	1.8	0.5	1.7	MM II H2住c区	黒色の縞を持つ素材を使用し、裏面に自然面を広く残す。
12-2	H2		159	素材	D2	黒耀石	—	2.5	1.7	1.4	5.1	H2住d区	断面三角形で不純物を含み、上面と側面に自然面を残す。
12-3	H2		158	素材	D3	黒耀石	—	3.5	1.2	1.0	5.1	H2住b区サブトレ	断面三角形で正面に節理面を残す。
12-4	H2		128	素材	D2	黒耀石	—	2.0	2.2	0.8	2.1	MM II H2住b区サブトレ	断面三角形で不純物をやや含む、正面に自然面を残す。
12-5	H2		61	石錐	素材	黒耀石	—	4.2	1.7	1.0	5.2	MM II H2住c区	上下および左側面に自然面を残し、裏面に主要剥離面を広く残す不純物の少ない素材を正面からの大きな剥離により縦長に整形する。
16-1	H3		153	石核	—	黒耀石	—	5.3	2.4	1.8	24.5	MM II H3住No13	下方端部に不純物を含むが、全体に滑らかな素材。断面は整った五角形で、うち4面は上方より1面は下方より規則的に縦長の剥離を行なう。
16-2	H3		154	石核	—	黒耀石	—	4.0	2.3	1.9	20.9	MM II H3住床	断面四角形で、頭頂部に節理面、一部に自然面を残す。両側面を上方と下方からそれぞれ剥離の後、表裏面を上下よりそれぞれ縦長に剥離を行なう。
16-3	H3		152	石核	—	黒耀石	—	5.0	3.2	1.6	34.7	MM II H3住P1	不純物を多く含む概ね上方より広く剥離する。
16-4	H3		62	石錐	未製品欠損	黒耀石	基部半欠	3.0	0.9	0.8	1.6	MM II H3住a区	透明度の高い素材を使用し、裏面に主要剥離面を未調整のまま残し、正面の丁寧な剥離調整中に横切断したことで製作を中断したと考えられる。
16-5	H3		1	石鏃	製品平基鏃	黒耀石	完存	2.0	1.4	0.4	0.7	MM II H3住貼床	不純物を多く含む素材を使用し、粗い剥離を施す。
16-6	H3		30	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.1	1.4	0.7	1.5	MM II H3住c区	不純物をやや含む素材を使用し、全体に粗い剥離を施す厚みを持つことより未製品と判断した。
16-7	H3		9	石鏃	製品欠損凸基鏃	黒耀石	基部一部欠	2.2	1.7	0.5	1.2	MM II H3住c区サブトレ	不純物を多く含む素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
16-8	H3		32	石鏃	未製品	黒耀石	—	1.7	1.5	0.3	1.1	MM II H3住d区	不純物のやや多い素材を使用し、粗い剥離により外形を作出する。
16-9	H3		33	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.7	1.9	0.7	3.2	MM II H3住d区	表裏面に旧剥離面を持ち、表裏面ともに周縁に粗い剥離を施す。側面に自然面を持つ。
16-10	H3		44	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	側縁から中央一部欠	2.1	1.6	0.5	1.0	MM II H3住c区	裏面は主要剥離面を未調整に残し、表面は粗い剥離の後側縁よりの細かい剥離調整中に深い剥離が中央に至ったために製作を中断したと考えられる。
16-11	H3		10	石鏃	製品欠損凹基鏃	黒耀石	片脚残	1.5	1.1	0.3	0.3	MM II H3住b区	若干不純物を含む素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
16-12	H3		28	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.0	1.9	0.6	1.9	MM II H3住a区サブトレ	不純物をやや含む、細かい縞を持つ素材を使用する。
16-13	H3		29	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.2	1.8	0.4	1.1	MM II H3住d区	表面に広く自然面を残し、裏面は未調整のまま主要剥離面を残す。
16-14	H3		45	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	横位半欠	2.0	1.6	0.3	0.8	MM II H3住c区	透明度の高い裏面に節理面を広く残す素材を使用し、正面に周縁よりの細かい剥離を施すが、裏面から横位に切断したことにより製作を中断したと考えられる。
17-1	H3		31	石鏃	未製品	黒耀石	—	1.2	1.2	0.2	0.3	MM II H3住d区	透明度の高い素材を使用し、小さな形状を呈す。裏面側縁に細かい剥離調整を施すが、表裏面ともに主要剥離面を広く残し、裏面は未調整であることより未製品と判断した。
17-2	H3		43	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	横位半欠	1.7	1.5	0.5	0.8	MM II H3住c区	裏面に主要剥離面を未調整に残し、正面は全体に粗い剥離の後周縁よりの細かい剥離中に大きく素材を切断したことにより製作を中断したと考えられる。
17-3	H3		63	石錐	未製品	黒耀石	—	3.4	2.0	0.6	2.0	MM II H3住カクラン	表裏面に主要剥離面と先端に自然面を残す素材を使用し、正面側縁に細かい剥離を施す。
17-4	H3		41	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	先端部欠	2.7	1.4	0.5	1.9	MM II H3住P9	不純物の多い素材を使用し、全体に粗い剥離の後、片側縁よりの細かい剥離調整時に、先端部を切断したことにより製作を中断したと考えられる。
17-5	H3		40	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	先端部欠	2.1	1.9	0.8	2.7	MM II H3住a区	表裏面に自然面を多く持つ断面三角形の素材を使用し、周縁に細かい剥離を施しながら整形途中に正面からの打撃により先端部を欠損し、製作を中断したと考えられる。
17-6	H3		42	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	縦位半欠	2.0	1.2	0.4	0.7	MM II H3住c区	表裏面に節理面を広く持つ薄手の素材を使用し、周縁に細かい剥離調整を施すが、正面よりの打撃により縦位に切断され製作を中断したと考えられる。
17-7	H3		46	石鏃	未製品欠損品	黒耀石	先端部欠	1.7	1.5	0.3	0.7	MM II H3住a区	透明度の高い表裏面に主要剥離面を広く残す素材を使用し、周縁に表裏交互の剥離調整中、横位に切断したことで製作を中断したと考えられる。
17-8	H3		67	剥片	Rf	黒耀石	—	2.2	1.1	0.3	0.4	MM II H3住b区	上面に自然面を残す、透明度の高い薄く小さな剥片の上側縁に細かい剥離を施す。
17-9	H3		75	素材	A1	黒耀石	—	3.5	1.9	1.5	9.8	MM II H3住床直	裏面に主要剥離面を、側面に自然面を残す黒色の不純物の無い素材。
17-10	H3		73	素材	A1	黒耀石	—	3.7	2.5	1.6	9.2	MM II H3住c区	断面三角形で、節理面と自然面、節理面と大きな剥離、主要剥離面を各面に持つ。
17-11	H3		72	素材	A1	黒耀石	—	3.4	2.0	0.8	6.1	MM II H3住c区サブトレ	上側面に節理面を残し、表面に同方向の規則的な剥離を施す。



第6表 掲載石器観察表（黒耀石・石英）

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm)			質量 (g)	注 記	備 考
								長さ	幅	厚さ			
17-12	H3		74	素材	A1	黒耀石	—	3.2	2.4	1.4	13.6	MM II H3住d区	断面方形で、周縁に自然面と節理面を残す。
17-13	H3		76	素材	A1	黒耀石	—	3.0	4.0	1.3	13.5	MM II H3住b区床直	表裏面に節理面を広く残す。
17-14	H3		83	素材	A2	黒耀石	—	3.9	1.9	0.9	5.0	MM II H3住a区	透明度が高く黒い縞を持つ素材を使用し、断面三角形の扁平形を呈する。
17-15	H3		82	素材	A2	黒耀石	—	3.5	1.8	0.8	4.2	MM II H3住P1	不純物を含み下に尖る形を呈する。
17-16	H3		89	素材	B1	黒耀石	—	3.8	1.9	0.9	7.9	MM II H3住d区	片側面に自然面を残し、表裏面に粗い剥離を施す。
18-1	H3		92	素材	B1	黒耀石	—	3.0	1.7	1.0	4.6	MM II H3住c区	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
18-2	H3		94	素材	B1	黒耀石	—	3.2	1.9	1.0	5.2	MM II H3住b区	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
18-3	H3		90	素材	B1	黒耀石	—	3.8	2.0	1.3	7.8	MM II H3住c区サブトレ	断面三角形で、表側面に自然面を残す。
18-4	H3		88	素材	B1	黒耀石	—	3.3	2.1	1.2	6.4	MM II H3住a区	断面三角形で、側面に自然面を残す。
18-5	H3		93	素材	B1	黒耀石	—	3.5	2.0	1.1	5.3	MM II H3住P4	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
18-6	H3		91	素材	B1	黒耀石	—	2.7	2.1	1.1	6.3	MM II H3住c区サブトレ	断面長方形で、上面に自然面を残す。
18-7	H3		107	素材	C1	黒耀石	—	2.8	1.4	0.9	3.2	MM II H3住b区	扁平で表裏面に節理面を残し、側面を粗い剥離で整形する。
18-8	H3		106	素材	C1	黒耀石	—	3.1	1.6	1.0	4.2	MM II H3住a区	扁平断面三角形で上側面に自然面を残す。
18-9	H3		110	素材	D1	黒耀石	—	2.6	1.5	1.0	3.4	MM II H3住 b 区	節理面と自然面を残す。
18-10	H3		109	素材	D1	黒耀石	—	2.3	1.5	1.1	3.6	MM II H3住d区	不純物を多く含む断面三角形を呈する。
18-11	H3		111	素材	D1	黒耀石	—	1.9	1.3	1.2	4.1	MM II H3住P1	不純物を多く含む、片側面に自然面を残す。
18-12	H3		133	素材	D2	黒耀石	—	2.0	1.4	0.7	1.5	MM II H3住d区	断面三角形で不純物をやや含む、側面一部に自然面を残す。
18-13	H3		132	素材	D3	黒耀石	—	2.5	1.9	0.9	5.0	MM II H3住c区サブトレ	断面三角形で上面と片側面、表裏面に自然面を残す。
18-14	H3		131	素材	D2	黒耀石	—	2.6	1.7	0.7	2.9	MM II H3住c区	断面三角形で不純物をやや含む。
18-15	H3		129	素材	D2	黒耀石	—	2.6	2.0	0.7	2.7	MM II H3住a区	断面三角形で不純物をやや含む。
18-16	H3		130	素材	D2	黒耀石	—	2.9	1.8	0.7	2.8	MM II H3住a区	断面三角形で不純物をやや含む。
18-17	H3		160	素材	D2	黒耀石	—	2.3	1.7	1.2	5.2	H3住a区	断面三角形で不純物をやや含む。
22-1	H4		147	素材	D3	黒耀石	—	3.2	2.4	1.6	6.1	MM II H4住d区下層	断面三角形で、下側面以外は全て自然面を残す。
28-1	H6		112	素材	D1	黒耀石	—	2.2	1.1	0.9	3.7	MM II H6住カマド	側面に自然面を残し、節理面で細かく砕けそうな素材。
28-2	H6		148	素材	D3	黒耀石	—	3.0	1.9	0.9	4.1	MM II H6住a区下層	扁平で側面に自然面を残す。
32-1	H7		155	石核	—	黒耀石	—	3.4	2.8	1.8	14.5	H7住a区中層	不純物を多く含む白濁した素材で自然面を残す。上下側面より小さな面積での剥離が行なわれ、サイコロ様の不定形を呈する。
32-2	H7		11	石鏃	製品欠損 飛行機鏃か	黒耀石	片脚欠	2.9	1.2	0.3	0.7	MM II H7住c区	漆黒色の不純物の少ない素材を使用し、丁寧な剥離を施す。本遺跡出土石鏃中で最も大きな平面形態。
32-3	H7		3	石鏃	製品 凹基鏃	黒耀石	完存	2.0	1.2	0.3	0.4	MM II H7住c区	透明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
32-4	H7		13	石鏃	製品欠損 凹基鏃	黒耀石	先端部僅欠	2.2	1.5	0.4	0.4	MM II H7住c区下層	透明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
32-5	H7		2	石鏃	製品 凹基鏃	黒耀石	完存	1.8	1.5	0.4	0.5	MM II H7住貼床	透明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
32-6	H7		16	石鏃	製品欠損	黒耀石	片脚残	2.1	1.4	0.4	0.8	MM II H7住d区上層	僅かに不純物を含む素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
32-7	H7		18	石鏃	製品欠損 凹基鏃	黒耀石	片脚僅欠	1.6	(1.2)	0.3	0.4	MM II H7住貼床	透明度の高い素材を使用し、粗めな剥離を施す。
39-8	H7		14	石鏃	製品欠損	黒耀石	先端・片脚 僅欠	1.2	1.2	0.4	0.4	MM II H7住a区上層	不純物の少ない素材を使用し、丁寧な剥離を施す。本遺跡出土石鏃中で最も小さな平面形態。
32-9	H7		17	石鏃	製品欠損	黒耀石	基部欠	1.7	(0.8)	0.3	0.3	MM II H7住d区下層	丁寧な剥離を施す。
32-10	H7		12	石鏃	製品欠損 平基鏃	黒耀石	基部端部 僅欠	2.6	1.6	0.4	1.0	MM II H7住b区上層	表面は丁寧な剥離を施すが、裏面は主要剥離面を広く残し縁辺に細かい剥離調整を施す。
32-11	H7		19	石鏃	製品欠損 平基鏃	黒耀石	基部・端部 欠	2.0	(1.5)	0.5	0.7	MM II H7住a区上層	不純物の多い素材を使用し、表面は粗い剥離を施すが裏面は丁寧な剥離を施す。
32-12	H7		15	石鏃	製品欠損 平基鏃	黒耀石	基部・先端 部僅欠	2.0	1.6	0.5	1.2	MM II H7住貼床	黒色の縞を持つ素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
32-13	H7		4	石鏃	製品 平基鏃	黒耀石	完存	1.8	1.5	0.4	1.0	MM II H7住a区上層	透明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離が施される。
32-14	H7		5	石鏃	製品	黒耀石	完存	2.3	1.2	0.7	1.4	MM II H7住貼床	小型の尖頭器様の形態を持ち、丁寧な剥離を施す。
32-15	H7		35	石鏃	未製品	黒耀石		2.2	2.0	0.9	3.1	MM II H7住検出面	表面の自然面の角度を生かし、粗い剥離により厚めの外形を作出する。
32-16	H7		34	石鏃	未製品	黒耀石		3.3	2.0	1.0	4.1	MM II H7住貼床	細かい縞を持つ素材を使用し、粗い剥離で厚めの外形を作出する。
32-17	H7		51	石鏃	未製 欠損品	黒耀石	基部僅欠	1.8	(1.9)	0.5	0.9	MM II H7住a区上層	不純物の無い素材を使用し表裏全面に丁寧な剥離調整を施した後、周縁よりの細かい剥離調整中に裏面下方周縁よりの打撃により基部欠損に至り製作を中断したと考えられる。
32-18	H7		53	石鏃	未製 欠損品	黒耀石	縦位半欠	2.0	1.4	0.4	0.7	MM II H7住b区上層	透明度の高い素材を使用し、表裏全面に丁寧な剥離調整を施した後、正面周縁よりの細かい剥離調整中に縦位切断に至り製作を中断したと考えられる。
32-19	H7		52	石鏃	未製欠損 凹基鏃	黒耀石	片脚欠	2.7	1.7	0.7	1.8	MM II H7住床直	透明度の高い大きな素材を使用し、表裏全面に粗い剥離を施し、中央の厚い部分の整形中に表面中央よりの打撃により片脚を大きく欠損したことで製作を中断したと考えられる。

第7表 掲載石器観察表（黒耀石・石英）

掲載No	遺構	現場No	整理No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm)			質量 (g)	注 記	備 考
								長さ	幅	厚さ			
32-20	H7		50	石鏃	未製欠損品	黒耀石	横位半欠	2.0	1.3	0.4	0.5	MM II H7住床直	透明度の高い素材を使用し正面の粗い剥離による整形中に、中央より横位に切断したことで製作を中断したと考えられる。
32-21	H7		49	石鏃	未製欠損品	黒耀石	先端部欠	1.6	1.6	0.4	1.3	MM II H7住床直	表表面に主要剥離面を広く残す素材を使用し、正面片側縁に細かい剥離調整を施すが、裏面からの打撃により横位に切断したことで製作を中断したと考えられる。
32-22	H7		138	素材	D2	黒耀石	—	2.5	1.5	0.6	1.6	MM II H7住c区下層	断面扁平三角形で不純物をやや含み、裏面に節理面を残す。
33-1	H7		139	素材	D2	黒耀石	—	2.5	1.4	0.6	1.9	MM II H7住c区	断面扁平三角形で裏面に主要剥離を残す。
33-2	H7		140	素材	D2	黒耀石	—	2.4	2.0	0.7	1.9	MM II H7住c区	断面扁平三角形で下側面に自然面を残す。
33-3	H7		134	素材	D2	黒耀石	—	2.0	1.8	0.6	1.6	MM II H7住P2	断面三角形で表面に自然面を残す。
33-4	H7		137	素材	D2	黒耀石	—	3.0	1.1	0.7	2.3	MM II H7住b区下層	断面三角形で不純物をやや含む。
33-5	H7		135	素材	D2	黒耀石	—	2.6	1.3	0.9	3.0	MM II H7住床	断面三角形で不純物をやや含む。
33-6	H7		136	素材	D2	黒耀石	—	3.0	2.0	0.7	2.8	MM II H7住a区上層	断面三角形で不純物をやや含む。
33-7	H7		149	素材	D3	黒耀石	—	2.4	2.4	1.0	5.3	MM II H7住b区下層	断面三角形で、上面と側面に自然面を残す。
33-8	H7		85	素材	A2	黒耀石	—	4.1	1.8	1.0	5.0	MM II H7住b区上層	表裏側面に自然面を残し、方側縁に広い剥離を施し整形する。
33-9	H7		84	素材	A2	黒耀石	—	4.2	1.8	0.9	7.1	MM II H7住床	表側面に自然面を残し不純物を多く含む素材。
33-10	H7		8	石錐	製品	石英	端部僅欠	2.7	0.7	0.5	0.8	MM II H7住c区	全面に浅く細かい剥離を丁寧に施す。
33-11	H7		64	石錐	未製欠損	黒耀石	側縁一部欠	3.5	1.1	0.8	1.9	MM II H7住b区上層	先端と両側面に自然面を残す素材を使用し、側縁からの細かい剥離調整中に、正面中央側縁からの打撃により、横位切断したことで製作を中断したと考えられる。
33-12	H7		68	剥片	Rf	黒耀石	—	3.5	1.6	0.6	1.7	MM II H7住c区	片側面に自然面を残し、不純物の多い薄い剥片の片側縁に連続する細かい剥離調整を施す。
33-13	H7		69	剥片	Rf	黒耀石	—	2.3	1.5	0.6	1.6	MM II H7住床直	片側面と裏面に自然面を残し、他の側面に節理面を残す剥片を使用し、先端から片側縁に連続する細かい剥離調整を施す。
33-14	H7		48	スクレパー	製品	黒耀石	完存	2.1	1.8	0.7	2.2	MM II H7住a区上層	全体に粗い剥離の後、側縁に丁寧な剥離を施す。
33-15	H7		47	スクレパー	製品	黒耀石	完存	2.1	1.7	0.8	2.6	MM II H7住a区上層	全体に粗い剥離の後、側縁に丁寧な剥離を施し、上側面に自然面を持つ。
34-1	H7		78	素材	A1	黒耀石	—	4.2	2.3	1.9	14.5	MM II H7住床	表面に広く自然面を残し、他面に粗い剥離を施す。
34-2	H7		77	素材	A1	黒耀石	—	3.3	2.2	1.2	7.1	MM II H7住d区下層	表面に広く自然面を残し、他面に粗い剥離を施す。
34-3	H7		95	素材	B1	黒耀石	—	3.2	2.4	0.8	6.9	MM II H7住b区下層	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
34-4	H7		97	素材	B1	黒耀石	—	3.3	2.1	1.3	8.2	MM II H7住床直	断面三角形で、表面と片側面に自然面を残す。
34-5	H7		80	素材	A1	黒耀石	—	3.0	2.2	1.4	8.5	MM II H7住後出面	表裏面に自然面を残す。
34-6	H7		99	素材	B1	黒耀石	—	3.5	2.3	0.7	6.4	MM II H7住床	断面かまぼこ形で、表面に自然面を残す。
34-7	H7		79	素材	A1	黒耀石	—	2.1	2.1	1.1	7.2	MM II H7住床c区	裏面と上側面に自然面を残す。
34-8	H7		96	素材	B1	黒耀石	—	3.0	2.0	0.8	4.4	MM II H7住c区	全面に粗い剥離の後、片側縁に細かい剥離調整を施し、断面三角形に整形する。
34-9	H7		98	素材	B1	黒耀石	—	2.9	1.7	1.3	3.2	MM II H7住b区上層	白濁の縞を持つ素材で断面三角形で、片側面に自然面を残す。
34-10	H7		115	素材	D1	黒耀石	—	2.5	2.1	0.6	2.5	MM II H7住c区	断面扁平で不純物は含まず、裏面左下側縁に自然面を残す。
34-11	H7		119	素材	D1	黒耀石	—	2.2	1.8	0.8	2.5	MM II H7住a区下層	断面三角形で、正面と側面に自然面を残す。
34-12	H7		116	素材	D1	黒耀石	—	2.5	1.5	0.8	2.8	MM II H7住床直	断面三角形で、下側面に自然面を残す。
34-13	H7		114	素材	D1	黒耀石	—	1.9	1.5	1.1	2.8	MM II H7住b区下層	断面三角形で、裏面に自然面を残す。
34-14	H7		117	素材	D1	黒耀石	—	2.2	2.0	0.9	3.7	MM II H7住c区	断面扁平で不純物をやや含み、側面に自然面を残す。
34-15	H7		118	素材	D1	黒耀石	—	1.9	1.8	1.0	2.4	MM II H7住b区上層	断面扁平で不純物をやや含む。
34-16	H7		113	素材	D1	黒耀石	—	2.3	1.7	0.9	3.1	MM II H7住床直	断面三角形で正面と側面に自然面を残す。
39-1	H8	14-1	6	石鏃	製品凹基鏃	黒耀石	完存	2.4	1.8	0.5	0.9	MM II H8住No14-1	透明度の高い素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
39-2	H8	14	25	石鏃	製品欠損	黒耀石	端部半欠	<2.1>	1.6	0.5	0.7	MM II H8住No14	黒色の縞を持つ素材を使用し、粗い剥離を施す。
39-3	H8	14	23	石鏃	製品欠損凹基鏃	黒耀石	片脚端部欠	1.7	<1.4>	0.4	0.4	MM II H8住No14	不純物のやや多い素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
39-4	H8	14-2	7	石鏃	製品凹基鏃	黒耀石	完存	1.3	1.2	0.3	0.3	MM II H8住No14-2	漆黒色の素材を使用し、丁寧な剥離を施す。
39-5	H8	14	24	石鏃	製品欠損	黒耀石	基部端部欠	1.7	1.4	0.4	0.7	MM II H8住No14	不純物のやや多い素材を使用し、表裏面に丁寧な剥離を施す。
39-6	H8		20	石鏃	製品欠損	黒耀石	基部端部片側縁欠	<2.0>	2.1	0.5	1.3	MM II H8住	不純物の多い素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
39-7	H8		59	石鏃	未製欠損品	黒耀石	先端部欠	2.2	2.1	0.6	2.2	MM II H8住No14	不純物をやや含む厚手の素材を使用し、表裏全面に粗い剥離調整を施した後、周縁からの剥離調整中に正面よりの打撃により先端部を切断し、製作を中断したと考えられる。
39-8	H8		21	石鏃	製品欠損平基鏃	黒耀石	先端部欠	1.9	1.8	0.3	0.6	MM II H8住	不純物のやや多い素材を使用するが、丁寧な剥離を施す。
39-9	H8	14	22	石鏃	製品欠損平基鏃	黒耀石	基部端部僅欠	2.1	1.5	0.3	0.7	MM II H8住No14	黒色の縞を持つ素材を使用し、粗い剥離を施す。
39-10	H8		37	石鏃	未製品	黒耀石	—	2.1	1.3	0.4	1.0	MM II H8住	表裏面に自然面を持つ薄い素材を使用する。

第8表 掲載石器観察表（黒耀石・石英）

掲載No	遺構	現場No	検出No	種別	器種分類	石質	残存度	法量 (cm)			質量 (g)	注 記	備 考
								長さ	幅	厚さ			
39-11	H8		54	石鏃	未製欠損品	黒耀石	縦位半欠	1.6	1.0	0.3	0.4	MM II H8住	透明度が高く下側面に自然面を持つ小さな素材を使用し、周辺剥離調整中に中央縦位に切断したことで製作を中断したと考えられる。
39-12	H8		57	石鏃	未製欠損品	黒耀石	横位半欠	1.3	1.3	0.4	0.5	MM II H8住No3	透明度の高い素材を使用し、表裏面に主要剥離面を広く残り周縁に表裏交互剥離による調整中に横位切断に至る。その後も切断面に細かい調整を施し製作を続行するが正面中央からの打撃により縦位切断に至り、製作を中断したと考えられる。
39-13	H8		58	石鏃	未製欠損品	黒耀石	横位半欠	1.4	1.5	0.4	0.4	MM II H8住	不純物の無い素材を使用し、表裏面に広く主要剥離面を残し、周縁の細かい剥離調整中に裏面中央からの打撃により、横位切断に至り製作を中断したと考えられる。
39-14	H8		55	石鏃	未製欠損品	黒耀石	横位半欠	1.5	1.9	0.5	0.8	MM II H8住	透明度が高く黒い縞を持つ素材を使用し、表裏面に広く主要剥離面を残し、周縁よりの剥離調整中に右側縁からの打撃により横位切断したことで製作を中断したと考えられる。
39-15	H8		56	石鏃	未製品	黒耀石		2.2	1.8	0.5	1.6	MM II H8住	透明度が高く、裏面に節理面を正面に旧剥離面を残す素材を使用し、周縁よりやや細かい剥離調整を施す。
39-16	H8		36	石鏃	未製品	黒耀石		2.8	1.9	0.4	1.8	MM II H8住	黒い縞を持つ素材を使用し、側面に自然面を持つ。
39-17	H8		38	石鏃	未製品	黒耀石		3.0	2.5	1.2	7.3	MM II H8住	不純物を少量含む厚い素材を使用する。
40-1	H8		103	素材	B1	黒耀石	—	3.6	2.1	1.0	6.3	MM II H8住	全面に粗い剥離を施し、断面三角形に整形する。
40-2	H8		101	素材	B1	黒耀石	—	3.5	2.4	1.1	7.2	MM II H8住	断面三角形で右側面に自然面を残す。
40-3	H8		100	素材	B1	黒耀石	—	3.1	2.2	0.9	5.7	MM II H8住	断面三角形で右側面に自然面を残す。
40-4	H8		121	素材	D1	黒耀石	—	2.2	1.3	1.0	3.1	MM II H8住	断面三角形で、上側面に節理面を残す。
40-5	H8		120	素材	D1	黒耀石	—	2.2	1.7	1.3	5.0	MM II H8住	サイコロ様で、正面と上面に自然面を残す。
40-6	H8		102	素材	B1	黒耀石	—	3.5	2.4	1.3	8.0	MM II H8住	白濁の縞を持つ素材で断面三角形で、上側面に自然面を残す。
40-7	H8		141	素材	D2	黒耀石	—	2.4	1.6	0.6	2.4	MM II H8住	断面扁平三角形で不純物をやや含む、左側面と正面に自然面を残す。
40-8	H8		142	素材	D2	黒耀石	—	2.2	1.8	0.7	3.7	MM II H8住	断面三角形で、裏面に自然面を残す。
40-9	H8		87	素材	A2	黒耀石	—	4.4	2.3	1.2	10.1	MM II H8住	側面に自然面を残し不純物をやや含む素材。
40-10	H8		86	素材	A2	黒耀石	—	4.6	2.0	1.2	9.2	MM II H8住	上下端に自然面を残し、表裏側面に広い剥離を施し整形する。
40-11	H8		65	石錐	製品	黒耀石	端部欠	3.7	1.5	0.8	2.9	MM II H8住	右上側面に節理面を残したまま周縁から丁寧な剥離調整を施し、特に先端部は尖頭形に細く整形される。
45-1	H10		151	素材	D3	黒耀石	—	2.7	1.7	1.3	6.4	MM II H10住	サイコロ様で自然面を一部に残し、不純物を含む赤茶色の縞を持つ素材。
45-2	H10		157	石鏃	製品欠損凹基鏃	黒耀石	片脚端部欠損	2.0	1.5	0.3	0.8	H10住サブトレ	裏面中央に自然面を残すが、丁寧な剥離を施す。
45-3	H10		156	石鏃	製品欠損凹基鏃	黒耀石	片脚欠損	2.3	1.8	0.3	0.8	H10住d区	丁寧な剥離を施す。
45-4	H10		124	素材	D1	黒耀石	—	2.3	1.8	0.8	2.7	MM II H10住	断面扁平で不純物を多く含む。
45-5	H10		144	素材	D2	黒耀石	—	2.5	1.8	0.5	2.1	MM II H10住d区	断面扁平三角形で不純物をやや含む。
45-6	H10		125	素材	D1	黒耀石	—	2.7	1.9	1.1	5.3	MM II H10住	サイコロ様で、正面に自然面を残す。
45-7	H10		123	素材	D1	黒耀石	—	2.6	2.2	1.1	5.2	MM II H10住	サイコロ様で、裏面に節理面を残す。
45-8	H10		108	素材	C1	黒耀石	—	3.2	1.5	1.0	3.8	MM II H10住	不純物を多く含む両側面に自然面を残す。
48-2	D14		145	素材	D2	黒耀石	—	2.2	1.6	0.5	1.9	MM II D14	断面扁平三角形で下側面に自然面を残す。
49-1	D15		146	素材	D2	黒耀石	—	1.8	1.9	0.7	1.9	MM II D15	断面扁平で不純物をやや含む。
51-2	D17		60	石鏃	未製欠損品	黒耀石	縦位半欠	2.8	1.3	0.8	1.8	MM II D17	不純物が多く裏面に主要剥離面を広く残す素材を使用し、正面全面に粗い剥離調整を施し、周縁よりのやや粗い剥離調整中に裏面からの打撃により縦位切断に至り製作を中断したと考えられる。
52-1	D18		70	剥片	Rf	黒耀石	—	1.5	1.4	0.7	1.3	MM II D18	正面に旧剥離面を残す小さな剥片の片側縁に連続する剥離調整を施す。

## 第V章 総括

本遺跡の発掘調査によって検出された遺構は縄文時代前期から弥生時代・古墳時代を経て奈良・平安時代～中世にいたる住居址10棟及び土坑址21基などであった。調査区が狭長でありながらかくも多くの遺構が検出されたことによって、周辺は密度の濃い遺構分布を示すものと思われる。

町横尾遺跡はこれまでの分布調査、本調査及び試掘調査によって縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられていた。ことに奈良～平安時代にかけては検出遺構数も多く、この遺跡の主体的な時期を示すものとして理解されていた。また、近隣に所在する保地遺跡の存在から縄文時代後晩期の遺跡が広がる可能性をも秘めた遺跡であった。

今回の発掘調査では縄文時代後晩期に属する遺構・遺物は確認されなかったが、これまで町横尾遺跡では知られていなかったいくつかの事例を確認することができた。これらを踏まえつつ今回の調査成果を概観する。

まず、新知見としてあげることができるのが縄文時代前期の遺構・遺物の発見である。住居址3棟のほか、土坑を2基確認した。住居址からは関山期の土器片をはじめ、数多くの黒耀石製鏃や未製品及びチップなどが出土した。調査範囲が限られていたため、集落構造などは知るすべも無いが、かつてこの地で黒耀石製の石鏃を作りながら狩猟を行っていた人々が暮らしていたことが確認できた。

次に指摘できるのは弥生時代後期の住居跡の存在である。従来、現坂城中学校付近の宮上遺跡Ⅱや、テクノサキ工業団地付近の塚田遺跡Ⅱが弥生時代の集落跡として知られていたが、山裾に近い本調査地点まで弥生時代に住居が作られていたことは新たな発見といえる。加えて、本調査地点から石包丁が出土したことが注目される。本遺跡内には水田に適した場所は確認し得ないので、谷川の開口部付近の塚田遺跡Ⅱ周辺に水田を営んでいたのであろうか。

さらに、今回の調査では古墳時代の住居址（H4・10号住居址）が確認された。これまでの調査で当該期の遺構は確認されていなかったため、初の検出となった。坂城町では中之条地区の宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳや寺浦遺跡Ⅱなどが古墳時代後期の集落址として顕著であるが、町横尾遺跡周辺においても集落が形成されていたかといった点については、今回の発掘調査結果からは不明と言わざるを得ない。なお、H4号住居址からは、槍型の石製品（22-2）が出土しているが帰属時期や用途は不明である。

先にも述べたが、本遺跡は奈良～平安時代にかけてが主体的な時期となり、今回の調査でも当該期の住居址を4棟検出した。今回の調査で特筆すべきは、H6号住居址から出土した墨書土器である。須恵器の坏に描かれたそれは「継」の一文字が読み取れ、その文字の前にも一文字存在していることから「□継」となり、人名の可能性（平川南氏教示）がある。近接する寺浦遺跡において当該期の掘立柱建物群が検出されていることから、当地にも役人的な人物が暮らしていた可能性が指摘できよう。このほか、床面付近から扁平な石材を多く出土した住居址（H6号住居址）の存在から、鉄製品など製造・加工する工房的なものの存在も予測されるが現段階では想像の域を出ない。

最後に、本町横尾遺跡と谷川を挟んだ対岸に所在する金井東遺跡群も町横尾遺跡とほぼ同様の時期の遺跡である。今回の調査成果を踏まえて、両遺跡の時期的や性格的な問題を比較検討して、谷川水系の古代社会の環境を分析する必要があるだろう。また、本調査地点から北に約1km離れた場所に所在する開畝遺跡も小河川付近に展開する集落址である。河川をはじめとする自然環境と、古代集落の関係についても科学的分析を行っていく必要があるだろう。

# 写 真 图 版



調査区全景（南より）



H1号住居址（西より）



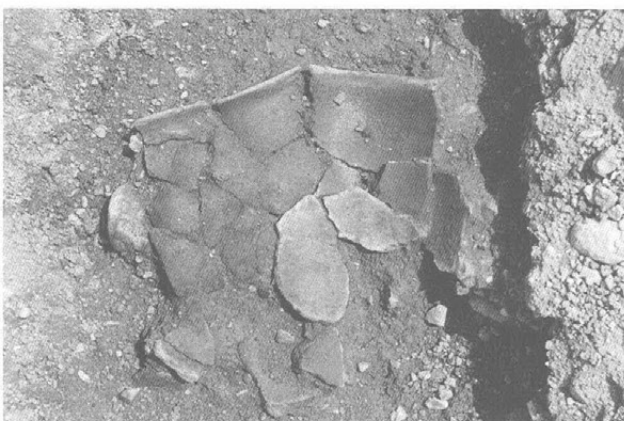
H2号住居址（西より）



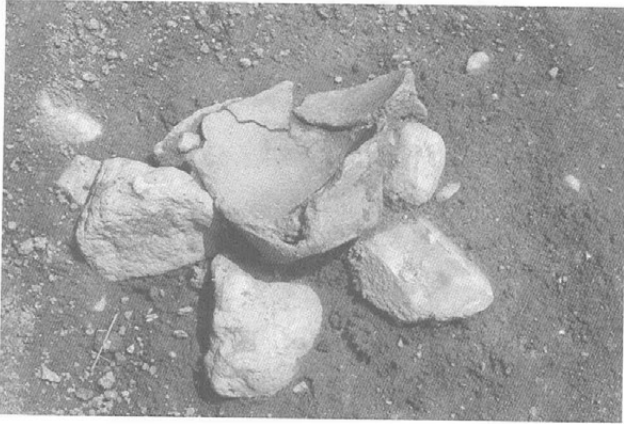
H3号住居址（南東より）



H4号住居址（西より）



H4号住居址遺物出土状況（北より）



H 4 号住居址遺物出土状況（南西より）



H 4 号住居址掘り方完掘状況（西より）



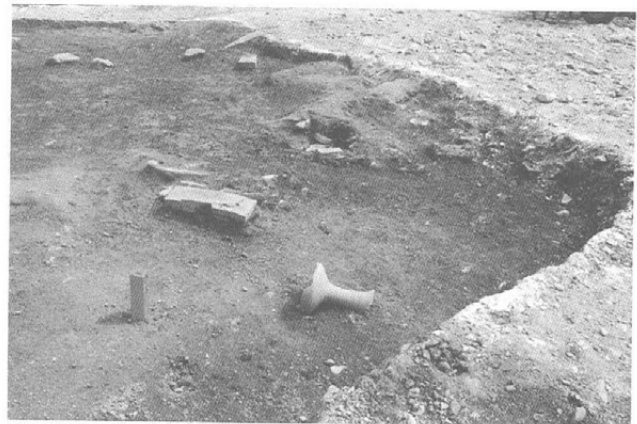
H 5 号住居址（南より）



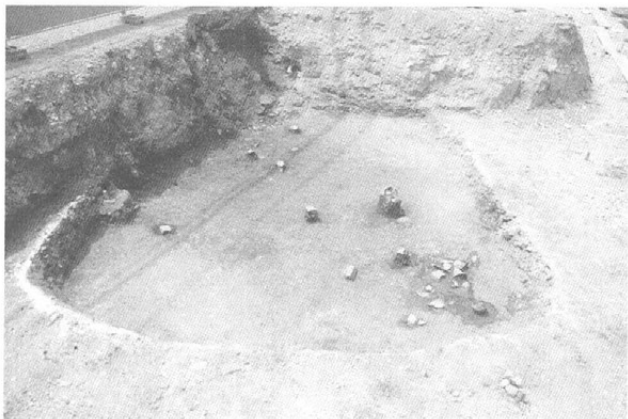
H 5 号住居址カマド（南より）



H 6 号住居址（西より）



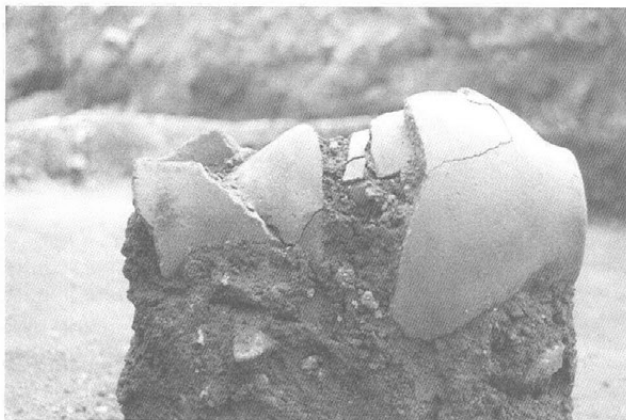
H 6 号住居址遺物出土状況（南西より）



H 7 号住居址 (南東より)



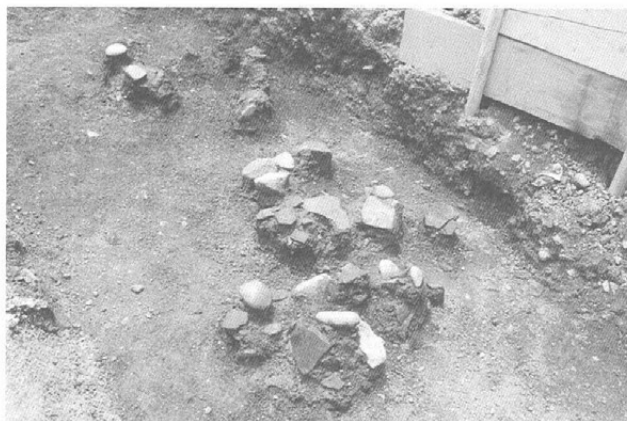
H 7 号住居址遺物出土状況 (東より)



H 7 号住居址遺物出土状況 (東より)



H 8 号住居址 (東より)



H 8 号住居址遺物出土状況 (北東より)



H 9 号住居址 (北東より)





H10号住居址（西より）



H10号住居址遺物出土状況（南より）



1号集石遺構（南より）



D14号土坑址遺物出土状況（南より）



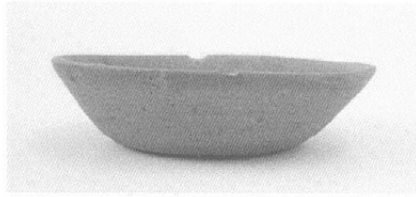
作業風景（北より）



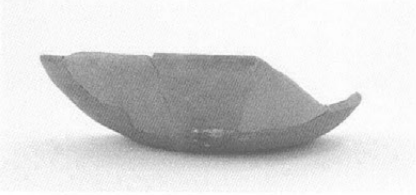
調査参加者



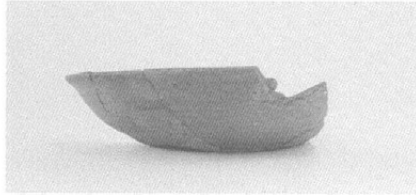
7-1



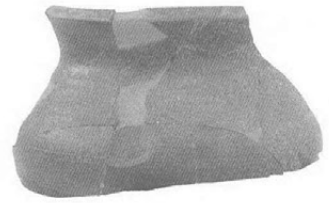
7-2



7-3

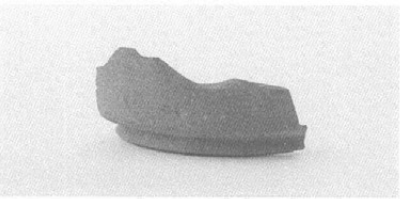


7-4

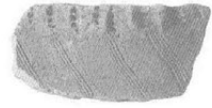


7-6

H 1 号住居址出土土器 (1 : 3)



10-1



11-1

H 2 号住居址出土土器 (1 : 3)



14-1



14-2



14-3



14-4



14-5



14-6



14-7



14-8



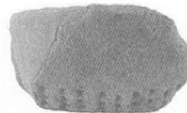
14-12



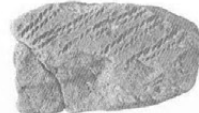
14-13



14-14



14-9



14-10



14-11



14-15



14-17



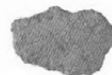
14-18



14-19



14-20



14-21



14-22



14-16

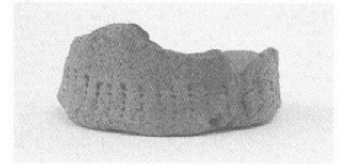
H 3 号住居址出土土器 (1 : 3)



20-1

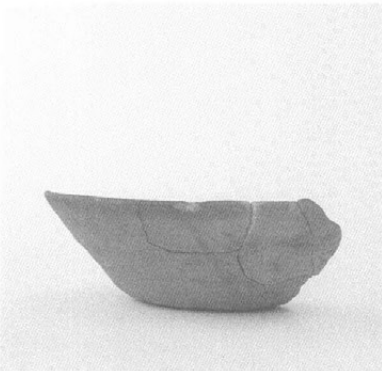


20-2

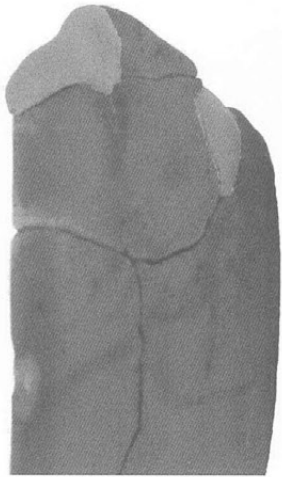


21-1

H 4号住居址出土土器 (1:3)



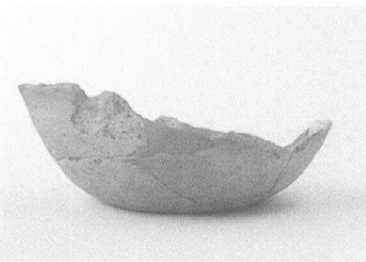
27-1



27-1 (墨書部分)



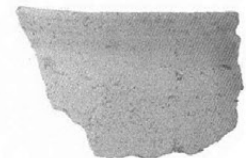
27-2



27-3



27-4

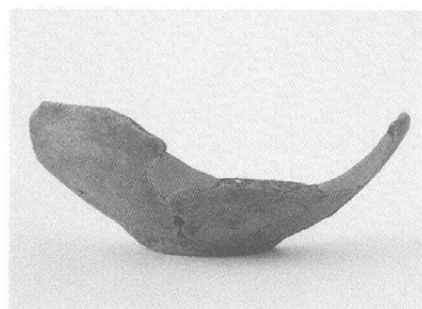


27-5

H 6号住居址出土土器 (1:3)



30-1



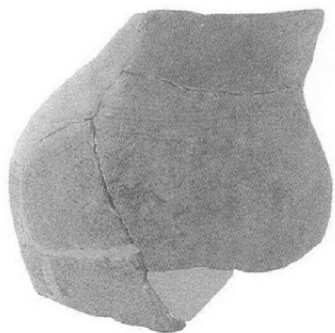
30-2



30-5



30-7

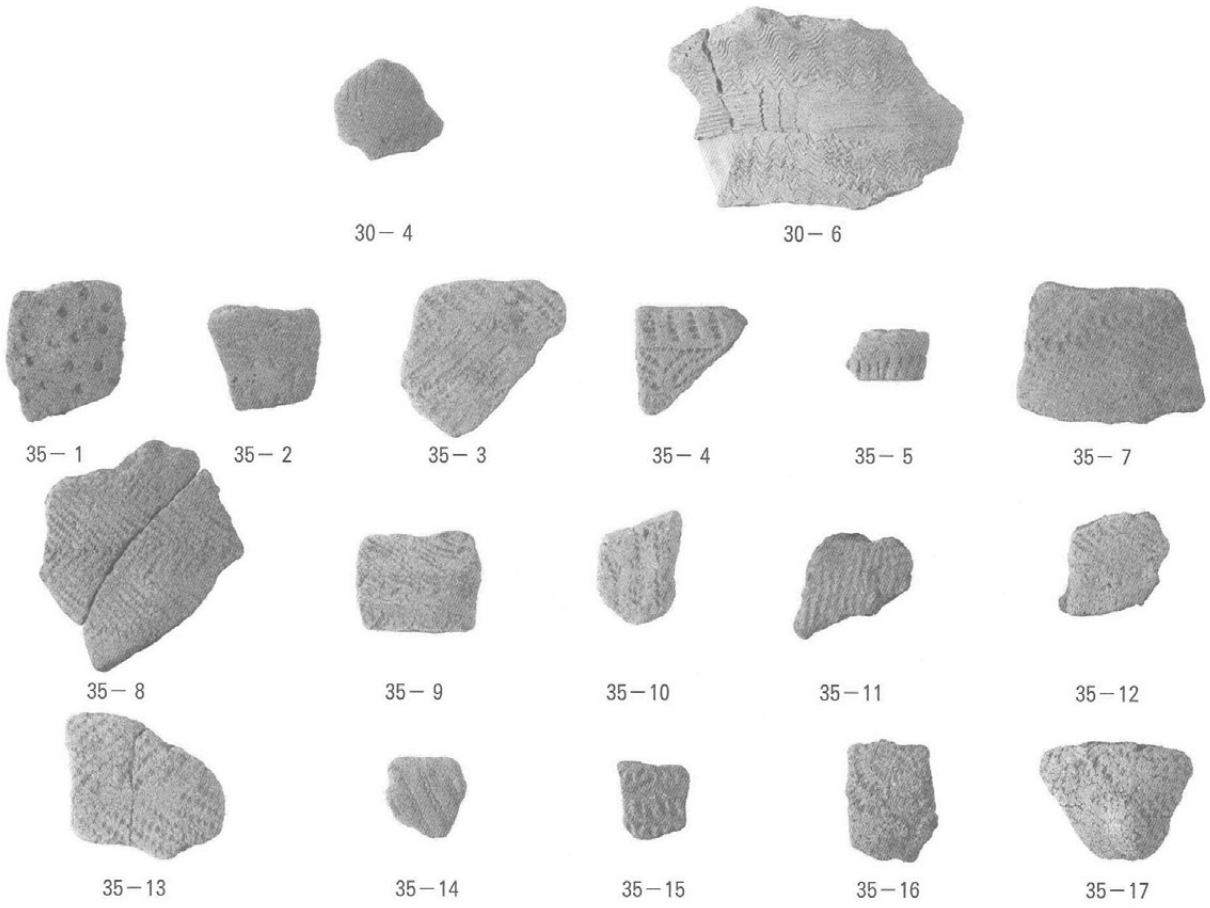


30-8

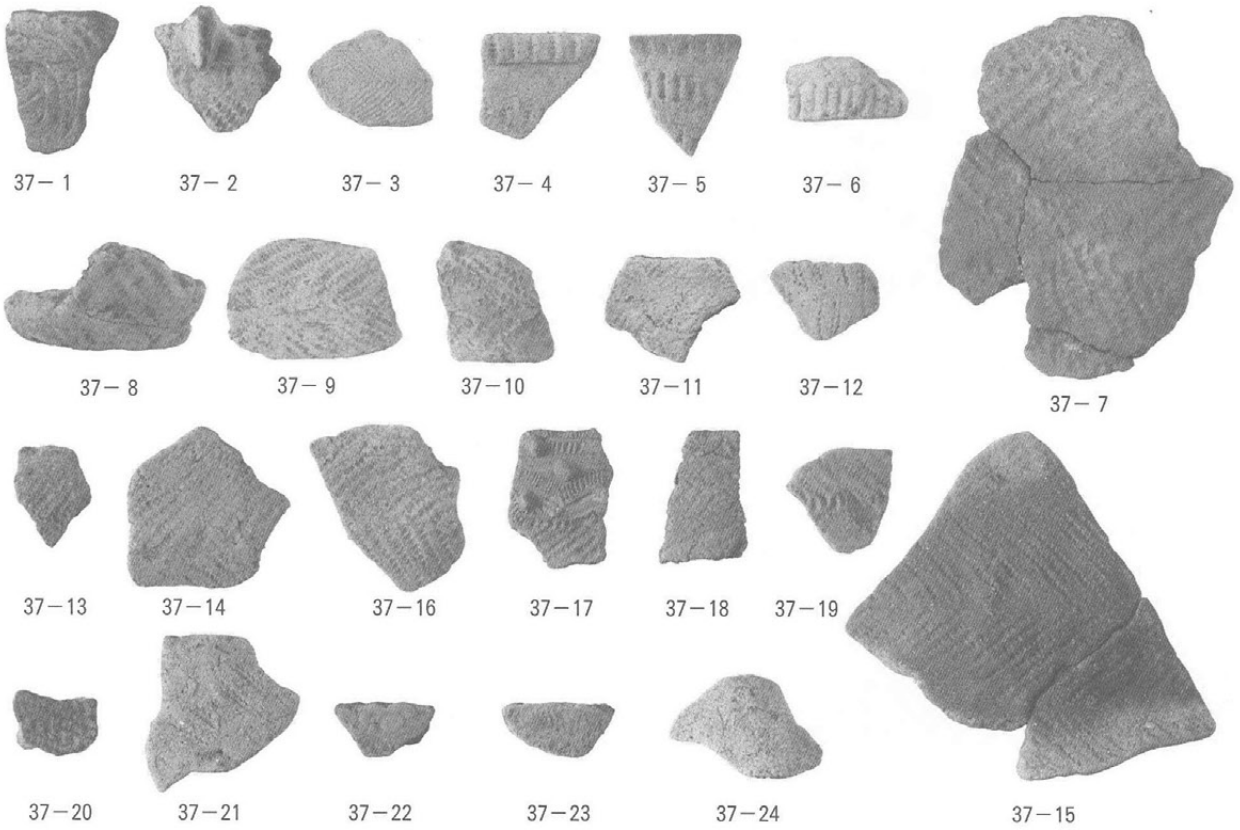


30-9

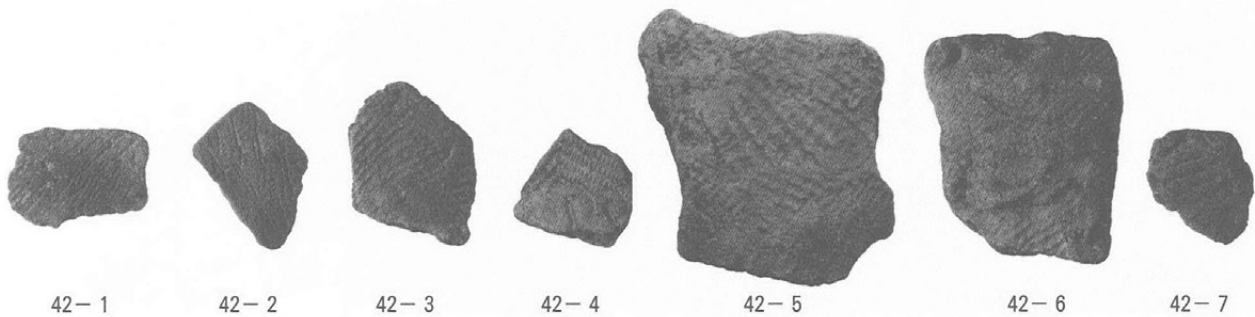
H 7 号住居址出土土器 1 (1 : 3)



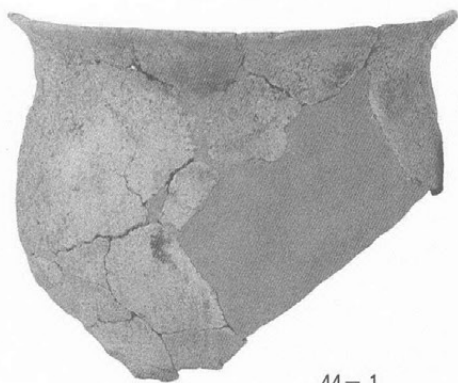
H 7 号住居址出土土器 2 (1 : 3)



H 8 号住居址出土土器 (1 : 3)



H 9号住居址出土土器 (1 : 3)



H10号住居址出土土器 (1 : 3)



D16号土坑址出土土器 (1 : 3)



D17号土坑址出土土器 (1 : 3)



D21号土坑址出土土器 (1 : 3)



8-1



8-2



8-3



8-4 (1:4)

H 1号住居址出土石器 (1:1)



12-1



12-2



12-5



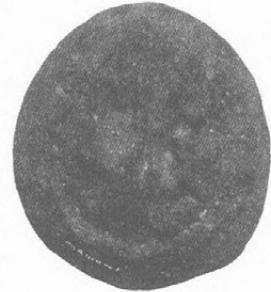
12-6 (1:4)



12-3



12-4



12-7 (1:4)

H 2号住居址出土石器 (1:1)

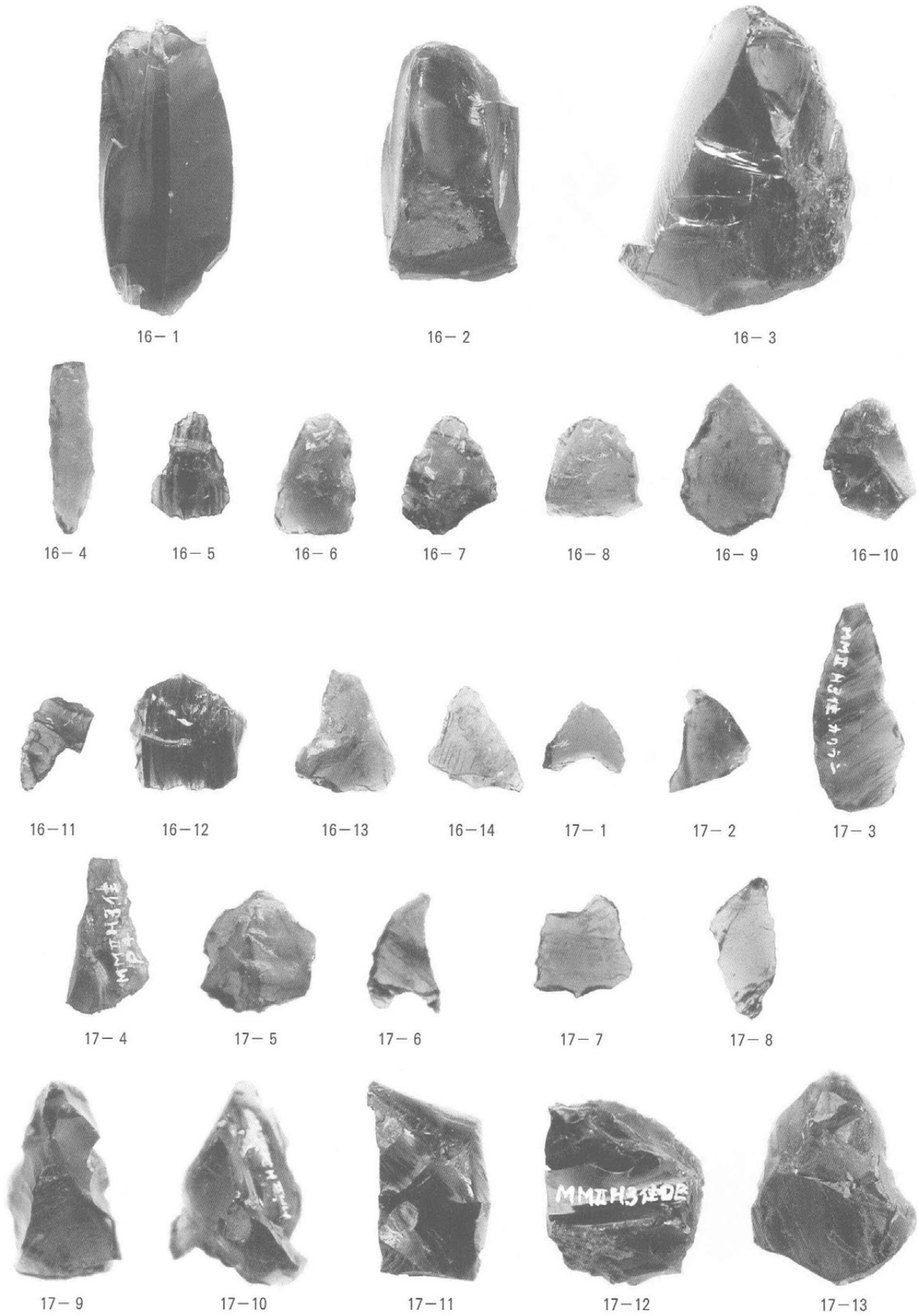


15-1



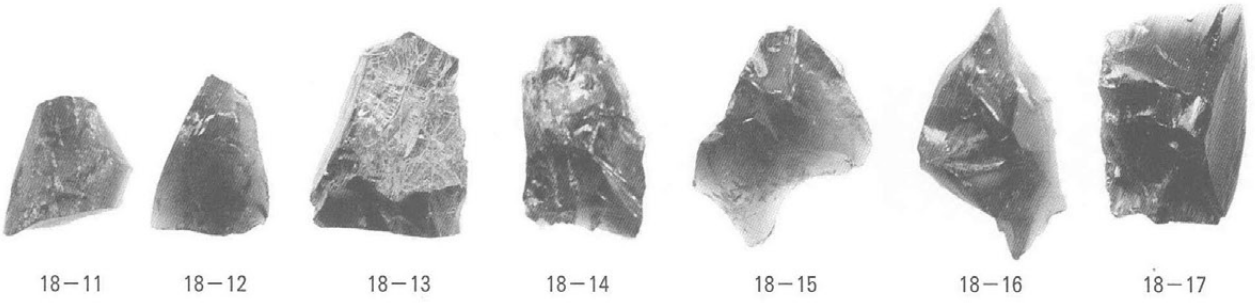
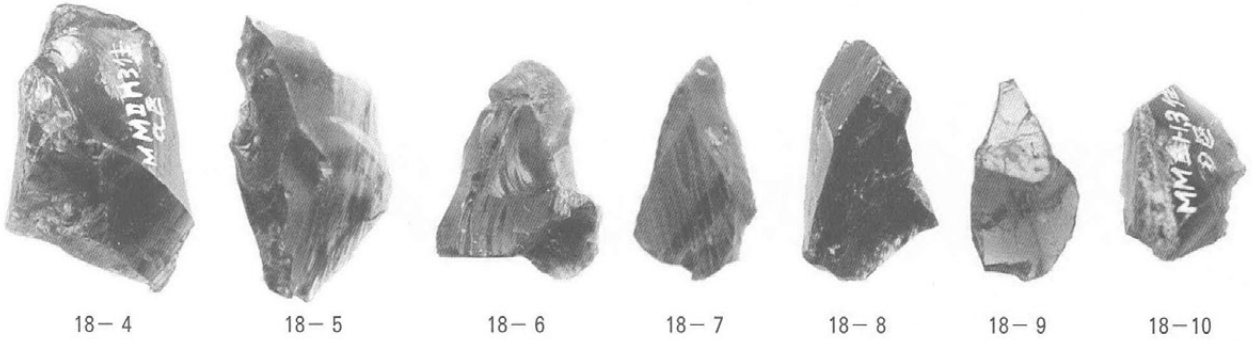
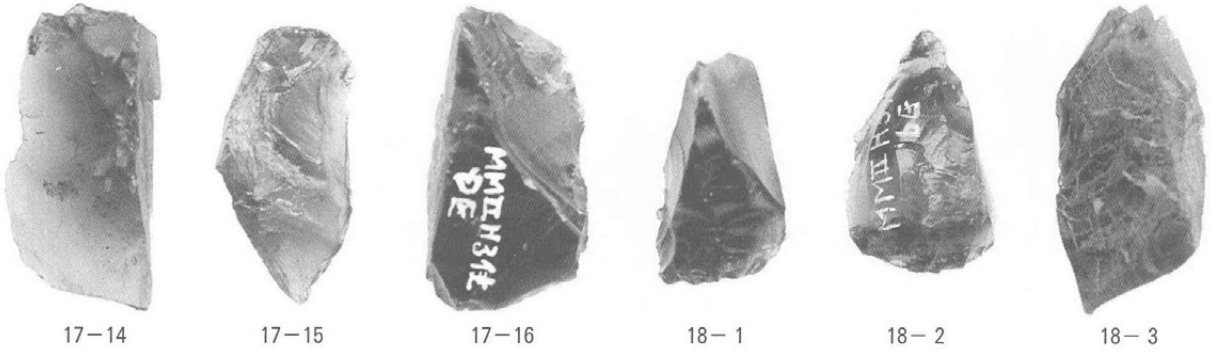
15-2

H 3号住居址出土石器 1 (1:4)

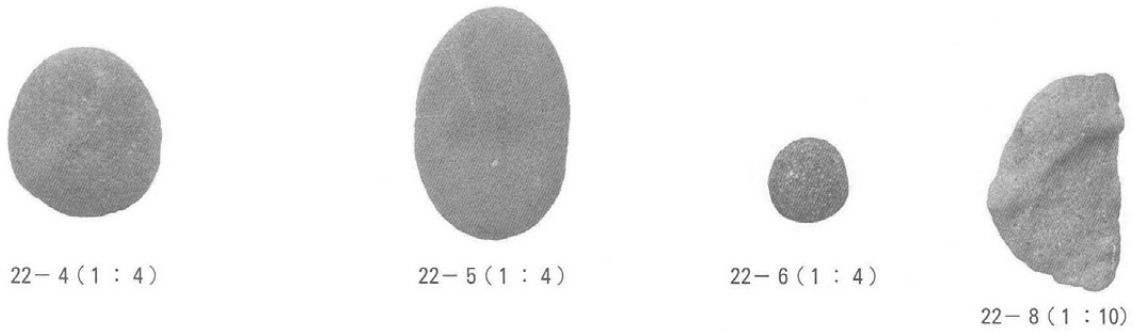
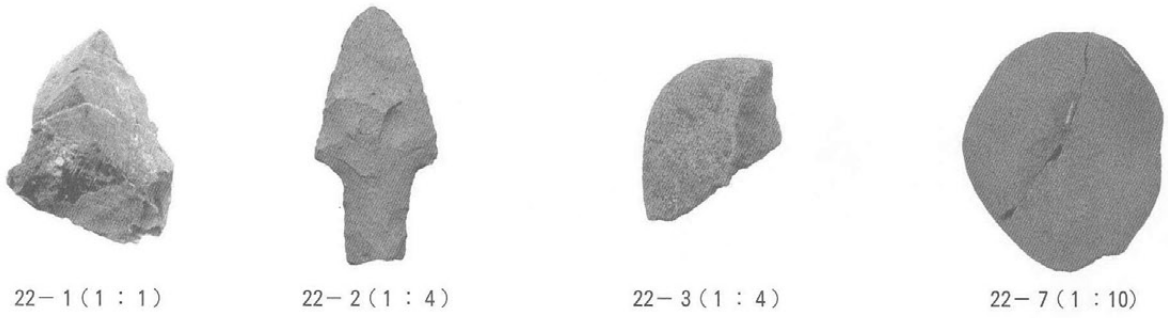


H 3 号住居址出土石器 2 (1 : 1)





H 3号住居址出土石器 3 (1 : 1)



H 4号住居址出土石器



25-1

H 5 号住居址出土石器 (1 : 4)



28-1

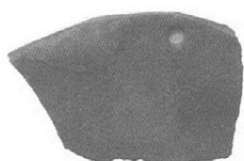


28-2



28-3 (1 : 10)

H 6 号住居址出土石器 (1 : 1)



31-1 (1 : 2)



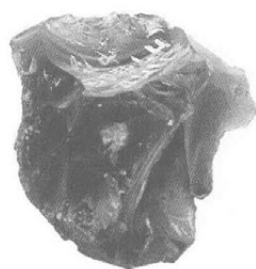
31-2 (1 : 2)



31-3 (1 : 4)



31-4 (1 : 4)



32-1



32-2



32-3



32-4



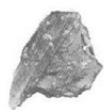
32-5



32-6



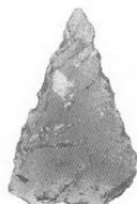
32-7



32-8



32-9



32-10



32-11



32-12

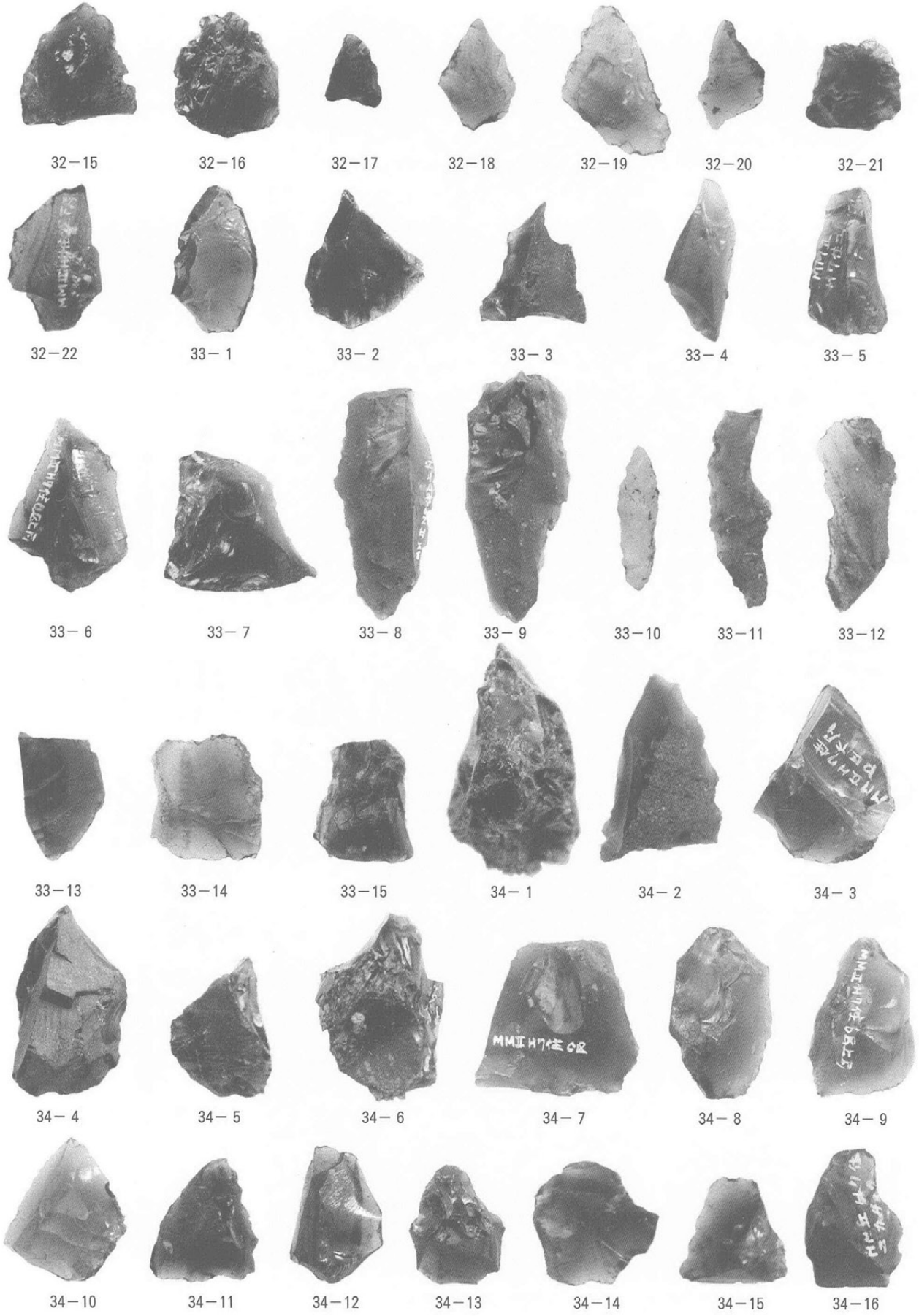


32-13



32-14

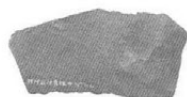
H 7 号住居址出土石器 1 (1 : 1)



H 7 号住居址出土石器 2 (1 : 1)



38-1 (1 : 4)



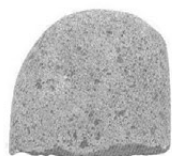
38-2 (1 : 4)



38-4 (1 : 4)



38-5 (1 : 4)



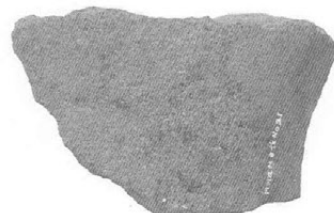
38-6 (1 : 4)



38-7 (1 : 4)



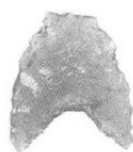
38-8 (1 : 4)



38-9 (1 : 4)



39-1



39-2



39-3



39-4



39-5



39-6



39-7



39-8



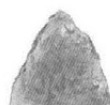
39-9



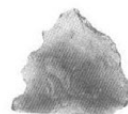
39-10



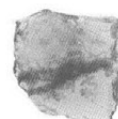
39-11



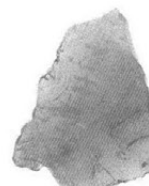
39-12



39-13



39-14



39-15



39-16



39-17



40-1



40-2



40-3



40-4



40-5



40-6



40-7



40-8



40-9



40-10



40-11

H 8 号住居址出土石器 (1 : 1)



45-1



45-2



45-3



45-4



45-5



45-6



45-7



45-8



45-9 (1 : 4)

H10号住居址出土石器 (1 : 1)



48-1



48-2



49-1



51-2

D14号土坑址出土遺物 (1 : 1)

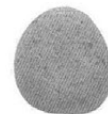
D15号土坑址出土遺物 (1 : 1)

D17号土坑址出土遺物 (1 : 1)



52-1

D18号土坑址出土遺物 (1 : 1)



53-3

D21号土坑址出土遺物 (1 : 1)

報告書抄録

ふりがな	まちよこおいせきに
書名	町横尾遺跡Ⅱ
副書名	長野県埴科郡坂城町坂都1号線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者名	助川 朋広・田中 浩江・時信 武史
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1 TEL 0268-82-1109
発行年月日	2008年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まちよこおいせきに 町横尾遺跡Ⅱ	はにしなぐんせきか まちよこおいせきに 埴科郡坂城町大字南条	20521		36°26'29"	138°11'39"	2007年6月5日～ 2008年3月28日	800㎡	坂都1号線道路改良事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町横尾遺跡Ⅱ	集落址	縄文～平安	竪穴住居址 10棟 土坑址 21基 集石遺構 1基 焼土址 1基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・古銭	縄文～古代の集落址の調査

## 坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡－第1次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡－第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Bほか 発掘調査報告書 1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊饒堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群 込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2006
第28集	『込山遺跡群 込山D遺跡』	2007
第29集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2006』	2007
第30集	『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2007
第31集	『開畝遺跡Ⅳ』	2008
第32集	『町横尾遺跡Ⅱ』（本書）	2008

---

### 坂城町埋蔵文化財調査報告書第32集

#### 町横尾遺跡Ⅱ

発行日	2008年3月28日
編集者	坂城町教育委員会
	〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1
	TEL 0268 (82) 1109
印刷者	信毎書籍印刷株式会社
	〒381-0037 長野県長野市西和田1丁目30番3号
	TEL 026 (243) 2105

---

